
魔法化猫 ネコま！

まーながるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法化猫 ネコま！

【Nコード】

N4486S

【作者名】

まーながるむ

【あらすじ】

タイトルで察して下さいという粗筋放棄。

独自解釈どころか原作に則るかどうかとも分からないままに好き勝手に描いていく予定です。

ノリとテンションだけで好き勝手します。

オリ主最強もの。

別名セルフエヴァ様分補給小説（

にゃにゃにゃん（前書き）

思いついたものを覚えておけるように書いたもの。
続きを投稿するのはずいぶん後になるでしょう。

にゃにゃにゃん

ニャーにゃーニャニャン、にゃにゃニャニャン。

ニャンにゃんニャニャニャン。ニャにゃニャにゃ？

にゃにゃニャン、にゃにゃニャン、にゃにゃにゃにゃにゃん。

うにゃ？

にゃにゃにゃんニャニャニャ、にゃにゃにゃにゃにゃ？

にゃにゃにゃ……

バシバシバシバシ……ガス！

すまんかった

にゃにゃにゃーにゃ

改めて

自己紹介する

にゃにゃにゃんにゃにゃ。

私の名前は

にゃにゃにゃにゃん……

まだ雑音が

ニャニャにゃんにゃん……にゃふん

ゴホン

てじなーにゃ

にゃにゃにゃーにゃ！

ゲシゲシ……ゲシ！

あ、あー……これで人語かの？

さっきはにゃーにゃーにゃーにゃーうるさくて悪かったのう……

私は猫じゃ！

なに？ 見ればわかる？ ふふん、猫は猫でも火星在住の化け猫

じゃ！ 正確に言うなら元・火星在住じゃがにゃ。

人間っぽくもなれるぞ！ まあ、尻尾と耳は隠せんがの。人語も

喋れんし。

え？ 今しゃべってるのは人語？ そりゃそうじゃろう。なんせ

カガクとかいう物に頼っておるからの。

にゃんと……なんと云ったかのう。えーとニャンリンガル？ と

か言うものじゃ

チャオシンエン

確か……超鈴音とかいうマッドなサイエンチストが餞別にくれたんじゃ。

まあ最近しょっちゅう壊れるから叩いて直しておるがの。

にゃんの餞別？ 「わくぷ」だったか「たいむすりっぱ」だったか、はたまたその両方か……私にはよく分からん言葉で話しておったからにゃにを言ってたのかよく分からなかった。

私のことを話せ？ ふふん、お主も私の魅力にメロメロなのじゃな？ いい、いい、なにも言わんでも私は分かっておる。照れるな、私も照れてしまうじゃにゃいか。

私の名前は……あー何だったかの。火星では化猫じゃ！ って言えば私のことじゃったから名前はよー覚えとらん。

まあクレオパトラでも、楊貴妃でも、ヘレネでも、どう読んだって構わんぞ？ 旧世界の三代美女らしいじゃにゃいか。

うん？ 調子に乗りすぎ？

そう言われても、私と同じ位の美貌を誇るのはこの三人くらい……というかコイツら昔の人間の観点で語られる美女だからのお……んーやっぱさっきの三つはなしじゃ！ きゃんせるじゃ！

改めて言いなおすぞ？

私の名前はないから……これにしよう、AKB48とかいう団体の言うところの大島優子じゃ。

でも個人的には渡辺麻友の方が可愛いと思うのお。

え、調子のんなアホ猫？

アホとはなんじゃアホとは！ 私は本当にヒイ！？ な、何じゃそのお主らの禍々しいオーラは！？

スマン、反省するから許してたもれ。

うん？ 許してたもれって言葉、ちょっと可愛いと思ったじゃろ？

……わたし、にゃんも言うてにゃいっすよ？

お、お主ら許容量狭いのお……私のぷらんではぱぱっと決まるはずだったのじゃが。

べ、別にいいではないかユウコとかマユとか名乗ったってお主に迷惑かかるわけじゃないんじゃから……

ただ、私の案はもう尽きてしまったんじゃが……うん？ 何じゃその箱は

く、じ、びき？ ほお、この中に名前の案が入っているから一枚選べとな。

だが断る。

なんで私の名前なのに適当に決められにやいとならんのだ！

でも作ってもらったものをポイするのはもったいないからの……引いてやってもかまわん。

……ちよつと萌えたんじやろ？

なあに、私は「つんでれ」とかいようなもの程度なら知っておるからの！

萌えてしまったのも恥ずかしいことでは、ウザいってなんじやウザいって！？

……分かったよお、引くよお、ひけばいいんじやろお……半泣きな私、可愛いとか思っ……無いなんてこと分かっておるよ？

でも雄は好きな雌を苛める習性があるからの。私も満更では、被虐趣味とか的外れなこと言うでない！

まったくもお、これだから昔の地球人は頭が固くてかなわん。睨むでない。

じゃあ引く。引いちゃうよ？ 後悔しても遅いんじやよ？ 止めるなら……って鈍なんか持ちだしてどうする気じゃ？

え？ めんどくさくなった？ お腹も減った？

ああ、にやるほど！

猫鍋を作るんじゃない！ 私賢い！

……冗談じゃろ？ 引くから許してたもれ？

大丈夫じゃ、天井なんてしない。私も命がかかってる状況で萌えなんぞ興味無いからの！

にやぜ、そこでまた微妙な顔をするのじゃ。萌えたいのか萌えたくないのかはつきりしてほしいにや。

一枚目ー、タマ？ ペットか！

二枚目ー、ポチ？ これは犬じゃ！ しかもやっぱりペット！

三枚目ー……アルフレッド？ 雄の名前じゃ……ペットではなくなったがの。

四枚目ー……ハローキT、却下じゃ！ お主ら、実は私の存在を消そうと企んでおるんじゃにやいか！？ ……まったく、油断も隙もない。

五枚目……飽きてきたんだが……って私の名前の案にお主の心情を混ぜるでない！

全く、次で最後じゃからな！ 真面目なのでてこなかったら泣くからの！ 大声で泣いてやるからの！

六枚目……ほお。これは良い。高貴な雰囲気と同時に大人っぽさも伝わってくる……なによりピンときたんじゃ！

お主、なかなかいいセンスを持つておるの。

ん？ 何を引いたか？ これじゃ！ サイリルってあーっ何をする！

間違えたってなんのことじゃ！？ 良いから、紙を、返すのじゃ！ 私の名前はサイリルでいいんじゃー！

うむ、じゃあ私は未来の火星から来た化猫のサイリルじゃ！ よろしく！

……え？ 名前しか聞いてないぞ？ う、うむ、もちろん分かっているが……

お主らは猫の毛並や毛の長さ、尻尾の巻き方の美しさなんて話しても興味ないじゃろ？

そうなると話すことは……あ！ 一つだけある！ ふふふ、私の能力についてじゃ！

ふふーん、私の能力は主に三つあるんじゃ！

一つは化猫本来の力である妖術！

もう一つが下僕様との契約？ でできたアーチファクト？ の「
フツライノソウガ
祓雷爪牙」じゃ！

効果はなにかって？

聞いて驚くがいい！

にゃんと！ 龍種や魔物の骨までプリンのように噛み砕けるのじや！

すごいじゃろ？ あと何かオマケ機能があったような気がするのじゃが……まあ、忘れているということは大したものじゃないんじやろう。

最後の一つが摂食吸収能力じゃ。

まあ、これは名前の通りの能力……というより体質じゃな。

食べた物の能力を一つ身につけることが出来るのじゃ。

竜種を食べればブレスも吐けるんじゃよ？ すごいじゃろ？ 褒めてたもれ？ 撫でてくれてもいいんじゃよ？

……お主、ケチじゃの。

まあよい。一見便利そうなこの能力じゃが実はけっこう胃に来るんじゃよ。

なんといっても獲物を丸ごと平らげて、それでようやくその個体が持っていた特徴のうち一つをオリジナルと同じ力で使えるようになるのじゃからな。

私は竜種の肉を何度か食べたことあるんじゃが、まだ威力は微妙なんじゃ。

にしてもここはちと騒がしいのお。

野次馬根性を發揮して観に来たは良いんじゃが……ってお主、聞いておるのか？

なに！？ 最初からほとんど聞いてなかったじゃと！？

まあよい。私は優しいからの、現代風に三行で説明してやらないこともない。

そうじゃの……うん出来たぞ。

火星化猫サイリル参上

人化すると絶世の美女

魔法大戦にやう

完璧にゃ！

にゃにゃにゃん（後書き）

訳あって名前を変更しました。

にゃーにゃーにゃー（前書き）

タイトル考えなくていいって楽でいい！（
更新始めたわけではなくただの息抜きでした。

にゃーにゃーにゃー

やあ、火星化猫のサイリルにゃ！

あれ、なんじゃ、その誰お前みたいな視線……でも私めげにゃい！
強い子だからの！

涙目で強がる私萌えとか……ないかの？

……ふむ、今日は下僕様の話をしようかの。

下僕様はこの魔法大戦で死にかけていてな、手のつけようもない
ほどだったんじゃ。

まあ、そもそも私は治癒などできっこないんでどうしようもなかったかの。

とりあえずその死にかけの魔法使いと血を使って仮契約をしたん
じゃ。

人間より私の方が強いから下僕じゃが、仏さんには敬意を払えと
老猫様が言っておったからの。

ん？ 話し方的に私も年寄りなんじゃにゃいかって？

私はまだまだじゃ。多分まだ三桁の大台には乗っておらんからの。
もちろん下僕様は仏さんじゃから死んでおるぞ。でもパクチオー
カードは使えるんじゃ！

契約してすぐに下僕様を食してオーナー権利を引き継いだんじゃ。
魔力供給は出来にゃいがアーチファクトを使うことはできるんじゃ。

思いついた私賢い！

褒めてたもれ？ ……あれ？ なんで後ろに引いたんじゃ？

うん？ 人を食べたのかじゃと？

だから食べたって言うっておるじゃろ。まあ、下僕様以外を食べた
ことはないかの。ただあまり美味しくなかったのう……

あれは下僕様の肉が美味しくない肉だったのか、それとも人肉が
食用に適していないのか分からのじゃが筋張っておって噛み切り
にくかったにゃ。

でも、齒応えがあるとも言えるからの。ジャーキーにすると良いかもしれん。

まあ、たまたま美味しくない肉に当たった可能性も否定できないから……もう一人くらい食してみてもいいかもしれんの。

それにもう一人食せば、このニャウリンガルを使わずとも人語を解せるようになるじゃろう。

ん？ どこで食べる？

ここでの決まってるじゃにゃいか。

ここには人がいない？

お主、頭は平気かの？ 人ならいるではないか？

どこ？ 見えてにゃいのか？

……ああ！ 見えるわけにゃいな。

人間は目が前についておるからの。前しか見えんのか……まあ、猫もじゃがのう。

大丈夫、痛くはしない。むしろ、生きながら喰らわれるというのはなかなか気持ちいいと誰かに聞いた覚えがあるぞ……？

ふふふ……どーてい坊やはけーけんほーふなお姉さんに任せるがよい。



「さって……ここらはあらかた片付けたか？」

「ナギ、片付けるのは良いのですが……もう少し自然を大切にしてみたいと思いますよ？」

「メンドクセー」

「まあ、あなたならそういうと思っていましたが」

アルの奴、フフフなんて笑いやがって。

正直言ってアルは苦手だ。

頭ん中が想像つかねえ。

他の奴らは簡単なんだけどなー。例えばラカンなんかは頭の中も筋肉だろ？ 詠春はむっとりだしな。お師匠は多分、頭の中見ただけで俺なんかは知恵熱だすね。ガトウ？ 脳味噌までタバコ臭そうだ。

だけどアルだけは分からない。というか意味が分からない。

難民キャンプで女の子にスクール水着とかいう水陸両用の服をあげたりするいい奴かと思ったら、今度は女の子にメイドの衣装を着せて悦に入ったりする。

何がしたいのか本当に分からん。

「っ!？」

バサバサバサバサッ

ぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ!

「ナギ、今の聞こえましたか？」

「ああ、鳥の鳴き声に混ざっていたけど……あれは叫び声だ」

「どうします？」

「……まあ、大方魔獣に教われでもしたんだろ？ かるーくヒーローやってくるぜ」

俺にかかれば魔獣の一匹や二匹、屁でもねえしな!

……と、アンチヨコ忘れてた。これないと俺戦えないし、危なかった。

「夕飯までにはかえってくださいねー」

「母親かつ!」

「ふふふ」

なんでそこで嬉しそうに笑うんだよっ!？

……ああ、寒気がする。

アルに比べたら魔獣の方がよっぽどましだ。

とりあえず杖に乗って加速、と。まあ叫び声が聞こえる程度の距離なら二、三十秒で着くだろ。

しかし、何がいるんだろうなあ。

竜種とかだったら面白いんだけど……

「確か、このらへんだったか？」

……あれ？

魔獣どころか何かがいた形跡すらねえぞ？

まさか幽霊だー！　みたいな叫び声だったとかねえよな？

それだったらくたびれ損じゃねえか……骨折り儲けだったか？
骨折って儲けがでるってどういうことだよ。

だめだ、日本のことわざとかいうスラングはわけわからねえ。
とりあえず降りてみるか。

「……！　うえ、なんだこの臭い」

どんだけ濃い血臭だよ……ここまでとなると戦場でもなかなか体験できないぜ？

臭いは……こっちか。

まあ、確実に生きてないだろうけどな。

「まったく、気分悪くなるな……お？」

臭いの元はここか。

辺りが血塗れだ……でも、その中心でぶっ倒れてる猫は何だろうな？

魔力を感じるな……

「面白そうだから連れてっちまおう」

真っ赤に濡れてる猫の背中を摘んで持ち上げる。

まだガキ猫か。

ほーれ、ぶーらぶーら。

「んにゃ？　おい、やめるのじゃ」

「……は？」

……すげー！

この猫、喋ったぞ！



うーえ……酔ったんじゃが……

この赤毛の男、人のことブンブン振り回しおって……私は猫じゃがな。

しかし、こうも振り回されると胃の中身が……やっぱり何度かに分けて食すべきだったの。

じゃが、私の言葉がこの赤毛の男に伝わっているということは、無事に人語の習得はできたということじゃな。

「おい、男よ」

「あん？」

「に、睨むでない……お主、柄悪いのう。とりあえず私をどこに連れて行くつもりじゃ？」

「仲間のとこだよ」

仲間？

見た感じ魔力は相当あるようじゃが……人は群れるのが好きだからの。しょうがない。

ところでこの男、なんのつもりで私を連れて行くんじやろう？

赤毛男が仲間の特長やらを話しているが……随分と変人ばかりが集まったんじやの。

「ところで、私をどうするつもりじゃ？」

「別に面白そうだから拾っただけだぜ？」

面白……！？

この男、私の扱い方がなっておらんぞ！ 私は火星の猫の頂点に

立つ火星化け猫のサイリルにゃ！

地球人の玩具になった覚えなどにゃい！

「お、ついた。アルー、土産だぞー」

玩具の次は土産！？

本当に怒ってもいいんじやにゃ！？

食べるぞ！

食べちゃうぞ！

「おや、また奇妙な猫ですね」

「奇妙言うでにゃい！」

「しかも喋る……」

む、この優男……先程の赤毛男の説明に出てきたアルじやにゃ？
赤毛男はこの男の本質に気付いてにゃいようじゃが、私にはお見通しにゃ。

化猫妖術、人化の術！

っぽん！

「けほっ、けほっ……なんだいきなり？」

「ふむ、今のは魔力を使っているものの魔法とは違うものですね。面白、」

「サイリルに可愛いお洋服ちょーだい？」

この男、ただの幼女萌えにや。^{ヘンタイ}

十歳前後の少女に変化した私の魅力でイチコロにしてやるから見
ておれ！

「ふ、ふふふ、その程度の変化で、」

「お洋服、くれないの？ おにーちゃん、サイリルのこと嫌い？」

「フフフフフ、ナギ、ありがとうございます……ガクッ」

「アルー……！？」

いや、ただの鼻血になにをそんなにや。というか自分でガクッと言
ったように聞こえたのじゃが……しかし、今の一瞬で数着の子供服
をだすとは見上げた根性じゃな。

えっと、次に与しやすそうなのは……

「騒がしいですけど……どうかしましたか？」

「た、タカミチ！？ 来るんじゃないえ！」

赤毛男よ。

いくら私でも、そんな危険物のように扱われるとさすがに凹むか
らやめんか。

しかし、少年か……この年頃なら年上かの？

っぽん！

「クス、可愛い坊や……ねえ？ 私と楽しい事しない……？」

「え、え、え？ あの、あなたは？」

「私？ ふふ、ひ・み・つ……ちゅっ」

ぷしゅー

「タカミチー……！」

頬への接吻で赤くなるのは、つくづく可愛いのが。頭から湯気をだして気絶しおったわ。

まあ？

今の私のようにスレンダーでありつつも痩せこけてはいない美人を前にすれば当たり前かの。

「ナギ！ またお前は騒いで……」

「詠春！？ お前は特に来ちゃダメだ！」

青山詠春……むつつり。

それなら、

っぽん！

「ねーえ、おじさまー？ サイリルと良いことし・な・い？ うふん」

「むう！？ 心頭滅却、煩惱退散……」

「目なんか瞑らないで、その手で私の体を好きにしたい……？」

ふによん

むつつりの手を掴んで私の胸に触らせる。
今回は胸の大きなおなごに変化したからむつつりの指が胸に沈んでいく。

「は、破廉恥な！」

「ふふ、体は反応してるのに……？」

よくわからん構造の服の上からむつつりの乳首をいじる。
む、感度悪いのう……なら下じゃ。
ゆつくりと手を下に滑らせていく。

「ちよっ、これ以上は……御免！」

「えいしゅー……ん！」

逃げおった。

じえーけーに変化してみたのじゃが……刺激が強すぎたかの？
疲れたから猫に戻ろう。

「赤毛男よ」

「あん？」

「じゃから、お主怖いわ！ ……とにかく、お主の仲間、女に弱すぎではないかの？」

「敵なら女にも容赦しないから平気だろ？」

……ふむ、つまり私は敵と思われていないということかの。
うーむ、明らかに化猫の私を甘く見ると痛い目に、

「うにゃっ！？」

「おい、ナギ……ペットは飼えないぞ」

「お、ガトウ」

顔が見えにゃ……というか背中を掴むでない！
ぶらぶら揺らすのもやめい！

「拾ったところに返して、」

「わ、私をペット扱いするで……お主、なかなか渋いのう」

ハードボイルドの手本のような……先のむっつりとは別人じゃの。
うむ。

少しときめかないこともないぞ？

軟弱な男ばかりだったからのう。その分の補正のようなものも入
っておるんじゃない。

「なんだ？」

「こ、こっちを見るでない！ ……そろそろ降ろしてたもれ？」

「ん、悪かったな」

おお……手を離して空中から落とされと思ったのじゃが、そっ
と降ろしてくれるとは……

このハードボイルドはいい男じゃの。

「それと……」

「どうした？」

「湯を沸かしてくれんか？ 身を清めたい」

……血まみれじゃからの。

そろそろ血が固まって手入れが大変になってしまいそうじゃ。

「……ナギ、この猫放してこい」

「にゃんとっ！？」

「いきなり風呂を要求するようなペットはいらないだろ。水も無限にあるわけじゃない」

……なるほど。

確かに戦時中だからの。

なかなかの手練れが集まっている組織のようじゃから水くらいと思っただのじゃが……

「えーと……魔法の射手 収束 水の……10矢くらい？」

ざばあんっ！

「にゃ！？ けほっ……な、なな、何をするかこの赤毛！？」

この男、あろうことか私に水魔法を撃ちおった！
なんじゃ、やるのか？ やるんじゃない？

「赤毛！ 喧嘩売ってるとみなして、」

「ほーれ、綺麗にしてやるぜ？ 魔法の射手 連弾 水の20矢！」

「ぶはっ！？ ふぐう！ げほっ……お主、ただでのわぁ！？ 一体何発撃つつもりじゃ！」

「もう百発いっとくか？ 魔法の射手 収束——」

……もう、我慢ならん。

この赤毛、少し折檻してやろう。

「アデアット」

フツライノソウガ
祓雷爪牙を呼び出す。

思い出したぞ……このアーチファクト、触れた魔力を切り祓う効

果があつたはずじゃ。

一部分のみを消すだけであつて魔法自体を消すわけではないから
使い勝手は悪いがの。

でも、この子猫ぼでいならば、この爪で開けられる孔だけで十分
にゃ。

迫る水球に爪を立て、隙間を抜ける。

その先にあるのは赤毛男の間抜け顔のみ！

「お……」

「その二枚目な顔、傷物にしてくれる！」

サイリルすらー、

ひょい

「うにゃあっ！？」

「……お？」

「勝負はここまで。移動するぞ」

ハードボイルドに掴みあげられた。

まだいたのじゃな……というかあと数センチでこの赤毛男を引っ
かけたというのに！

「この猫の勝ちだ。というかナギ、引つかかれそうでも目は閉じる
な」

「ガトウはメガネかけてるから言えるんだよ。この猫、目をつぶし
に来てたんだぜ？」

べ、別にそこまで酷いことは考えておらなかったわ！

引っかき傷でも作って情けない顔にしてやろうと思ったただけじゃ！

そもそも、この赤毛男が私に魔法を撃ってくるから……手加減してあったとしても痛いものは痛いんじゃないよ？

さっきの食事、吐き戻しかけたわ。

「でも、これで連れて行って構わないだろ？」

「だが、この猫パクティオーカードを使ったぞ？ 飼い主いるんじゃないか？ まあ連れて行くことには反対しないが面倒はお前が見ろよ？」

「そのハードボイルド！ だから、私をペット扱いするなど何度も！」

はーなーせー！

だが、赤毛男は私を連れていくために騒ぎを起こしたのか……問題は私が一言もついて行きたいなんて言っていないことじゃがにや。まあ、体を清められたのでよしとするか。

「来るか？ あー……」

腰を落として私と目を合わせてくる赤毛男……ナギと言ったか。

「サイリルじゃ」

「じゃ、サイリル、一緒に行こうぜ！」

……まあ、やることなくて暇じゃしな。

この者たちの目的は知らんが付き合ってやるとするかの。

にゃんだと!?

「なんかこの近くでエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとかいう魔法使いが暴れているらしいのう」

「ん? 吸血鬼だっけか? なら捕まえに行くか?」

戦争も終わって《赤き翼》も別行動をする事が多くなったから私も大変暇じゃ。

最後に行動を共にしたのは京都でバカでかい鬼と戦ったときかの? 食べてやろうと思ったのじゃが、あまりにも霊格が高すぎて一口でお腹を壊してしまって……まあ、あのデカブツを完食するのに何年かかるか分からんし、気にしてはおらん。

かく言う私も大戦中から帝国で龍樹とのんびりしたり、魔獣を食べに行ったりと殆ど一人で行動しておったがの。

大戦が終わってからナギ達に会いに行ったんじゃ。

猫の私が人の世の戦に関わっても得しないからの。

最近はしょっちゅうバカ騒ぎを起こして私を楽しませるナギと一緒に行動しておる。

ガトウも死んでしまったらしいし、タカミチ少年もどこにいるのやら……クルトは勉強を頑張っておるようじゃが、何がしたいのかは分からん。

やつぱりバカなナギか、ずれているアルといるのが楽しいにゃ……アルは京都の一件の後から旧世界のマホラとかいう場所に留まっているらしいの。

あやつの出す服はそれなりに気に入っていたのじゃが。

「捕まえてどうするにゃ? 　　というかほかの女の尻を追っかけておるとアリカが拗ねると思うのじゃが……」

あやつも強い女に見えて存外に乙女じゃからの。ナギがにこっとするだけでぽっとするくらい熱くてうざったい夫婦にゃ。

とはいえ、ナギも忙しいしアリカもあまり目立ってはいけにゃい立場じゃからの。行動を共にすることは滅多にないのじゃ。

夫婦なのにまだ夜伽も数回らしい。

……アリカも、猫の私にセックスレスを相談して解決すると思っておるのかの？

とりあえず、猫風の仕方だけ教えておいたがの。

……あと誘い方も。アリカも随分可愛らしくなったのう。夜伽用の猫の尻尾の付け方を教えた時は顔も真っ赤にしておったしの。

「賞金首を捕まえるのも仕事だぜ？ それに俺のアリカが誤解するわけないだろ？」

「あーうざいうざい」

「なんだと!？」

胸焼けがするにゃ。

ナギもアリカの話だところなるから、やっぱりアルが一番付き合やすいのう。

アルが人のものになってナギのようになると困るからの……あやつの性癖は直さんようにしないとにゃ。たまに私がちっこい姿で付き合ってやればいいじゃろう。

まあ、なにも意識しないで普通に変化しても金髪ロリなんじゃがにゃ！

これは化け猫として百歳がまだまだ若いという証左にゃ！

老猫様は千歳から数えるのをやめたと言うし、長靴猫様も三百歳位だとか。私とより若いのは……タンゴとオハヨウ子猫かの。

「して、捕まえに行くのならば少し北の山にゃ」

「何で知ってんだ？」

「まあ、乙女ネットワーク？」

この間知り合った魚屋の白猫のタロから聞いただけじゃがにや。
……タロは乙女ではないがの。

「ほー。サイって友達いたんだな」

「喧嘩売ってるんじゃないや？ 待っておれ、いまカード出すにや……うえ」

「久し振りに戦おうと思ったけど……そのカードの出し方どうにか
ならないか？ やる気失せるぜ」

し、仕方なからう！

猫にはポケットがないんじゃないから普段は飲み込んでおいて、必要
なときに吐き出すしかないんじゃないや！

わ、私だってナギ相手であれば恥ずかしくて、口元を隠しながら
でないとお世のじゃ……

「こんなに嬉しくない特別扱いも珍しいぜ……というか、相変わら
ずずげえカードだな」

「他のカードを見たことないので知らないんじゃないやが……まあ、真っ
黒じゃの」

しかし、方位が北で星辰性が黒い孔だなんて……縁起が悪いのう。
徳性が愛なのがせめてもの救いじゃ。

「ラブ&デストロイってか？」

「お主、喰らうぞ!？」

全く……《赤き翼》の中でも私だけ扱いがおかしいのは納得い
かないや！

何でアンチヨコナギが『千の呪文の男』、むつつり詠春が『サ
ムライマスター』なのに、私が『食いしん坊子猫』^{ハングリィ・キティ}なんて恥ずかし
くて情けない二つ名なんじゃ！ ラカンの『不死身バカ』なみに酷
いぞ！？

べ、別に食いしん坊なのではない……ちよつと人間の常識より燃
費が悪いだけじゃ。

というか、私に腕を喰われた者も少なくないはずなのじゃが……
そういう者たちのためにも、もう少しこう……ああ、こいつには勝
てねえわ、と思うような二つ名をじゃな……

そうじゃの『ぐらとにーきてい』とかどうじゃ？ 意味はよく知
らん。

「それだと大して変わってないぜ？ ま、その魔法使いがいるとか
いう雪山に行ってみっか？」

「うむ、杖に乗せてたもれ」

「飛べって……翼、生えるだろ？」

……疲れるんじやが。

ナギの箒のスピードに着いていくなら……竜種の翼でないと難し
いのう。

鷲竜の翼は凍るかもしれないし……適当でよいか。

「えいっ！」

バサアツ！

「おお、なんかデカすぎてすげえ不格好」

「余計なお世話じゃ。文句言うなら乗せてもらうぞ？」

でも、この巨大コウモリみたいな翼はなんの翼なんじゃろ？

こんな翼を持っている生物を食べた記憶がないのじゃが……妙にしっくりくるし飛ぶのに問題はないんじゃない、気にするほどのこともなからう。

「じゃ、お先！」

「おいバカナギ！ そっちは西じゃ！」

「おっと、ミスったミスった」

……全くこの男は。

こんなんじゃから良く迷うんじゃ。

「それじゃお先！」

「じゃから、置いていくでない！ まったく……私はゆっくり行くとするかの」

まったく、あの男はいつまでだってもガキじゃな。どうせゆっくり飛んでいった私に、何で追いかけてこなかったんだよ、とかなんとかって拗ねるのじゃろ？

まあ、それでもゆっくり飛ぶがの。あの魔力バカと違って私は持久力はないのじゃ。

……少しは急ぐかの。

ぐわんっ！

「にやつ！？ ……こ、この翼、魔力との親和性高いのう」

少し加速しようと思ったただけなのじゃが予想外の速度が出てびっくりしたにゃ。

これならあまりナギを待たせることもないかもしれんの。

ここから噂の山じゃと……三十分ほどの。

戦闘もあるかもしれんしの、到着したら人型に変化した方がよいじゃろう。



「サイの奴、おっせーな……」

ったく。

あいつ、いつもこうだからな。

冷めてるというか、勝負事に興味が無いというか……男のロマンを分かってねえぜ。

あの状況だったらレースになるのが普通の流れだろ。

「ま、近づけば互いに位置は分かるし、勝手に動いても構わないだろ。おーい、吸血鬼ー！」

出てこないと山ごとぶっ壊すぞー？

もちろん冗談だけどな。

「つつても賞金首が呼ばれて現れるわけもないし……探検だな！」

とりあえずは……右！



「ようやく行ったか……放っておいてくれればいいものを」

吸血鬼になってからもう半世紀以上経つ。喧騒から逃れて、やっ
とこの山で静かに暮らせると思ったのだがな。

神という奴は私に平穏な生活など送らせる気はないらしい。

気は進まないが……先程の赤毛の男が私を殺す気で来るのなら仕方ない、か。

「私にちよっかいをかけたことを後悔するんだな」

分相応な賞金首を追っていれば死ぬこともなかっただろうに……殺したくもないのに殺されに来るなんて迷惑な奴だ。

どうにかして、諦めさせることはできないだろうか……？

あの男が諦めて帰りさえすればお互いに、

「お……？　なんだ、来ねえと思ったら人型か」

人型、という意味は分からなかったが見つけられてしまった。こうなったらもう戦うしかないだろう。

「お！　やる気か？　最近強い奴と戦えなくて退屈してたんだ。こなら人もいないし思う存分……あれ？　耳と尻尾、消せるようになったのか？」

「なんだ貴様は！？　先ほどこから耳やら尻尾やら訳の分からないことを……！？」

がらっ

足下の岩盤が……崩落だと！？

まずい、マントの構成も間に合わない……っく！

「あぶねえ！」

がしっ！

……？

助かった？

恐る恐る目を開けると先程の赤毛の男が私の腕を掴んでいた。

私は賞金首なのにどうして……？

「今、引き上げてやるから待ってろよ？ 暴れると落ちるぜ？」
「す、すまん」

宙ぶらりになっているのは私だけではない。私を助けるためにこの男も身を投げ出し、私の腕を掴んでいるのは逆の左手で自らの体を支えている。

私が子供の体型だとはいっても、やはり負担が大きいのだろう。左手の皮が裂けたのか血が流れてきている。

……自らが死ぬ可能性もあったのに何故？

「よっと！」

「きゃっ！」

「……意外とかわいい声も出すんだな」

無理矢理私の体を持ち上げ、手で支えているというより抱き抱えている状態にした男が失礼なことを言ってくる。

体は少女のままなのだから声が可愛いのは当たり前だろう。

……やはり、賞金稼ぎだからか。私の体に回された腕もずいぶんと遅い。

私の動悸も早くなっている……ふん、助けられただけでこれとはな……

「こ、れで……！ よっと！ 怪我してないかな？」

「う、む……助かった」

「しかし、お前の失敗なんて随分久し振りに見たな」

「は？」

久しぶりもなにもこいつと私は初対面のはずだが……

「おーい、なにぼけてんだ？」

私の目の前で手を振る赤毛。

あれか？

新手のナンパは見覚えがあるだとか知り合いに似ているだとか言
って親近感を生もうとするという。

こいつもそんな感じなのだろうか？

わざわざ私を？

確かに魔力はそれなりにあるようだが……

「ナギ、ここにいたのじゃな。おお、もう見つけておったのか。な
かなか気が……うにゃ？」

「新手か、仲間と一緒に来ていたとは……なっ！？」

新手の顔を見て、そして新手が私の顔を見て固まった。

耳やら尻尾やら翼やら、余計なものが付いているがその容貌は私
と同じ……？



ナギが可憐な美少女に迫っていると思ったら、その少女は私のそ
っくりさんじゃった。

……まあ、私の人型状態も微妙に有名じゃから似たような格好を
着てコスプレをするものもおるかもしれんの。

っっかし……むう、似ておるの。

「お、おおお、お前は何者だ!？」

「奇遇じゃのう……私もちょうど同じ質問をしようと思っておったところじゃ。まあ、誰かと聞かれれば、」

「ふふん、聞いて驚け! 不死の魔法使い、闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとは私のことだ!」

おお、こやつが最近賞金稼ぎ百人抜きを達成したという……

しかし、そんなに有名な魔女だったのかのう?

私もナギも姿勢の情報には疎いからの。噂話はあまり耳にしないし、すぐに忘れてしまう。

「自己紹介をされたら返さなければならぬ。私はサイリル。猫じゃ。それでこっちの赤毛がナギ。ともに《赤き翼》の一員じゃ」
「……それが、私になんのようなだ?」

「戦いに来た……のじゃが。自分の生き写しに逢うとは思わなかったの。ややこしいし戦うのはよしておこう。命拾いしたの」

こやつを喰らえば不老不死も夢ではないのじゃが……流石に、今の体型で不老は困る。

そもそも、そんなものに興味もないのじゃし。

「命拾いしたのはそっちだろうが。見た目はこんなでもお前らより遙かに長い時を生きているんだ。あんまりなめたことを言っている……」

「何歳じゃ?」

「いくつだったかなんて覚えていないが……五百は過ぎた」

「私より四百も上か。ナギ、帰るぞ」

正直、勝てないことはないが戦うことで生まれるメリットが割に合いそうにないのじゃ。

吸血鬼ということはナギ並みの魔力タンクと見ていいじゃろうし。うん、やめじややめ。しかも自分と同じ顔じゃ。気が乗らん。

「待て」

「ん、なんじゃ？」

「……というかお前ら声も同じで紛らわしいな」

むう……それは私も考えておったのじゃ。

相手は六百歳の吸血鬼。

私は百歳の化猫。

私の能力のおかげで力関係こそ同等だとは思うのじゃが……ちょっと負けておるかも。

やはり妥協するのは私じゃな。

「むう……変化じゃから姿形を変えることは可能じゃが。一応、これが私の人型のデフォルトじゃからのう。声や顔、体型は難しいが髪の色なら……少し待て」

っぽん！

「黒髪妖女サイリルじゃ！ これで分かりやすいじゃろ？」

「まあ、区別だけなら耳としっぽで分かるところがな。おいサイリルと言ったか？」

「なんじゃ？」

「この赤毛、ナギを置いていけ。私のものにする」

いや、私に言われても困るんじゃが……

ふむ。

照れておるの？

照れておるんじゃの？

「可愛いのう」

「うっさい！ 猫鍋にするぞ！ それでお前、私のものにならんか？」

「いや……それは」

「既にこやつは夫じゃ。諦めるんじゃない」

「知らん」

……我儘娘じゃ！

いや、娘と言っても私よりも年をとってはいるんじゃない。

ナギがアリカに殺されるのも忍びないのじゃが、楽しいことの臭いがするからう。

というかナギ、その言い方じゃとアリカさえいなければ……と思われると思うのじゃが……

「よし、ナギ。逃げるぞ」

「おう！」

「そして金髪！ 追いかける！」

「は？ お、ちょっと待てー！」

まあ、こうして久しぶりの暇つぶし、鬼ごっこが始まったわけじゃ。金髪……エヴァはナギを拘束できれば勝ち、ナギはエヴァを諦めさせれば勝ちじゃ。



「なあ、サイリル。ナギはどうすれば私を見てくれるんだ？」

「なぜ、皆してナギのことを私に聞くのじゃ……」

というか、そもそも私は恋すらしたことがないのに……助言でき

るほど経験はないのじゃ。

「だが、お前が一番奴のことを知っているのだろうか？」

「いや、えと、むう……最近のナギのことなら、と言うのなら否定できないのう」

というかエヴァももう一ヶ月以上でにされているのじゃから諦め時だと思ふんじゃが……まあ、言って聞くような子でもないの。

……自然にこの子とか思ってしまうあたり、どうやら私達は互いに相手を子供扱いしているようじゃが、お互いの体は子供なのじゃから仕方なかる。

最近では二人で街にでると姉妹だと思われるからの。

ナギも黒髪の私に慣れたようで間違えることもなくなったし、エヴァも日常的な存在になってきたのう。

「というかじゃ、わざわざナギが寝ているときに私を訪ねるのは意味がないじゃろ」

「うん？ どうしてだ？」

どうしてときたか……ふむ、エヴァよ。お主もしかなくても、

「ずばり乙女じゃの」

「乙女……？ 私がか？」

「うむ、ぶっちゃければ処女じゃろ？」

「な、ななな、何で知っている！？」

いや、予想付くじゃろ。

処女でなければ既にナギのベッドの中じゃ。

しかし、なぜナギばかり……

「おい、サイリル？ 急に黙ってどうした？」

「エヴァ、ナギじゃなくて私にせんか……？」

「なっ！？」　　そ、それは私が欲しい、ということか？　　ま、まあ、

私もお前のことは嫌いではないし、親切にしてくれてるからどちらかといえ……ただ、もう少し時間をかけてだな？　　やはり女同士というのは世間的に見て異端なのだし……いや、吸血鬼の私が異端なのだな。だがサイリル、お前は私とずっと一緒にいられるのか？　　時によっては昼夜問わずに襲われる生活だ。その時、誰かがそばにいてくれればと思ったことは何度もある。だけど、相手に負担をかけてまで、とは思えない。サイリル、お前は、それを負担に思わないか？」

「うむ、予想以上に面倒そうじゃからパスにや。さっきのは忘れてたもれ」

やっぱりお昼はゆっくり眠りたいからの。

邪魔されたらつい殺してしまうかもしれないにや。

「お、ま、え、はぁー！　人に散々喋らせておいてそれか！？」

「……エヴァ、お主はまだ子供じゃな」

「お前に言われたくないわー」

「先の気まぐれは謝ろう。じゃが、もし私がお主を捕らえて賞金を得ようと思っていたら、どうする気だっんじゃない？」

「む、わ、私を騙したのだから当然、」

「殺すか？　殺せるのかのう……お主、人殺しには未だ抵抗があるじゃろう？　私のように呼吸をするように命を奪えんじゃない？」

「私だって既に……」

「自分の意志でか？　理由もなくか？　顔見知りをか？　……私はあるぞ？　一晚語り明かした人間を大した理由なく喰い殺したことがの」

一ヶ月、エヴァと付き合ってきて分かったことがいくつかあるにや。

その中の一つが、エヴァは優しいということじゃ。
ギリギリまで耐えて、それ以上は自分も危ないとならなければ相手を殺さない。そんな普通の少女にや。

だから、エヴァはナギの近くにいてはいけない。
せめて、やられる前にやれるような性根でないとナギの足手まといになるんじゃない。

ナギは未だに暗殺されかけたりするからの。ナギも殺しを厭うから、ナギが刺客に気付く前に私が、ということもたまにあるしの。

……ナギと共に歩みたいというなら、そういう方法で守ることを覚悟しなければならんじゃないじゃ。

「まあ、ナギに守られるだけの生活でもいいのなら、そのまま変わらずにいればよいがの」

それでも、いたずらにナギが死ぬ可能性を増やすだけ、今はナギもアリカで手一杯じゃからの。負担が増えればリスクも増すのは当然にや。

本当はこんなことは言いたくないのじゃが……

「エヴァ、お主らはお互いに相応しくない」

……一目惚れなら、諦められるじゃろ？

「それでも、私はナギが欲しい……最近ではあいつだけだ。身を挺して私を助けてくれたのは」

「ふん……明日の午後、ここを発つにや。海辺の道を通る。自分の意志は自分の力で貫け」

諦められないのなら……仕方ない。

私は二人のために鬼となろう。

変則的ではあったものの三人での旅は楽しかったんじゃがな……
それもここまでかの。

本当に、残念にや。



「サイ、エヴァはどうした？」

「知らぬ。大方、ナギを襲う準備でもしているんじゃない？ 日没までに次の土地へ着きたい。急ごう」

「あ、ああ」

杖で飛べばすぐじゃが目立つからの。

まさか大戦期の英雄が徒歩移動だとは思うまい。

ま、健康にもよいからの。

ジジババになっても自分の足で歩きたいなら杖で飛ぶのは控えるべきじゃ。

……エヴァはそろそろかの。

「二人とも待たんか！ き、今日という、はあはあ、きよ、今日こそは……ちよつと待て、息を整える」

「エヴァ、すまないが……ここで決着をつけさせてもらう。そろそろ邪魔じゃ」

「な、に？」

「お、おい、サイ？」

ナギすら、私の様子に戸惑う。

……昨日までは仲間とまでは言わないものの友人ではあったのじ

や。無理もない。

それも、もうお終いじゃがな。

「サイリル、私が邪魔とはどういうことだ？」

「……ナギと闇の魔法使いが通じているという噂が広まっているらしい。ナギは英雄が故に敵も多い。エヴァとの関係はマイナスの方が大きいのじゃ」

一見、救世の英雄という立場は確固たるものに思えるが、その反面、恨みも多い。

完全なる世界の残党はもちろん、ナギ達に殺された兵達の遺族やナギが救えなかった兵達の遺族も……

そのナギが魔法世界で恐れられているエヴァと親しい関係にあることがバレたら？

下手をすれば正体を隠して生活しているアリカにも累が及ぶかもしれないのじゃ。

「エヴァ、お主はナギにとっての疫病神にしかならぬ」

「……そうか」

分かってくれたかの……？

ここでエヴァが大人しく引き下がってくれるのなら、

「つまり、今まで通り力づくで奪えということだろう？」

「……まあ、そうなるとは思っておったがの」

「いつもと同じとは思うなよ？ 本気でいかせてもらう」

「オイ、ネコ。キリキザマレタクナケレバニゲルンダナ」

大人モードで……チャチャゼロまで動かすか。

エヴァの真価は魔法だけではなく繰糸術もじゃ。しかも吸血鬼の

身体能力に不死性。

見た目こそ可愛らしい少女じゃが実際には帝国の龍樹にも劣らぬ怪物じゃ。

同じ人外でも私とは桁が違う……じゃが、

「エヴァが本気でも、負けはせん。ナギ、手はず通りにな？」

「ああ。いいんだな？」

「私よりお主が気にすると思ったのじゃが……ふふん、いい顔してるのう」

やるとするか。

最後じゃ、私も本気を出してよいじゃろ？

猫モードで相手するにゃ。

私の目的は勝つことではにゃいが、本気を出さないと死ぬかもしれない。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 魔法の射手 連弾 氷の199矢！」

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 魔法の射手 連弾 火の199矢！」

「なっ！？ ……サイリル、お前、魔法使えたのか？」

そういえば、エヴァと逢ってから使えなかったから知らないのも仕方がにゃい。

「満たされぬ子猫サイリル、これまでに喰らった二百四十七人の魔力がこの軀に宿っているにゃ」

中には結構な使い手もいたようでの、ナギやエヴァには数段劣るが大した魔力量を誇っていると、自分で言っちゃうにゃ。

それに、魔獣も何匹か食べたりしておるからの。
ケルベラス溪谷は良い餌場じゃった。

「魔力が多いだけではな。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック
魔法の射手 連弾 闇の1001矢!」

「だから、意味がないと……アデアット!」

私に当たる魔法だけを祓雷爪牙で切り裂いていく。
この程度なら……!

「ケケケ、ユダンシタナ」

「つにゃ!? つつう……ぶち壊すにゃ」

背後からチャチャゼロに斬りつけられる。し、尻尾が切り落とされる
ところだったにゃ……

まあ、魔法などなくても人形の一体や二体!

「猫妖術、波浪鬼T!」

空中から滝のような勢いで水が吹き出す。

名前はくだらにゃいが性能は折り紙付きにゃ。

水は……ただの目眩ましじゃからにゃ。

「オ?」

「その腕、喰らうぞ?」

私を見失った隙について背後からチャチャゼロの右腕を喰い千切る。
る。

さらに左腕も……むっ!?

「危なかったなあ？ あと少し動いていればその可愛い猫の手が千切れ飛ぶところだったぞ」

「うにゃ！？ 容赦ないにゃ！？」

腕に巻き付けられた鋼線を引き裂いてエヴァから距離をとる。

むう、エヴァレベル相手に二体一は辛いの……いざというときを考えるとナギを戦わせるわけにもいかぬし。

やはり、ノーリスクは無理があるにゃ。

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 魔法の射手 連弾 火の199矢！」

「こんなもの、リク・ラク・ラ・ラック・ライラック——」

エヴァはコンマゼロゼロ以下のタイムラグで同種同威力の魔法を放ってくる。

……遊ばれておる。

じゃが、これならどうじゃ！

「曲がるにゃ！ そんでもって、キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト ものみな焼き尽くす浄化の炎 破壊の王にして再生の徴よ 我が手に宿りて敵を喰らえ 紅き焰！」

「なんだとっ！」

全ての火の矢の軌道を変更して、今まさに私を切りつけんとしているチャチャゼロへと向ける。

……私にも当たるが、祓雷爪牙があるからの。耐えきれんじやろう。

私の火の矢とエヴァの氷の矢をよけつつ、呪文を紡ぐ。チャチャゼロが行動不能になったのは確認済みにな。

「ウデガヤラレタカ、ゴシユジン、オレハキュウケイダ」

「好きにしろ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷
精 闇の精 闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪！ ええい！
間に合え！」

む、むむむむ。

なんで私が三節の紅き焰を使ってるのにエヴァの闇の吹雪と均衡
してるにゃ！？

ズルにゃ！

ズルしてるにゃ！

……よけながら詠唱なんてことをしたから集中できなかったんじ
やな。

「ぬう、キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 魔法の射手 連弾
火の1001矢！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 魔法の射手 連弾 10
01矢！ どうした、魔力切れか？」

再び派手な音を立てて魔法が衝突する。

けほっ……砂煙が酷いにゃ。

くう、やっぱり正攻法で吸血鬼を倒すのは無理にゃ！
私らしく、小狡くいくにゃ！

「エヴァ！ いくにゃ！」

「来るがいい！ 断罪の剣で捌いてやろう」

もともと私はそんなに正々堂々と戦わないんじや。

だから今回も、ズルするにゃ。

変化っ！

「エヴァ、降参だ」

「な、ナギ！？ 一つのまに！」

「好きありにゃ！」

次の瞬間に私は本来の人型、つまりエヴァによく似た少女モードになってしまう……本当ならナギにしたままエヴァを突き飛ばすはずだったんじゃない。

やっぱり、あまりにも自分から離れた者への変化は数秒しか続かないの……っと、余裕がなくて金毛のままじゃった。

「ま、私の勝ちにゃ」
「な、」

とん、と軽くエヴァの胸を押す。
数歩、たたらを踏んだエヴァは……

ずぼっ、

「なあっ！？ ってニンニク！？ ネギ！？ お前ら汚いぞ！？」

あらかじめナギと掘っておいた落とし穴 with ニンニク & ネギに落下した。

戦いつて無情じゃな。

「ほーれほれ、エヴァの大好きなニンニク風呂じゃ、堪能するといにゃ」

「サイリル！ おまつ、ちょバカっ！ やめ！ や、きゃんっ！」

おー、エヴァの大人モードまで解けてしまったにゃ。まあ、姿事

態は強さに関わりないから油断する分けてないにや。
保険にニンニクをさらに数十個。

「……………くっさいにや」

「わ、私、この臭いは本当に……サイリルどこへ行く!？」

鼻がバカになりそうにや。

あとはナギに任せるにや。なにやら諦めさせる秘策があるとか言
っていたしの。

「ナギ、出番じゃ」

「おう! えーっと、麻帆良のジジイが警備員を欲しがってたし…
…マンマンテロテロー」

「ちょ、ナギ! そんなデタラメな魔力で変な呪文をつ!」

……あれ?

ナギ、魔力のほとんどを練り込んでいるように見えるのじゃが。
というか、見ているページからすると呪いの類だにや。

……あんなに魔力込めたら解呪も一苦労じゃ。

「って、バカナギ! 自分以外に解呪出来ないような呪いをかける
でない!」

「登校地獄ー! ってサイ、何か言ったか?」

……もう遅いにや。

ナギの渾身の呪いを解ける魔法使いなんているのかのう?

エヴァ、ご愁傷様にや。

「そう思うなら、」

「エヴァ、ニンニク臭いからあまり近づくとでない」

「き、さ、まゝ！ リク・ラク・ラ・ラック、うえ……だめだ、魔法も使えん」

……これが魔法世界で恐れられる賞金首の実態じゃ。
可愛いのを。



むふふふふー。
可愛いもののう、最高じやのう。
んー本当に似合っておる。

「エヴァ、一回転じゃ！」
「こ、こうか？」

くるりとエヴァがターンすると、麻帆良中等部の制服のスカートのふわりと翻る。

うーん、プリティーじゃ！

「なるほどのう。アルの趣味も分かるのう。エヴァ、次は前屈み&上目遣いでカメラを見てたもれ！」

「……仕方ないな」

「んー！ エヴァ、お主は今、最高に輝いておるぞ！」

「そ、そうか」

「その赤面もグッドじゃ！」

さつきナギにやりすぎじやと叱ったばかりじゃが、エヴァの可憐な姿を目にできたから良しとするにゃ！

「ところでサイリル」

「ん？」

「私とお前はそっくりなわけだが……私を褒めるのは歪んだナルシズムじゃないか？」

「む、確かに……でも可愛いからオールオッケーじゃ！」

ちっこくて、髪もふわふわで、西洋人形のようにじゃのう。

「ふお、気に入ったのならサイリル殿も着てみればよいのでは？」

「近右衛門よ……お主の後頭部は美味そうじゃのう？」

お主は先程、してはならないことをしたんだぞ？

「ひょ！？ 何か気に入らないこと言ったかのう！？」

「先にエヴァの制服姿をナギと共にバカにしていたのを私は忘れんぞ？」

私と瓜二つのエヴァの外見をバカにする、イコール！ 私の外見をバカにしているのと同義じゃ！

その所業、許すまじ！ 覚悟するにゃ後頭部お化け！

「あ、あれはナギが、」

「っぷ！ あっはっは！ ジジイ、猫に凄まれて怯えるとか、画的に情けなさ過ぎるぞ！」

……まあ、エヴァが怒っていないので大目に見てやるにゃ。

もう少しエヴァの制服姿を楽しみたいが……そろそろ時間じゃな。

「ナギ、発つぞ」

「いや、お前とエヴァの入学式を見るまで麻帆良に残るぞ？ とうかこれを見ない手はないだろ？」

「……は？」

「ああ、あとアルも見にくるみたいだぞ？」

「アルがつ！？」 ……というか麻帆良にいるんじゃない？」

私との別れ際にはそんなことを言っておったがのう。

「は？ いや、あいつは今でも魔法世界にいるはずだぞ？」

……アルは意味もなく嘘を付くからの。

麻帆良とか微妙にいてもおかしくないから騙されたにや。

「って、問題はそこじゃないにゃ！ エヴァと“私の”入学式って聞いてないんじゃない？」

「いやー、お前も随分エヴァのこと気に入ってるみたいだったし、エヴァもいきなり一人じゃ大変だろ？ 何より学校は楽しいぜ？」

「お主は中退だったはずじゃが……というか私のファミリィネームはどうした。私、苗字無いのじゃが」

苗字のない生徒など随分と周囲から浮くことだろう。

もしかしたら、それ故に虐められるかもしれない。ほら、私、可愛いし！

「マクダウエル」

「む？」

エヴァがぽつりと呟いた……マクダウエルってエヴァの、じゃよな？

……まさかと思うが

「サイリル・マクダウエルがお前の学校での名前らしいぞ？ 双子

という設定らしいな」

「事実、エヴァンジェリンとサイリル殿の人間形態はそっくりじゃからな。問題ないわい」

「耳と尻尾は！？ 私、隠せないのじゃが！？」

「それも認識阻害魔法があるから心配ないわい」

な、に、逃げ道がまだどこかにあるはずじゃ！

探せ！ そして見つけたすのじゃ私！

「ちなみに何人か魔法生徒や先生もいるからの困ったら相談するといいじゃろう。何か問題はあるかの？」

「至れり尽くせりすぎるにゃ、この皺後頭部！ 強いていうなら口調が私と被っておるのじゃ！」

「ふおふおふお、エヴァンジェリンには警備員の仕事もやってもらうからの。少し歩いたところにログハウスがある。二人ともそこに住むのがよからう」

ぐぬぬぬぬぬ

「サイリル」

「なんじゃ、エヴァ？」

「私の方が年上だからな、お姉ちゃんと呼んでもいいぞ？」

……もう、諦めるにゃ。

こらからはエヴァの双子の妹として学校生活を堪え忍ぶのにゃ。

「それによ、サイ、俺がもし戻ってこれなくなったらお前がエヴァの呪いを解いてやれよ」

「……お主のバカ魔力の呪いが解けるかは不安じゃが、まあ承った。じゃが、不安になるようなことを言うでない。もう、私がナギを守

ることは出来ないんじゃないぞ？ アリカの尻にでも敷かれてるといい」

「よけいな世話だよ。俺を誰だと思ってやがる？ 最強の格好いい魔法使い様だぜ？」

ま、ナギが死ぬところなんぞ私にも想像できないからの。私はゆっくりスクールライフを楽しむことにしよう。

「エヴァ、ログハウスとやらに、」

「お姉ちゃん、と、呼んでもいいぞ？」

ニヤニヤ笑うエヴァ。

……ナギに笑われた鬱憤を私で晴らすつもりじゃな！？

「んー？ 学校で怪しまれないためにも、練習しておいた方がいいんじゃないか？」

「……姉さん、ログハウスにいくにゃ」

「うむ、満足だ」

……ストレス溜まりそうな予感がするにゃ。

にゃんだと!?(後書き)

まさかの主人公の立ち位置Ⅱエヴァの妹(

にゃんくるにゃるさー(前書き)

エヴァ様絶賛弄られ中

にゃんくるにゃるさー

「これより第X X回、全学校合同入学式を――」

おお……近右衛門が堂々としておるの。

今日まで散々からかっておったから逆に滑稽じゃ。

エヴァと違って私は学校に縛られておらんからの。大人しくしてやる理由はないんじゃないよ。

ふむ……しかし、ぱっと見た限りではあの後頭部を怪しんでいる生徒はいないようじゃな。

まあ、私の耳や尻尾を気にしている生徒もおらんことじゃし、麻帆良の認識障害魔法とかいうのも大したものなのじゃろう。

……私の耳や尻尾はまだコスプレというように誤魔化すことが出来ても近右衛門の後頭部はまず無理じゃからな。

というか認識障害が必要なのは近右衛門が原因じゃろ。あれは一目見ただけで魔獣の、ひいては魔法の存在に気付かれるからの。

認識障害魔法がなければ後頭部だけを理由にオコジョにされておったじゃろう……近右衛門もよくあそこまで育てたもんじゃ。

です近右衛門がオコジョか……顎髭をたくわえて後頭部が突き出たオコジョ……学会にでも連れて行けば一儲けできるかもしれんの。

「新入生の皆さんは担任の先生の指示に従って――」

舞台袖の若い男がそう言って式を締めくくった。

あれ、終わってしまったのかの？

「……しまった。近右衛門の話、完全に聞いておらんかったわ」

「問題ない。私は最初から寝ていた」

「エヴァよ……初日くらいしっかりしようと思わんのか？ 学校

は初めてなのじゃろ？」

……ああ！

初めてだから楽しみで昨日は夜更かししてしまったんじゃない！
そこに近右衛門の長話を聞かされれば眠りたくもなるの！

「サイ、なにか意味不明なことを考えていないか？」

「エヴァは可愛いのか、とな」

「先に言っておくが、私が姉だからな？」

「……双子設定なのじゃからそんな肩書きはお飾りじゃ」
「それでもだ！」

自分が上じゃないと気に入らないのかのう……まあ、この間の魔法戦では私が負けたからの従うのが筋じゃろ。

なんというんじゃっけ？

日本で言う……兄貴と子分、ってやつかの？

「お姉ちゃん、今度魔法を教えてくださいんかの？」

「い、いきなりお姉ちゃんとか言うんじゃない！」

おお、照れた。

「かーわいいのう」

「……リク・ラク、痛あっ！？」

「アホか。こんなところで魔法を使ってみろ。瞬く間にオコジョに……エヴァならされないかもしれんの」

返り討ちにしようじゃし。

……と、あれが私の教師となる男か。
けったいなサングラスをしておるのお。

「君達の担任となる神多羅木だ。1－Bが退出するまで座っていてくれ」

随分若いのう。

教師一年目とかそういう感じかの。胡散臭いサングラスもキャラ作りのためかもしれんし、あまりつつこまん方がよいじゃろ。

（サイ、あの男、魔法使いだ。油断はするなよ？）

「えっ、魔法つかむぐう！？」

（バカもんっ、何のためにテレパシってると思ってる！？）

おお！

なにやら頭の中がむず痒いような感じがしたのじゃが、これがテレパシーというもののなのじゃな！

……じゃが、送り方が分らんのを。

むむむむ……送れたかの？

（サイ？ 何を唸っている？）

むむむむ！

（お、おい？）

むー！

……お？ 出来た気がしたんじゃが……エヴァからのリアクションがないのう。

もう一度だけ試してみるかの。

（近右衛門は女子中学に学園長室を置いている辺りペドフィリアな

気がするのじゃが？ 女子高校ならまだしも中学じゃからの……犯罪だと思うのじゃ）

（……そ、そのようなことを言われましても）

お？

エヴァの声が渋いのう……というかまるで別人の声じゃ。でもどこかで聞いたことがあるような……？

（サイリル殿、魔法生徒という立場は束縛も多いとは思いますが、このようにいきなりからかわれると心臓に悪いので……）

（……おお！）

びくう！？

「おっ……ぬあああ！」

……テレパシーの相手は神多羅木じゃったのか。

私がいきなり大音量を送ったからか、神多羅木が驚いて足をもつれさせて転んでしまった……謝るべきじゃの。

女子生徒たちにもクスクスと笑われて……不憫じゃ。

（なんというか、すまんかった）

（いえ、そのようなことは……）

ふーむ。

しかし渋い声の大人に敬語を使われるというのも気持ちが悪いのお。

そもそも、私に敬語で話すのはアルとタカミチとクルトくらいのものだったからもう。敬語自体慣れぬわ。

(まあ、私とエヴァを退屈させないよう頑張ってたもれ)

(精一杯頑張ろうと思います)

(うむ)

ふむ……神多羅木、改め、黒グラのおかげでテレパシーのコツもつかめたの。

あ、そうじゃ。一つ言い忘れておった。

(神多羅木先生は髭を伸ばすと似合うと思うのじゃ)
(……考えてみます)

なんとなく、黒グラはハードボイルドになる気がするんじゃ。
今はまだ若々しいがの。

「1-Cの生徒は付いてきてくれ」

C組は私達じゃの。

「エヴァ、早く立たんか」

「それはいいが……あの教師、私達に怯えておるな。気に入らん。
教師ならば生徒に対しての態度というのがあるだろう！」

「いや、私達姉妹に限っては無理じゃろ」

大戦の英雄の末席に加えられることもある私と、つい最近まで六
百万ドルの賞金首出会ったエヴァに対してガツンと言えるものなん
て……しかも双子の姉妹なんていう繋がりも出来ておるし。

ああ、エヴァが麻帆良に在籍するに当たって賞金首からも外され
たようじゃ。最近は賞金稼ぎも殺さずにいたのが幸いしたらしい。

もう追われることもないと知ったときのエヴァは、少しだけ目を
潤ませておったのう。

エヴァも少しだけ学園生活を楽しみにしておるようじゃし、いいこと尽くめじゃの。

「ほら、立たんか」

「……うむ」

そして、式が行われていた大講堂を出たて、黒グラが生徒全員に今日はこれで終わりだということを伝えた後、事件は起きた。

「おー、サイ！ エヴァ！ こっちだ！」

「あの、バカナギ……大声で叫びおって恥ずかしいわ！」

ナギの大声が大講堂前に響いた。

周囲の人々も何事かとナギと、私達に注目する。

じゃが、恥をかかされたから、今すぐに蹴り飛ばしてやろうと走り出したら、

ちょこん

と、エヴァに制服の裾を掴まれた。

え、なに、どうしたんじゃ？

「こ、こんなに人が多いところで置いていこうとするな。迷ったらどうする」

「お、おお？ ……さては、不安なのじゃな、姉さん？」

「む、ムカつく笑い方をするんじゃない！ 仕方ないだろう。人とは距離を置いて生活してきたのだから」

「ほんと、可愛いのうち……ま、そのうち慣れるじゃろ。とりあえずナギのところに行くとするぞ……よっこらせっと」

「なっ、おまつ、離せ！」

むう、暴れるでない。

テレテレと歩くエヴァの手を引くのがめんどくさくなったから、いわゆるお姫様だっこをしてみたのじゃが……そこまで照れることでもないじゃろうに。

「さ、サイ？ ……顔が近い」

「む、すまぬ。つい見てしまっただけじゃ」

しかし、見れば見るほど私と似ておるのう……私が金髪のままじゃったから見分けがつかなくても仕方ないかもしれんの。

黒髪にしておいてよかったわ。

「おい、ナギ。あまり大声を出すんでない。注目されるのは面倒じゃ」

「えー、こういう時は大声で呼ぶのが常識だってアルが……」

「相変わらず簡単に騙されておるの……それは親バカな父親かやるようなことじゃ」

実際、何人か同じようなことをしておる者もおったからの。だからと言って恥ずかしいものは恥ずかしいのじゃが……

ところで、アルはどこかの？

「誰を捜しているのです？」

「うにゃあ！？ アル！ お主は毎度毎度、私を玩具にするでない！」

背後から声が聞こえたと思ったら背中を掴みあげられておった。猫みtain扱いをするのはやめろと何度も言ったはずじゃがな。

まったく、服が伸びたらどうするつもりにゃ！ ……じゃ！

……人間と交わって生活するために極力、猫っぽい語尾を無くそうと頑張っておるのじゃが、なかなか難しいの。

「ふむ、黒髪幼女 with ネコミミしっぽですか……今の貴女に似合いそうな服があるのですが、どうします？」

「うむ、貰う」

「では……っは！」

裂帛の気合いと共に吹きすさぶ風が土煙を起こして視界を奪う。
いや、服を取り出すだけでカッコつけられても困るのじゃが……
というか、これ、ラカンの技じゃな。

「いざ、無音脱がし術、改め、無音着せ替え術！」

「ひゃ！ って脱がすんじやにゃい！」

「ふふふ、恥ずかしがる必要はありません。自分の格好をよく見て下さい……」

「脱がされておるのじゃから普通は……なっ、なんじゃと!？」

収まってきた土煙の中、私の目に飛び込んできたのは雪のような白。

これは、ジャパニーズ・キモノ!？

着せられた感覚など皆無じやったのに！

……ただ、キモノは太腿が露出するような服ではなかったはずじゃが……まあ可愛いから無問題じゃな。

「腕を上げたの、アル。これはどうしたんじゃ？」

「貴女が黒髪になったと聞いた日から和裁を習い始めたのですよ……洋裁と違いフリルもレースもありますが、清廉とした雰囲気を持つ和装は奥深いものですね」

「て、手作りじゃったのか……お主、やるのう」

「というか、私が黒髪になってからあまり時間がたっていないのじゃが……」

「ふふふ、着こなす貴女もなかなかどうして」

あはは、ふふふ、と二人で笑っているとエヴァとナギが私たちを半目で見ているのに気がついた。

なんじゃ、文句があるならはっきりしてほしいの。

「いや、なんだ。さっきのナギの時の数倍恥ずかしいんだが……」
「ほら、周りもすげえ注目してるぞ？」

むう……せつかくの旧友とのじゃれ合いだというのに。
そうじゃ！

「アル！ エヴァに私が気に入っていたあの服を！」
「了解です！ はああああっ！」

アルの右手があまりにも速く動いたから光の残滓しか見て取れぬ……なるほど、あの速さなら私が着せ替えられたのに気付かないのも不思議ではないのう。

そう、思ったのじゃが……

がしっ！

「な、なんですって!？」

「遅い……というか、そのバカみたいに高いテンションはいらないだろう」

「エヴァ、お主、まさか止めたのかの……?」

信じられぬ。

麻帆良の吸血鬼は化け物か！？ ……化け物じゃった。

むう……私は止められなかったのに、悔しいのう。

「なにより、エヴァが私が入っていた服を着たがらないのが悲しいのう。やはりお気に入りとは言え所詮はお古。気位の高いエヴァに拒絶されるのも当たり前じゃな……」

「さ、サイ？　そ、そんなに私に着てほしかったのか？」

「うむ」

「そ、そうか、なら仕方ない。ただし、自分で着るからな！」

エヴァの決意と同時にニヤリと笑ったアルが洋服を呼び出した。

……ところで、どこから出しておるんじやろ？

「こ、これか？」

「これじゃ」

アルが取り出したのは超フリル、超レース、超リボンのロリータ服じゃ。

うむ、私、よくこれを着ておったの。

誤解の無いよう明らかにしておくがの。この服は私が気に入って“おった”服じゃ。今じゃ着れぬ。

「こ、こんなものがっ、」

「着れぬのか？　じゃが、普段から似たような服をきておるのに……」

「あれはゴスロリだ！　これとは断じて違う！」

うむ。

色が問題なんじゃ。

エヴァに普通に黒を着せても、普通に似合うから面白くないの。
じゃから、今回はピンク地の甘ロリじゃ！

「きゅ、吸血鬼の私は黒が基本なんだ！　ましてやピンクなんて、」

「まあまあまあまあ」

「まあまあじゃない！」

「まあまあ」

エヴァの気を引きながらアルに視線を送る。着せ替えの合図じゃ。
背後に気を配っておらん今のエヴァなら赤子の手を捻るようなものじゃろ。

「しかし、顔を赤くして照れるエヴァも可愛いのう」

「なっ！？　……お前はまたそうやって、」

「アル！　今じゃ！」

「はいっ！」

「なっ、サイ！　謀ったな！？」

……会話によって生み出した隙を見逃すはずもなからう。

「ウェンデ
風よ」

着せ替え終わったのを見計らって土煙を吹き飛ばす。

その先にはいつもと違いピンクの甘ロリに身を包んだエヴァ。羞
恥からかスカートの裾を両手でつかんでおる。

なぜか、色が変わるだけで恥ずかしく感じるんじゃよ。

平気な顔をしてこれを着ていたなんて、私も若かったのう。ナギ
が爆笑しておるが、それも仕方のないことじゃ。

……む、もしや。

「エヴァ、下着はどうなっておる？」

「どっ、どうにも……なって、いない」

「さすがのアルも下着までは無理じゃったか……ひょいっとな」

「あっ!？」

……さすがアルじゃ。

下着もしっかりピンクのフリフリ、ガーターベルトまでつけるとは大した余裕じゃのう。

「~~~~~っ!」

「サイ! 離れて下さい!」

しまった! やりすぎたか!

エヴァの体があまりの恥ずかしさにプルプル震えておる。

「……殺す。お前ら全員殺して、私も死んでやる!」

ど、どうすればいいんじゃ!

完全に……いや、まだ手はあるのう。

おい、ナギ! いつまでも爆笑してないでそろそろ役に立たんか!

「いいか、ナギ、ごによごによごによ」

「はあ!? 何で俺が!？」

「お主しかおらんじゃ! ……もし手伝わなかったら、アリカに有ること無いこと言い触らすにゃ」

「……………分かった」

ナギもナギで扱いやすいの。

アリカの名前を出せば大抵のことはやってくれるんじゃ。

「エヴァ」

「な、ナギ……?」

ナギがエヴァよ両肩を掴んだだけでエヴァが乙女表情になる。

「その服、お前に……」

「私に……?」

が、頑張るんじゃ!

そこで笑ったらいろいろと台無しになるんじゃないかな!?

「お前に、似合ってるぜ?」

おお! やりおった!

ナギの爽やかスマイルにエヴァも恥じらっておる。これならきつと、

「ぶふお! げほっ、も、もう無理……我慢が」

アーツ! なんでもそこで吹き出したんじゃ!

せっかく丸く収まりかけていたというのに、むしろ持ち上げた分、落差が激しくなって……ほ、ほんとに殺されるかもしれない。

「な、ナギ」

「……っは!?! いや、違う、誤解だぞ。エヴァ、似合ってるから大丈夫ふう!」

逆効果!

「ナギなんて、大嫌いだ！　うわあああん」

……お？

泣いて逃げ出した……？

助かった！　私達は助かったんじゃ！

しかもエヴァの怒りはナギが全部持つて行ってくれたからの。
私はベッドでグズるエヴァを慰めつつ楽しむとしよう。

「終わりました？」

「アル……相変わらず逃げ足速いの」

にゃんということでしょう。使い古した靴箱が（r y）（前書き）

劇的ビフォーアフター面白いですよね（

にゃんということでしょう。使い古した靴箱が（ry

「このxに3を「にゃー」代入す「なぉーん」と「にゃん」こつちが「ふかーっ!」このように「ふぎゃっ!」……サイリルさん、教室に猫はつ「ふーっ!」れてこないでくれ」

「ああ、お主ら喧嘩するでない。授業中に騒ぐなんてメツ! じゃぞ? ……すまぬの黒グ、神多羅木先生。あと、さんなぞ付けられるとくすぐったくてかなわん。呼び捨てにしてみたもれ」

「そうか。猫たちは……」

「うむ、わかっておる……ほれ、退屈だとは思うが後ろで大人しくしておるのじゃ。いい子にしてたらあとで毛繕いしてやるからの」「にゃー!」「なぉーん」「にゃん!」「みゃー!」「……にゃ」

よし、いい子じゃ。

しかし、この学問は数学といったか。

この世の摂理の内の一つらしいのじゃが……なかなか興味深いの。まさか数字と記号の組み合わせだけで減少を引き起こせるとは……5+1=6とは猫の子が一匹増えた、という意味らしいのじゃ。

これは先程の子猫達から聞いた話じゃがな。

ただ、新入りは生まれてすぐに飼い主に捨てられたらしく人間への警戒心が強いらしくてのう……猫らも連れてきてくれようと説得したらしいのじゃが、人の多い大通りで新入りは立ち往生してしまつたらしいのじゃ。

仕方なく猫らは私とエヴァが住んでいるログハウスに新入りを押し込んでから学校に来たらしい。

（サイ! 授業は真面目に受けんか!）
（分かった分かった）

まったく。

エヴァも随分真面目じゃのう……やはり、初めての学校生活が楽しいのじゃろうか？

私としては一カ所に留まらなければいけないのは堅苦しくて好かんのじゃがな。

「今日の宿題は32ページ右下の六問だ。では日直、号令を」

「きりーつ。れい！」

ありがとーございましたー。

そんな気の抜けた挨拶も当たり前なんだとこの一ヶ月で知った。礼儀を重んじる人間にしては珍しいと驚いたのも懐かしい記憶じや。

がらがらがらがら！

昼食の時間になると私の周りから机が退かされるのもいつも通りじゃ。私の席と、その前のエヴァの席を除いてぽっかりと空間が開く。

いや、虐められているとか孤立しているわけではないのじゃ。エヴァは人見知りの気があるから若干距離を置かれておるが、嫌われているというわけではなくいかにもヨーロッパ人のような見た目が遠慮させてしまっているようじゃ。

私は今は黒髪じゃから皆仲良くしてくれるがの。じゃが仲良く、というより可愛がられているような気もする。

む……来たか。

「にゃ！」

「にゃおー」

「みゃー！」

「なおい？」
「にゃん！」
「うみゃ？」
「みー！」
「なー！」
「みゃん！」
「「「「にゃー！」」「」「」」
「……にゃ」

うむ！

皆元氣そうでなによりじゃな。

私の席の周りに集まった数十の猫たち。これぞ我が親衛隊・10
1匹猫ちゃんじゃ！

もちろん、全ての猫の見分けはつく。左の黒ブチがチョッパー、
その隣がエッジ、後ろで縮こまっている三毛がアーチャーで、先頭、
つまり私の足にじゃれついておるのがブレイズじゃ。他にも頑固な
サンダーヘッドとか。

「む、一匹足りぬな……エッジ、やつはどうした？」
「みゃー！」

「ふむ……そうか、奴らしい最後じゃな」

エッジの話では、ここにいない黒猫——ハートブレイクはエッジ
が池に墜ちそうになったのを助けて代わりに墜ちたようじゃ。今は
風邪を引いて療養中……あとで様子を見に行行ってやるかの。

「ふああ……眠……お主ら、近うよれ」

私の周囲に猫を集める。

もふもふぬくぬく……幸せじゃのう。

このままお昼寝タイムじゃ。



サイの奴……昼休みとはいえ寝るのはどうなんだ。

だが、正直あの猫布団は心地良さそうだな……今度、サイに頼んでやらせてもらうか……？

しかし、人の輪の中に交わるなど最初は抵抗感があったが悪くはないな。最近は話しかけてくる者もいるし。

サイは私の目つきが悪いと言うが……同じ顔をしているあいつの方が親しまれているのはどういうことだ？

やはり、猫というマスコットがあるからか？

ならば私は人形か？

……しかしチャチャゼロは危ないし空気を読まないから連れてこないな。

いやいやいやいや！

私は何を考えているんだ。

別にサイのように人間に可愛がられたいというわけではないんだよ！

まったく。

サイも人間より上位の種に当たるのだから、もう少しそれっぽさをだな……端から見たらネコミミとしっぽを付けた少女なのだから仕方ないと思うが……ってそれだと私自身が幼児体型だということを認めることになるじゃないか！

……というか、こいつはどうして私と瓜二つなんだ？

周囲の環境が目まぐるしく変わっていたために落ち着いて考えられる暇が無かったが、耳と尻尾以外はもはや似ているを通り越してコピーに近い。

あの山での一件以前に私とサイが逢っていた記憶はない。となると偶然の一致と考えるべきか？

「……まあ、今のところ困っていることはないんだ。深刻になる必要はないだろう」

一時的とはいえ戦いを忘れて平和に暮らせるんだ。それ以上に望むものなどない。

本国に掛け合って私の指名手配を外してくれたことだけはジジイに感謝せねばな。

「サイ、そろそろ起きろ。昼飯食いそこねるぞ」

「はにやつ!? ……べ、別にお昼ご飯が食べたくて起きたわけではないんじゃないっ!」

そんなことはどうでもいい。

「……ボケは拾うのが礼儀だと思うのじゃが」

「お前のはボケているのか本気が分かりづらい……あとよだれをふけ」

「……むう」

頼むから私と同じ顔で、よだれを舌で舐めとるな……



ふむ、それにしても懐かしい夢を見たの……

あれは確かアスナ姫を助けるときじゃったか。アルがものすごくやる気を出していたのをよく覚えておる。

そういえばタカミチも麻帆良で学生をやっておるとか言っておったの。

……む? となるとアスナ姫は?

ガトウが死んだとき、タカミチに託されたはずなのじゃが……まさか麻帆良にはおらんよな？

ガトウは魔法世界とは関わらないようにと、そう言い残したのじゃから……タカミチに託したのもあやつが一番魔法世界との関わりが薄かったからだしのう。

……ダメじゃ。

気になる。

とても、気になる。

「エヴァ姉様。私は午後はサボり……いや早退じゃ」

「なっ!？」 学生の本分は勉強だろう! お前、まさかもう学校に飽きたとか……」

エヴァ、キャラが変わり過ぎじゃ!

本来のお主は、私が最強の魔法使いのエヴァンジェリン様だー! HAHHAHA! とか、そういうキャラだったはずじゃ! それが勉強しなさいじゃと……?」

「も、もしや、その伊達メガネもそういう理由かの?」

「べ、別にメガネの方が頭良さそうに見えるとかそんなことは……」
「考えておったんじゃない?」

「う、むう……と、とにかくっ! サボりなどは断じて許さん!」

声が大きすぎじゃ!

えー、サイリルちゃんサボるんだー、とかヒソヒソ話されておるではないか!

「まあ、今すぐ抜け出す必要もないのじゃが……」

「なら、大人しくして、」

「あえて、今から行くのじゃ! 皆の者、さらばじゃ! また明日

！」

ばいばーい。またねー。

そんな緩い声を背に学校を飛び出す。

エヴァは当然のように追ってきておるが……ふふん、エヴァは呪いで学校の敷地外には出られんからの。結果は明白じゃ。

角を曲がった瞬間、人化の術を解いて猫の姿で窓枠に飛び乗る。

「エヴァ、夜に宿題の範囲だけ教えてたもれ」

「なっ！ 待たんか！」

「あでいおす」

私を掴もうとするエヴァの手から逃れ、窓枠から外に飛び降りる。ウィंकも当然忘れてはおらぬ。

そして地面に激突する寸前に蝙蝠のような、しかし、それにしては大きすぎる上、黒すぎる闇色の翼を広げて空へと踊り出る。

……これ、本当に何の翼なんじゃろ？

「だから待たんか！ このっ！ 魔法の射手 氷の1矢！」

「お断りじゃ。ひょいっとな」

1矢で助かったの……1001矢とか撃たれておったら流石に対処できんかったわ。

さて、タカミチの所在が分からぬ以上、向かうべき場所は決まっておる。

えーと、今は校庭で体育の授業をやっておるからの。校庭を一番よく見渡せる場所は……あそこじゃな。

「邪魔するぞ、近右衛門……その歳で女子中学生の体育を覗き見かの？ エヴァに言ったら老害呼ばわりされること間違いないのう」

「ひょっ!？　こ、これはサイリル殿。今は授業中のはずだと思うのじゃが……?」

「ははは、近右衛門もボケには抗えぬか……今日は休日じゃ」

「いや、今日は木曜日の、」

「休日じゃ。文句あるかの？　喰い殺されなくなったら口答えせず聞いたことにだけ答えればよい」

「じ、ジジイ虐待じゃ!」

……よく言うのう。

関西の方の呪術士のジジイ共に圧力をかけて傀儡かいらいにしようとしておるくせに。

それに知っておるぞ?

最近、日本政府にもちよつかいだしておるじゃろ?

ま、そこら辺は私には関係ないがの。

「近右衛門。高畑タカミチはこの学校に通っておる?」

「ふむ?　……おお、あの少年も《赤き翼》の一員じゃったな。タカミチ君じゃが……ほれ、あの建物じゃ。少し遠いが分かるかのう?　赤い屋根のじゃ」

「なめるでない。私の視力は4・0じゃ。お主のしわの数まで数えられるぞ?」

数えたくないがの。

まあ、必要な情報は手に入れたから……タカミチ似合うのも久しぶりじゃし、少しサービスしてやるかの。

タカミチも中学一年生のはずじゃから大学生くらいのお姉さんに変化して訪ねたら面白いことになりそうじゃ。

っぽん!

「うひょ！」

「……近右衛門。うひょ！　ってなんじゃ？　お主、性犯罪者にしか思えなくなったのじゃが……まさか麻帆良を牛耳っておるのも壮大な光源氏計画だったりはせんよな？」

あの、自分好みの女性を育て上げるという……こやつの場合は全学生単位で？

まさか幼稚園から続いておるのかの！？
なにそれ怖すぎじゃ。

「ご、誤解じゃ！　ただ、今のサイ殿は見目麗しいのう。どうじゃ？　生徒などやめてわしの秘書になるといふのは？」
「いっぺん死にたいのかの？」

誰に向かって言っておる。

あまり調子に乗っておると後頭部を齧りとるぞ？

「じ、ジジイのちょっとしたジョークじゃよ」

「……まあよい。そろそろ行くかの」

「余り騒ぎを起こさないでくれると助かるんじゃがなあ」

「無論、近右衛門のことは信頼しておる。問題なくもみ消してくれとな」

「いやな信頼のされ方じゃな……」

えーと、丸い赤い屋根じゃから……あれじゃな。

認識阻害魔法があるはずじゃから街の上空を飛んでも問題ないじやろ。

それにしても、麻帆良は学校だらけじゃのう。

ここが女子中学校、隣が女子高等学校、その向こう側は幼稚園でその向かいに女子小学校。さらに女子大まで密集しておるのじゃ。

とは言ってもひとつひとつの敷地面積がバカみたいに広いから余り気にはならんがの。

何が気になるかと言えば、その全ての学校の校庭が学園長室から見えるように立っていることじゃな。

逆に男子校は見えないくらい遠いところにあるのも珍しくない。

近右衛門、まさか本当に……？

「つと、タカミチの学校はここじゃな……ここね」

やっぱり大人のお姉さんを演じるのじゃから口調もそれっぽくせんといかんの。

とりあえず、この学校の校長にあって呼び出させよう。魔法先生ではないかもしれぬからここからは徒歩じゃ。

どうやら休み時間のようじゃな。

男子生徒を捕まえて校長室まで案内させるとしよう。

「すいません、校長室はどこでしょうか？」

むー、こんな丁寧な口調で話しておると鼻がむずむずするのう。早くタカミチをからかって用事を済ますとしよう。

「え？ あ、えっと、その」

「大丈夫、落ち着いて？」

私に話しかけられただけでしどろもどろになって……初心じゃのう。

同じ学校の生徒がこの調子ならタカミチのリアクションにも期待できそうじゃな。

「はひっ！ あ、ああ、案内します！」

「ふふっ、お願いね」

ぬぁー！？

ふふっ、ってなんじゃ私！ 気色悪っ！

……昔はしょっちゅうこうして詠春やタカミチ、クルトをからかっておったから何とも思わなかったんじゃが、久しぶりにやると全身に鳥肌が立ちそうな気分じゃ。よくこんな真似できたのう……

少年と適当な会話を交えて反応を楽しみつつ階段を上ったり歩いたり。

意外と遠い、なんて考え始めた頃、ようやく男子生徒が扉の前で止まった。

「こ、こここ、ここです！」

「ありがと……ちゅ」

「っ！？　　！？　　そ、そそそ、それでは！」

サービスでデコチューじゃ。

ふふん。これでこの子も私にメロメロじゃな。もう会うことはないと思うがの。

「これじゃから少年をからかうのはやめられんの……こほん、失礼します」

「おや、これはこれは。学園長殿から話は聞いております。一年生の高畑君の親戚とのことですが今日は一体……？」

「偶然、真帆良での仕事があったのでついでに甥っ子の様子を見ようかと……寮生活ではありますが、一応、後見人としての立場もありますから」

……近右衛門よ、連絡を入れてくれたのはありがたいが、その内容を私にしっかり伝えてもらわんと困るではないか。

タカミチは身よりもなかったはずじゃし、この言い訳で平気だとは思うがの。

「そうですか！ いえ、親がいないこのことで私達も心配していたのですが高畑君は真面目に頑張ってますよ。担任の話ではリーダーシップもあつてクラスの中心になっているとか」

「まあ、タカミチ君も立派になって……」

ふん。

一応タカミチも《赤き翼》の一員じゃ。平々凡々の中学生と比べても結果など分かりきっておる。

「しかし、部活もせず誰よりも早く帰宅してしまうのが気がかりなのですが……寄り道もしていないようなので心配はないのですが」

「まあ……」

……タカミチ。

それは誰かを待たせているからか？ ……やはりアスナ姫も連れてきておるの。

早く戻るのは護るためか、はたまた別の理由からか……ガトウの言葉を無駄にしておって。

お仕置きじゃな。

「なるほど……すいませんが呼び出しと早退の手続きをしていただけませんか？ どうしても話さなければならぬことがあるのですが私も忙しい身なので……」

「ええ、そのことも学園長殿から伝え聞いています。おーい、君、一年生の高畑タカミチ君の早退手続きと呼び出しを。場所は校長室だ。」

ふむ、近右衛門もたまには役に立つの。無駄に年を重ねたわけはないということじゃな。

他にも何か聞いているのか、校長は一言二言を残して部屋から出て行く。

……近右衛門の権力もなかなかのものなんじゃな。

「つと。耳と尻尾も消さぬとバレてしまうの……消すのではなくて意識誘導の魔法を使うかの」

気を張っていれば十分気付けるレベルじゃ。これに気付けぬようなら腑抜けになったと見て間違いないじゃろう。

軽い木の音を響かせて校長室の扉がノックされる。

「失礼します……あなたは？」

ふむ……随分と大きくなったのう。

人懐こかった雰囲気も落ち着いた感じになっておる……多分に作っているような気もするがの。

まあ、《赤き翼》として世界を救った者が今更学校に行くというのも馬鹿らしいものだとは思うがの。

「……警戒はしていてもこれではの」

「っ！？」

「相手の手足を気にするのも戦いの定石とは言えるがの、」

戦い、と言った辺りからタカミチが気配を変えおった。

……ふむ、咸卦法もどきか。

まだ完成させられないとは未熟者め。

「……相手の力量を見誤ると気づかぬ内に死ぬぞ？」

「なっ!?!」

一瞬でタカミチの背後に回っただけでタカミチは驚きの声を上げる。

……最初はからかうつもりじゃったが、ここまで弱いとそれどころじゃないのう。

少し、鍛え直すかの。

「麻帆良女子中学校は分かるな？ 放課後、その敷地の外れにあるログハウスに来るのじゃ」

「あなたは、一体……?」

「相手を警戒するときは、まずその全体を見るのじゃ。そうしないと大事なものを見逃してしまうからの……耳とか、尻尾とか」

「……っあ!」

「ではの」

タカミチをひとり残して校長室を後にする。肝心のアスナ姫のことを聞いておらんかったが十中八九連れてきておるじやろう。

タカミチがログハウスに来るのが五時くらいだとして……明日の学校まで十四時間程度は余裕があるな。

エヴァのダイオラマ魔法球を使えば約半月……お仕置きを兼ねた修行にはちょうどよいじやろう。

にゃんじゃこりゃあー!?!? (前書き)

序盤からは予想のつかない展開になりますヨ

にゃんじゃこりゃあー!?

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト」

本当に、エヴァの別荘はいいところじゃな。

空気も澄んでおるし、海も遠浅で綺麗なエメラルド色じゃ。

……それだけに残念じゃのう。

「来れ深淵の闇 燃え盛る大剣! 闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焰! 我を焼け 彼を焼け 其はただ焼き尽くす者 奈落の業火! 術式封印!」

ここが煉獄になってしまったなんて……

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 契約に従い我に従え炎の霸王! 来れ浄化の炎 燃え盛る大剣……ほとぼしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄……罪ありし者を死の塵に! 燃える天空!」

人間の魔法使いの分類では広範囲焚焼殲滅魔法と言ったか。エヴァのこおるせかい、ナギの千の雷と同じ威力を誇る火の魔法を、

「奈落の業火も解放じゃ!」

二つ重ねてぶっ放す。

「ちょ! サイリルさん!? って、うわあああ! こうなったら……」

む、海に逃げるつもりかの……?

「タカミチ、塩茹でになっても私は食べてやらぬが……？」

「っ！？ 熱う！？ サイリルさん、熱湯じゃないですか！」

「ははは！ お仕置きなのだから当たり前じゃろう！ キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 契約に従い――」

私が今いるのは上空五十メートル。

タカミチの居合い拳もどきでは届かない距離からの一方的な攻撃じゃ。

「紅蓮蜂！」

「っ！ 居合い拳！」

私が呼び出した蜂……型の自走式高火力爆弾的なのをタカミチが撃ち落としていく。

あの程度ならタカミチでもできるんじゃない。

「タカミチ！ 私を一発殴ったら終わりにしてやっても構わぬぞ？」

「む、無茶な……」

「バカもん！ ガトウの何を見てきたのじゃ！ 虹色パンチはともかく豪殺居合い拳くらいは使えるようにならんか！」

「七色パンチで……わかりました」

ふん。

最初からやる気を出せばいいものを……

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 魔法の射手 連弾 火の1001矢……と、魔法の射手 連弾 光の1001矢！」

2002本の魔法の矢が纏めてタカミチに殺到する。逃げ道は残

してあるから心配ないとは思うが……消し飛ばしてほしいところじやの。

まあ咸卦法もまともに使えていないタカミチにそれを期待するのは酷じゃろ。

「ごほっごほっ！」

「少し、やりすぎたかの……？ 煙がすごいことに」

本当にエヴァに怒られるかもしれんの。

そもそも無断で借りておるし。余所者入れておるし。

……そういえば、私ってどんな魔法使えるんじゃろ？

火属性はまあ結構使えるんじゃが……他は試したことないの……

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 氷の精霊17頭 集いきたりて敵を切り裂け 魔法の射手 連弾 氷の17矢！」

シーン……

ふむ、氷の適正はない、と。

次は……

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 闇の精霊101柱 魔法の射手 連弾 闇の101矢！」

ふよふよ……

……勢いが無いのう。

一応、出せることは出せるのじゃから特訓次第でいけるとってもいいかの？

「キヤット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 風の精霊17人 縛鎖となりて敵を捕らえよ 戒めの風矢!」

「え!?! ちょ、うわわわ! サイリルさん風魔法も使えたんですか!?!」

「らしいのう……じゃが、得意と言うほどでもなさそうじゃ」

「……そんないくつも使われたら勝ち目なくなりますからね」

結局私の魔法の適正は火と光が抜群で風が次点、闇が使えないこともないレベルで氷は論外というところかの。
ならあれが使えるの。

「キヤット・ザ・ナイト・ヘル・バイト」

「まだやるんですか!?!」

そりゃあ、お仕置きじゃからな。

「来たれ火精 光の精! 光を侍らせ喰らい尽くせ 灼熱の日輪! 光の劫火!」

極太ビーム的なものがタカミチに向かって照射される。

光が入っておるからかの。他の中級魔法よりも速い。

うむ、これじゃこれ!

エヴァの闇の吹雪とかナギの雷の暴風みたいなちよいどいい火力の魔法がほしかったのじゃ。

今までは魔法の射手の数を増やして対応していたからの。

「しかし……タカミチは弱いもう」

「そりゃ……ナギさんやラカンさんと肩を並べられるあなたと比べたら、」

「なに言ってるんじゃない?」

誰も私と比べて、なんて言っておらんじゃろ。

「タカミチ。お主は、普通に、弱い。あーゆーおーけー？」

「こ、これでも《赤き翼》の一員です！ そこの魔法使いには負けません！」

「そうかの？」

そこまで言うなら試してやるかの？」

「プラ・クテ・ビギナル 超・倒れろ！」

「ふぐあっ!？」

……顔面から逝ったのう。

少し、魔力を込めすぎたかもしれん。

「おーい、タカミチ生きて……む？」

腕が、プルプルしておるの。

「ふっ、ぐぬぬぬぬ！ っはぁ！」

おお、腕力だけで耐えておったのじゃな！ 魔法使いの強さとは違うような気がするのじゃが……まあ、呪文詠唱のできないタカミチにはぴったりじゃの。

「か、体を鍛えることも忘れていません」

「……プラ・クテ・ビギナル 超・風よ！」

「ぬらぽれぷれひらああああ……」

突風がタカミチの体をさらい、エヴァの別荘の壁にぶつけた。

……なにが忘れていません、キリッ、じゃ。

初心者用の魔法を耐えたくらいで天狗になるでない。

……それにしても超って付けて魔法を強化するのはなかなか使えるのう。まあ、単純に魔力を普段の数倍使っているだけなんじゃがな。

どうも魔法というのは精霊を雇うことらしいの。

沢山魔力を使えばより多くの精霊を雇えるし、一匹に多くの魔力を与えればいつもより頑張ってくれるようじゃ。

やはり金と魔力は裏切らないのじゃな。

ふーむ……精霊と仲良くなれんかの？

そうすれば苦手な魔法もなくなるかもしれん。

しかし、精霊と話せんしのう……しかし呪文詠唱によって精霊とコンタクトをとっているわけじゃから、こちらの言っていることは伝わるかもしれぬ。

ならば、

「今日も世話になったの。感謝する……私は生まれつきこんな口調じゃが親しくしてくれると嬉しいのう」

これでよし。

きつと私の気持ちは十分伝わったはずじゃ！

そういえば日本には祖霊を祀るためにブツダンというものに食物を備えるとか……ナスとキュウリに足を生やすんじゃったっけ？

まあ、細かいことは気にしなくともよい。祖霊も精霊も同じようなものじゃろうからな、別荘から出たら早速お供えものを用意しようかの。

これで、きつと私の魔法の威力も上がるはずじゃ。

「さて……タカミ、」

「なんだこれはああああ！？ 一体何が！？ つは！ サイ！
サイ、いるのか！？ 無事なら返事しろ！」

しまった……エヴァに説明することを考えておらんかった。

ここまで破壊したらきつと怒られるにや……じゃろう。

置き手紙には別荘にいるとしか書かなかったしのう。

きつとエヴァの頭の中には、

壊れかけの別荘十ある程度有名で恨まれている私Ⅱ暗殺

というような数式が展開されておるはずじゃ……うーむ、数学というものは本当にすごいもの。

とにかく、私がエヴァに怒られないためには本当に殺されかかったことにするほかないの。

よし！ 変化！

服が千切れて傷だらけの少女モード！

「え、エヴァ……こっちじゃ……はやく……つく！」

「サイリル！ おのれ！ 一体誰がこのようなことを！」

「分からぬ……何者かが、この別荘のことを知ったのじゃろう……待ち伏せされておった……」

「そいつの特徴は！？ 言え！」

と、特徴！？

いや、分からぬって言ったじゃろ！？

「それより、服を、持ってきてくれぬかの……これでは心許ない……」

「お、お前っ！ まさか、傷つけられただけでなく、おかっ……犯されたのか？」

「は？」

「おのれ……私の妹を襲いレイプするとは……二重の意味で傷物に

した罪、どう償わせてくれようか……？」

あ、あー……下着、イメージしておらんかったやもしれぬ。
というかじゃな、その、なんじゃ？

れ、レイプとか、エヴァにはまだ早い言葉だと思うのじゃ。その、
もう少し女の子らしい表現をじゃな？

せ、せめて伏せ字とピー音は必要じゃ。

「そうか……無理矢理、純潔を奪われたショックで記憶が無くなっ
ているんだな……？　そうだな、無理に思い出させることもあるま
い」

「っほ」

「身体に聞こう」

「うにゃ!？」

ちよ、ちよっとエヴァ、それは不味いのじゃ！

わ、私が嘘をついたことを知られたらジ・エンドじゃ！

「サイリル……見ろ！」

見ちゃだめにゃ見ちゃだめにゃ見ちゃだめにゃ見ちゃだめにゃ…
…見ちゃ、だめにゃ！

……うわー、おめめ真っ黒じゃよ？

首を掴んで無理矢理見せさせるなんてなんて、ズルいと思うんじ
ゃ……

「ほほう……」

ば、バレたにゃー！

「あ、あの、エヴァ……？」

「何故、正直に言わなかった？」

「そ、その、やりすぎてしまったからの……怒られると思ったんじゃない」

「阿呆！ 別荘のことよりサイの無事の方が重要だ！ ……あまり、心配をかけないでくれ……」

ぎゅっとエヴァに抱きしめられる。

「む……」

「仮初めでも、お前は私の家族だろう……？」

家族、のう……？

エヴァ、そんなに独りは寂しかったか？

現在いまどこか始まりすら人間ではない、全く種族の違う私を家族と見立ててしまうくらいに？

エヴァは、私にそれを期待しておるのか？

「じゃが、私は……」

「さ、サイリルさん……やっぱり僕には……」

「おお、タカミチいいいっ！？」

おおおおお！？

え、エヴァ！ 急に引っ張るでない！ 首が折れるかと思ったぞ！？

「おい、サイ！ あの小僧は何者だ！？ 何でここにおる！？」

「や、お主、さっき私の記憶を見たんじゃない？」

「う？ む、そうだったな。ナギの仲間の弟子、ということだな？」

んう？

なんじゃろ？

いま、エヴァがすごく妙な反応をしたような気がするのじゃが…
…例えるならば、他に気掛かりなことがあって失念していたとでも
いうような…

思い過ごしかなの？

「そうじゃ…エヴァ、お主、確か咸卦法の理論とか組み立ててお
ったな？ タカミチの手助けをしてはくれんかの？」

「どうして私が…」

「私は私でしたいことがあるからの。この通りじゃ！ 基本的には
小突き回して生存本能にアプローチすればいいと思うのじゃが…」

旧世界のマンガ、というものの主人公はそうやって強くなってお
るからの。

連休になったら別荘を使って百日不眠特訓なんかもいいかもしれ
んの。

「サイ、お前のしたいことというのはなんだ？」

「合体魔法じゃ。ナギはよく杖に魔法を纏わせて戦っておったじゃ
ろ？」

「ああ、それが？」

「なら、魔法に魔法を纏わせることも…できると思うのじゃがな」

もし可能ならば魔法戦闘の在り方を大きく変えることもできるは
ずじゃ。新たな形に変えてしまう融合魔法ともまた違う魔法じゃ。

融合魔法は楽しいが頭使うからの…

「例えばどんな感じだ？」

「そうじゃな。燃え盛る炎の神剣に紅蓮蜂の精霊を纏わせたりとか

どうじゃ？ 振れば火炎で当たれば爆発じゃ」

「ふむ……それはありだな。氷神の戦槌に氷爆なんかも出来そうだし……なにより面白そうだ。よし、あの小僧と理論は私に任せろ」

「私は実際に使って試してみるかの」

まあ、まずはさっき言ったのを再現してみるかの。

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 契約より我に従え 炎の精霊集いきたりて――」

「お、おい、いきなりやると危ないぞ？」

「紅蓮蜂 術式封印！ ……まあ、まずは何がダメなのかを知る必要があるじゃろ？ じゃから、よく見てたもれ」

「むう……危なそうだったら中断するんだぞ？」

えーと、紅蓮蜂を右腕に纏わせておるから……これを包み込むように燃え盛る炎の神剣を形作ればよいかの？

「分かっておる……キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 九つの鍵を開きて レーギヤルの筐より出て来たれ 燃え盛る炎の神剣！ 紅蓮蜂 解放！ ……む？ むむむむ？」

「まさか、最初から成功か？ いや、そんなわけは……だが安定して、」

「あー、エヴァ、失敗じゃ。タカミチをつれてなるべく遠くに逃げてたもれ」

無理矢理押さえつけておるが爆発しそうじゃ。

……うーむ。

左腕は覚悟した方がいいかのう？

「人型なら問題ない。じゃが猫に戻ったとき三足では歩けないのう」

「何を馬鹿なことを言っている！　何か、何か方法はあるだろう！？」

「んや……まあ、よくよく考えてみれば同じことを考えたものはいたはずじゃ。それなのに公表されていないことを考えると……禁忌なのかもしれぬ。人間なら死ぬじやろうし」

全力で障壁を展開しても肘から先は消し飛ぶの。

人型状態じゃと祓雷爪牙は首飾りだから意味ないしのう。
フッライノソウガ

まあ、使えたところで少しダメージを減らす程度じゃがな。

「む……あ」

「サイ！？　助かりそうな方法でも思いついたのか！？」

「んや……この距離からの爆発じゃと仮に助かっても体中は大火傷。数日以内に処置をしないと死ぬことに気がついてただけじゃ」

「な……」

いやー。失敗したのう。

やっぱりエヴァの言うとおりにある程度の理論を完成させてからの方がよかったんじゃない。

ふむ、死ねば、この楽観的な思考回路も治るかもしれぬ。

案外悪いことばかりではないの。

「さ、サイ？　何を笑っている？　あ、諦めたり、するんじゃないぞ……？」

「とは言っても、未練もないんじゃないがな。エヴァ、私は元々死んでもいいものじゃったんじゃない」

「な、何を言っている！？」

「これは衝撃の新事実なんじゃがな？　私、未来の火星で生まれたんじゃない。時間遡上が成功するかを試すために送り込まれた、ただの実験体なんじゃ」

何の因果か、猫界最強などという強さがよく分からない立場に立ってしまったがの。

私が生きているのは、あの超という科学者の腕が確かだったからというだけの話じゃ。

「サイリル……未練が無いのは、本当か？」

「んう？　もちろん、」

む、エヴァが泣きそうじゃ。

……そうじゃな。

まったくもって私もあほじゃ。

「大嘘じゃ。まだエヴァとのスクールライフを楽しんでおらんし、人生初の卒業も修学旅行も体験しておらぬ。精霊たちと仲良くなる計画も実行はまだじゃし、ナギとアリカの子供も見えておらん。そういえば詠春にも娘ができたとか言っておったのう」

なんじゃ、やり残したことも意外と多いではないか……

クラスメートとのまた明日という約束も反故にしてしまうのじゃな……おそらく近右衛門が転校などという処置をとってくれるじやろうが……涙するものはおるかのう？

いてくれたなら、それほど嬉しいこともないのじゃが……

「エヴァ……いや、姉さん。可愛い妹から最後のお願いじゃ。全身火傷になったら喋れないと思うからの。きっと、学校の机とログハウスの裏に猫が集まる。あいつらに餌をあげてはくれぬか？　それと、タカミチに人一人を守る力をつけさせてやってくれ。あと、クラスメートにすまぬと。あとはナギ達に、一足先にガトウに会いに逝くと……聞いてくれるかの？」

「自分でやれと言いたいが……可愛い妹の頼みならば仕方ないなあ……お前は他の人間より長く共にいられると思ったんだがな……」
「まっってください！」

タカミチ……？

ここにきて、まだうだうだと言うつもりかの？

「アスナちゃんの、魔法無効化能力なら……」

「そ、それでサイを助けられるのか！？」

「それは、許さん。タカミチ、ガトウがお前になんと言ったのか忘れたわけではあるまいな！？ あいつはアスナ姫に魔法世界との関わりを絶って幸せに、とそう言っておったのじゃろう！ ここにきて、私の失敗でまた巻き込むことなどできるわけがなからう！」

そんなことになったら……私は《赤き翼》の連中に顔向けできぬ。

「でも！」

「デモもストもあるか！ ……私達の身勝手が、あの子を利用したのじゃ」

個人の目的のために……そんな理由では完全なる世界と同じではないか……

む？

この魔力は！？

「サイ、悪いな」

「エヴァ、お主まさか！？」

「これからお前を封印する。そのアスナとかいう小娘は必ず魔法と関係を持つからな。本人にその意志が無くてもジジイが逃すまい」

確かに……何かあれば近右衛門はアスナ姫を交渉のカードとして使うだろう。

じゃが、可能性の話じゃ！

私たちから無理に巻き込んでいい理由にはならぬ……

「あの子をこれ以上、」

「知るか！ 私は悪い魔法使いだ！ ……人の都合なんて、どうでもいい。私の都合でサイが生き恥をさらす……それも、気にならないっ！」

素直じゃないのう。

まあ、私も同じじゃがな。

生きたいの一言も言えぬのじゃから。

「だが、サイの心情も考えて。その娘を利用するのは、そいつが自分の意志で魔法に関わってからにするよ」

「ありがとう……エヴァ」

「悪い魔女にありがとう、か」

そんな顔をされては何か言ってやりたくもなる。

すまぬ、と言おうとも思ったのじゃが、それだとエヴァは気にしそうじゃしな。

「悪い魔女なら、良心も痛まないじゃろう？ なら、そんな泣きそうな顔をしないで、笑ってほしいのう」

「そんなこと、」

「エヴァ、お主、気付いとらぬかもしれんが、私と逢ってからまだ一度も笑っておらぬ。最後かもしれんのじゃ。笑ってたもれ……？」
「少し、待て」

手でぐしぐしと涙を拭い、俯いて深呼吸をするエヴァ……本当に
お別れなんじゃな。

「サイ、これで……笑えているか？」

目の周りが赤く、髪もボサボサ、お世辞にも可愛いとは言えぬぐ
ちやぐちな顔じゃが……

「うむ、さすが私のそっくりさん。可愛いもう……」
「たわけ……」

確かに笑顔じゃ。

「お前の魔法ごと凍らせるからな……リク・ラク・ラ・ラック・ラ
イラック！ 契約に従い我に従え氷の女王！ 来れ！ とこしえの
やみ！ えいえんのひょうが！」

もう完全に凍りついたの。

しまった。私、目を開いたままじゃ。

……………おやすみ、エヴァ。



「——こおる、せかいっ！」

……これで、いいんだよな？

サイリルは死なないし、アスナとかいう小娘が無理に巻き込まれ
ることもない。

だが……一緒に卒業することは出来なくなってしまったか。

明日から、あの小屋で一人暮らしか……独りには慣れていると思

っていたのにな。

「おい、小僧、出るぞ」

「は、はいっ!」

「サイに頼まれたお前の修行はこの別荘を使う。午後五時に私達の家に来い」

「はい!」

「それと……ここは立ち入り禁止だ。何人^{なんびと}たりともサイのあんな姿は見せん。分かったな!？」

「……はい」

何年後になるか分からないが……サイ、また逢おう。
必ずだ。

にゃんじゃこりゃあー!?!?
(後書き)

次の次できつと原作開始

プロローグ（前書き）

ここでプロローグなら今までのなんだったんだよ！
とかいうつつこみは受け付けます
受け付けるだけ

プロローグ

七月某日

「サイ。今日、やっと一学期が終わったぞ。お前が居なくなったあとも猫どもは教室に来てお前を探している」

「クラスの連中もお前が居なくなって寂しがっていたぞ。お前は私よりも愛想が良かったからな」

「お前は今、留学扱いになっている。だから、自力でそのとんでもないもんをどうにかできるなら、いつでも帰ってこられるからな」

「お前が無理でも、私が必ずそこから助け出してやる」

「タカミチも頑張っているぞ。才能はあまりないけどな。だが、その分努力を重ねている。そろそろ下級の魔獣なら倒せるだろう」

「お前が言っていた魔法の重ねがけだがな、やはり難航しているよ。一つも文献がないんだ。お前が言っていたように禁忌タブーなのかもしれない」

「だが必ず形にして、お前の復活祝いに理論を教えてやろう」

「では、また来るぞ」

九月某日

「また、学校が始まったよ。お前はいつ戻ってくるのかと聞かれたが答えられなかった」

「恥ずかしい話だがお前の名前を出されると自分が情けなくなっとな。さっき、泣いているのを見られてしまった」

「泣くのなんて何十年ぶりだろうな。私は吸血鬼お前に造り変えられた時も悲しみより先に怒りがきた。自分より人のことの方が苦しいなんて妙な気分だよ」

「そういえばタカミチが豪殺居合い拳というものが使えるようになったと騒いでいたぞ。まあ、奴の咸卦法も大分完成に近づいているよ」

「まあ、別荘の中に半月間閉じこめたからな。一年間分の時間を修行だけに使ったようなものだから当然だろうさ」

「あと、どれくらい経てばお前は帰ってこれるんだろうな」

四月某日

「サイ、私は二年生になったぞ。うちの学校、クラスメイトは変わらないらしいな。正直ほっとしている」

「最近遊びにも誘われたりするぞ。この前はボーリングとかいうものに行ってきた。あれはなかなか楽しいな」

「あとは……そうだ！ タカミチが麻帆良の夜の警備員になったぞ。あいつも頑張っていたからな。最近は修行を減らしているいろいろやっているらしい」

「ただ、最近、お前の名前を聞かないんだ……クラスの者も、タカミチもジジイもお前の名前を口にしない。いいのか？ 忘れられたままで……」

十月某日

「そろそろハロウィンだな。まあ、本当に化け物の私達には面白くもない行事だが、まあ騒がしいよ」

「この前、入学式の写真を見つけたんだ。改めてな……私は人外だと自覚させられたよ。クラスの連中は良くも悪くも年齢を重ねているのに、私だけこのままだ」

「ただ髪と爪が伸びるのはどうということだろうな。あれは成長のう

ちに入らないということか？ まったく煩わしい」

「そういえばサイ、お前、アーティファクトを持っていたよな？ お前のマスターは何をしているんだ？」

「……お前が起きていたら、記憶を覗いたじゃろ、と恨むような目で冗談を言うんだろうな」

「けどな、本当のことを言うとお前の記憶のほとんどが虫食いみたいになっていたんだ。お前がプロテクトを用意していたのか、忘れていたのかは分からないがな」

「ただ、一瞬、人とも悪魔とも付かない者たちが死屍累々と積み上げられた山の頂点に座るお前を見たぞ？ あれは、なんだ？」

「お前が戻ってきたら話したいことが沢山ある。だから、私もどうにかできないか方法を探そう」

三月某日

「サイ、あの魔法理論、なんとかかなりそうだ。今は実践して改良している段階だ。なに、心配するな。お前のようなへまはしないさ」

「そろそろ、二年生も終わりだ。来年が終わればナギが来て私の呪いも解かれる。だがアスナとかいう小娘を利用しなければお前を助けられないのだろう？ まったく、面倒なことだ」

「……最近はお前に教えてやりたいことが少なすぎる。平和だ平和だと喜んでいたが、平和すぎる。私はやはり戦いに生きるべきなのかもな」

「また、話したいことができたら来るとする」

三月某日

「一年ぶり、だな。すねるな。私にもいろいろあったんだ」

「……………」

「ナギが、来ないんだ。約束したのに……ジジイの話では連絡もとれないらしい」

「それでな、来年から、私はまた中学一年生をやる羽目になるらしい。それに、三年間過ごしたあいつらも、私達のこと、忘れ、させられる……らしい」

「せっかく、一般人とも仲良くできるようになったのになあ……いや、分かってるんだ。成長しない私は、いつまでも奴らと親しくしてられない」

「ならば、忘れさせてしまった方がいい……そんなことは分かっているんだ」

「ナギが来なかったとして……来年からは友人を作らないことにしようと思う。また、こんな思いをしたくはないからな」

「……やはり、化け物は化け物、か……」

九月某日

「ナギが……ナギが、死んだらしい」

「私は、私はどうすればいいんだ……！ あいつが死んでしまったらどうやって麻帆良から抜け出せば……」

「そういえば、サイ、お前はこの登校地獄の構成を知っているんだよな……？ 早く、目覚めてくれ……もう、こんなところ、居たくないんだ」

「ひとりで静かに暮らしたいんだ……」

「………すまん。変なことを言った。どうも、お前の前では弱くなってしまいうらしい」

「もう、ここには来ないことにする。次会うときは、アスナとかいう小娘を連れてくるときだ」

「じゃあな」



夢を見ておる。

小さな村を、大勢の悪魔が襲う夢。

生き残っているのはたったの三人。

悪魔はそいつ等を襲おうとして、赤毛の男に還わたしされた。

あれは、ナギ……？



メルディアナ魔法学校。
卒業式。

「卒業証書授与——ネギ・スプリングフィールド君！」
「はい！」

ここに、史上最年少の天才卒業生が誕生した。

「ネギ、なんて書いてあった？ 私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今、浮かび上がるところ……お」

「どう？」

「えーと」

——A TEACHER IN JAPAN——

「日本で、先生をやること………」

「「ええー!?!」」

彼にとって家族のような女性二人の叫び声をもって、物語の開演の合図とする。

メインキャストは三人。

英雄の父を持つ少年魔法使い——ネギ・スプリングフィールド

その英雄に封じられた吸血鬼——エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

そして、吸血鬼の妹にして猫——サイリル

主人公二人十一匹のお言葉

「頑張ります!」

「ふん、私に目を付けるとはなかなかだな。私の活躍をよく見ておくといい」

「……なんか面倒じゃのう。二人がやる気ありそうじゃから私はしばらく寝てるとするか」

プロローグ（後書き）

実は、もうラスボスも決まっています。

七夕にゃ！(前書き)

原作開始1年ちよい前

二時間弱でカカツと書きあげたので短め&急ぎ足

七夕にゃ！

私は絡繰茶々丸。数ヵ月前からマスターの従者をやっています。
今日は別荘の書庫の整理です。

「……？　これは……」

魔法書などがずらりと並んでいるなかで一つだけ趣を異としている本があったので気になって手にとってみます。

タイトルは『織姫と彦星』。七夕関係の本ですね。

パラパラと流し読みをしてみます。

へえ、そうなのですか……星の寿命を人間の寿命に当てはめると二人は約三秒に一回は顔を会わせているバカップルということになるそうです。

「なにか挟まってますね……栞でしょうか。あっ……」

……やってしまいました。

挟まれていた栞らしきものを落としてしまい、その上、本も閉じてしまいました。

マスターの読み途中の本だったら……問題ない気がしてきました。

「……これは」

◇

「まったく、毎度毎度、タカミチのやつ……担任だと？　私に対する当て付けか？　というか君と僕は同級生じゃないかとかどういうつもりだっ！」

「マスター、誰に話し掛けているのでしょうか？」

む……

茶々丸に嗜められてしまった……こいつ、ロボットのくせにずいぶん生意気だ。

まあ、従者が生意気なのは今に始まったことでもないけどな。

「ケケケ、ゴ主人、怒ラレテヤンノ」

こんな具合で。

「チャチャゼロ、黙らないと手足もいで違うもん付けるぞ」

「ナラ、右手ハドリル、左ハパイルバンカーダナ。タノシミダゼ」

「ほお……？」

「オ、オイ、ゴ主人……？ マジナ目付キスルナヨ……アッ……！」

ふん、人形の分際で刃向かうからだ……次は本当もぐぞ？

「姉さん、大丈夫ですか？」

「マアナ。コウミエテ十七分割マデハ経験シタコトモアルンダゼ」

「はあ……それにしてもマスターはいつにもましてご機嫌斜めですね」

「アー、明日は七夕ダカラナ」

「……チャチャゼロ、余計なことを言うなよ？」

七夕は、嫌いだ。

七夕だけじゃない。クリスマスも初詣也大嫌いだ。

どいつもこいつも幸せそうにする。

……織姫も彦星もサンタクロースも神とやらも、私の願いは聞い

ちゃくれない。

聞いていたとしても吸血鬼の願いなんて鼻で笑うんだろうがな。

「マスターが不機嫌な理由はあの閉ざされた部屋と関係あるのでしようか？」

「茶々丸……あの部屋のことは、」

「あの部屋に封印されているのは魔法大戦で活躍した、かの妖猫サイリルではないのですか？」

「貴様っ！ ……くそ、超のやつか」

忌々しい。

毎度のことだが奴はどれほどの知識を持っているのだ。

科学に疎い私でも流石に奴の技術力とはびぬけているといことは分かる。茶々丸の存在が何よりの証明だ。

しかし、あの部屋の中まで知っているのだと？

あれは、十年以上前の出来事だぞ？ 超などまだ赤ん坊だったはずだ。

麻帆良の生徒の名簿でも盗み見たか？

いや、このセキュリティは頑強らしいからそれも無いだろう。
最先端の電子精霊による防御壁とか^{ファイアウォール}かなんとかと言っていたしな。

「まあ、知られているなら構わないか……茶々丸、ついてこい」

「はい、マスター」

茶々丸をあ部屋に入れなかったのもサイリルの存在を隠しておこうと思ったからだ。

いつの間にか麻帆良にも“正義の魔法使い”が跋扈するようになってしまったからな。

サイは……今では正義の英雄扱いだ。人喰いであることなど誰も触れようとはしない。

そして麻帆良に……それも私の別荘にすることを奴等が知ったら担ぎ上げるために是が非でも封印を解こうとするだろう。

あれがサイリルを護るためのものだとも知らずに……

学園にいる魔法先生でサイリルのことを知っているのはジジイにタカミチ、あとは神多羅木くらいか？

少なくともガンドルフィーニに知られるわけにはいかないな……

奴は私を目の敵にしている生粋の“正義の魔法使い”だ。

奴がサイの存在を知ったら何が起きるかは想像がつく。

ああいう人間はジジイも苦手としているから調子にのって暴走しやすいしな……いっそ、今の内に殺しておこうか……？

「……ここだ」

「扉に封印などはしていないのですね」

「私の別荘の中だからな。なによりこの扉は祖とに続いている。封印などしたところで意味がない……開けるぞ」

……何年ぶりだ？

ナギが死んだという報を聞いたときからだから……六年くらいか？少し、緊張するな。

「マスター？」

「急かすな。今開ける」

ギィと、六年前よりも重たくなった扉を押す。

こんなになるくらい閉めっぱなしだったのか……

「あれが……」

「妖猫サイリル……いや、サイリル・マクダウェルだよ」

「は？」

「麻帆良では、あいつは私の妹だ。似てるだろ？」

「……たしかに……マスターの方が0.2ミリ身長が低く、胸囲も4センチほど乏しいですが……」

「うっ、う、うるさい！ この、巻いてやる！」

そんなこと知ってるんだよ！

くそっ、アルといいナギといい……普通、胸囲で見分けるか？

耳としっぽで判断できるだろ……

「あの大剣は……？」

「あれが封印されている原因だよ。拳に魔法を纏わせるように、魔法に魔法を纏わせようとした結果だ」

「魔法に、魔法を……マスターの論理では精霊同士が反発してしまうのでは？」

「ああ、だから封印を解いた瞬間、あの剣は破裂する。サイの魔力量だ、この別荘の半分は消し飛ぶだろうな」

あれを封印までの数分間押さえこんでいたことからだけでもサイが相当だということが分かる。ラカン直伝の気合、と言っていたが……

だから、十五年前、タカミチがつれてきたという魔法を無効化するウエスペルタティアの姫御子がいなければ助けられない。

名前は確か……

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア、だったか？」

「マスター？ 神楽坂さんがどうかしましたか？」

「は？ 神楽坂……ああ、バカレッドか。それがどうした？」

「いえ、今マスターがアスナと言っていたので……1-Aの神楽坂明日菜のことではないのですか？」

……え？

バカレツドってアスナって言うのか？

もしかして奴が……？

いや、ないな。

バカだしアホだし……しかしタカミチが教職に就く前から好意を持っていたよな？　ということはタカミチが昔から一緒にいたという可能性も……

ん？　ああ、そんなわけないか。

それだったら既に高校卒業していてもおかしくない年齢のはずだ。まさか私のように学年を誤魔化しているわけでもないだろう。私是不老だからまだマシだが、他の生徒から見たらおばさんだしな。

神楽坂自体は年相応にバカだからやっぱり別人だろう。

うん、別人別人。

「それでマスター。ここに彼女が封印されていることとマスターが七夕に不機嫌になる理由はどう関係しているのですか？」

「……関係など無い」

「ケケケ、幼女ノクセニ強ガッチマッテ」

「チャチャゼロ、お前いつの間に……！？」

「姉さん、教えて頂けますか？」

「マカセナ」

は？

待て、おい茶々丸。

お前は私の従者だろう？　なんでマスターが教えたがらないことを他の奴から聞き出そうとするんだ？

ロボット三原則とかいうやつはどうした……まさかハカセと超が言っていた既存のロボットとは比べられないほどの人工知能の結果がこれか……？

というかチャチャゼロ、お前も任せろとか言ってるんじゃ、

「マー要スルニダ。ゴ主人ハ毎年ノヨウニ『早くサイリルガ復活シマスヨウニ』ツテアラユル神様ニ願掛ケテルンダヨ」

「わーわーわー!!! チャチャゼロ……盲目の人形剣士とかいうあだ名が欲しいか?」

「目ダトツ!?!」

「待たんかつ!」

ああ!

チャチャゼロのやつ……恥ずかしいだろうが。

……目を抜き取るのは少し可哀想だったから布でぐるぐる巻きにするだけで許してやった。

「つまり、マスターは非科学的な迷信を信じてお願いしたのに叶わなかったから逆恨みしていると……」

「そういう言い方されると私がわがままなガキみたいじゃないか!」
「えっ?」

違ったんですか? と言いたげな反応をする茶々丸。
そうかそうか、

「茶々丸……巻いてやろう。たっぷり魔力を込めて巻いてやるぞ……?」

「ま、マスター。先程巻かれたばかりでは、あ、あー!」

ふん、別に信じていたのに裏切られたから嫌いと言うわけではない。
いい。

サイリルのことを私に思い出させるから、好きではないだけだ。

「思い出してしまったら、またお願いするしかないだろ……?」

「ということどこちらに笹を」

「短冊ト七夕飾リモソロソ完成スルゼ」

「な……」

振り返ってみるとどこから取り出したお前、と言いたくなるサイズ
の笹を持った茶々丸と、やけに高級そうな和紙を切り刻むチャチャ
ゼロの姿があった。

……仕事早すぎだ。

「さ、では一筆」

「まったく……バカ者」

気が利きすぎだろ……まったく。

「ほら、お前らもさっさと書け。一人だけが書いたって楽しくない
だろ」

「了解しました」

「オレノ分ハモウ書イタゼ」

ふん、どうせまた『酒』とでも書くのだろう。チャチャゼロのや
つ、なぜか作り手の私より達筆なのが気になるが……

「では、マスター、これを」

「オレノモ頼ンダ」

「チャチャゼロはともかく茶々丸は自分でかけられるだろう……ま
あいい」

何で私が従者に使われているのやら……

「っておい、お前らこの内容、」

「私は従者ですから」

「一人酒モアキタカラナ」

………ったく。

べ、別にこんなことしたからって待遇がよくなったりはしないんだからな！

「あと、マスター、これを」

「まだあんのか？」

「はい、こちらです」

どれどれ………？

………

………！！

「ちょ、お前、これはなんだ！？」

「書庫の七夕の本に挟まれていたのですが………これも吊るした方がよろしいのではないのでしょうか？」

「仲間外れにしたら怒りそうだからな………貸せ。あと一番上に吊るすから抱き上げろ」

アイツのことだエヴァなんて大嫌いじゃ！ とか何とか言っ泣き真似をするんだろう………

通りで二人して七夕の話を盛り上げようとしていると思ったらこういうことか。

アホ従者コンビめ。

………うん、今度からアホ従者コンビって呼ぶことにしよう。

私の従者のはずなのに私ではとうてい御しきれん。

サイ、早く起きて手伝いに来ないか………過労でぶっ倒れる吸血鬼なんて恥ずかしすぎる。

「では川に流しましょうか」

「ハ、燃ヤスンジャネーノカ？」

「どちらにせよまだだ……今年は燃やすか」

海に流すのが基本的らしいが、な。

今年の短冊

エヴァンジェリン『サイリルが復活しますように』

茶々丸『マスターの願いは従者の願いです』

チャチャゼロ『猫』

サイリル『肉がいっぱい食べたいのう……裏に続く！』

サイリル裏『エヴァが笑っていればいいと思うんじゃない』

天才少年現る。(前書き)

サイリル封印中につきタイトルは普通（

天才少年現る。

「わー、日本は人が多いなあ……半分くらい減っても十分だと思うけど」

もしくは、電車の量を二倍にするとか……も、もちろん邪魔とかそういうことじゃなくて……女性ばかりでどうしていいやら……

僕はいま麻帆良女子中等部に向かう電車の中にいるんだけど……十歳として相応の体格の僕の頭の位置はちょうど回りの女性の方々の……その、胸の高さにあるのでどこを見ていいのか……

下を見たらぶつかってしまうかもしれないし、かといって上を見て目のあった方に笑いかけられて恥ずかしいし……何より一番困るのが……

がたんっ

「うわっー!」

むにゅう

「きゃっ!」

「ご、ごめんなさい!」

……イギリスではほとんど電車に乗る機会もなかったから揺れるのになれてなくて、少し揺れるだけでバランスを崩して……女性の胸に顔を突っ込ませちゃうというか……

い、イギリス紳士として恥ずべきことだというのは分かってるんだけど……

「ふふっ……僕、どこいくの？」

「ここから先は中学高校だよ」

「えっ、あの、その……」

あ、鼻がむずむず……

「つくしゅん！」

ぶわあっ！

「きゃっ!？」

「いやあっ！」

「あ……」

くしゃみで暴走した魔力が風になって皆さんのスカートを……み、見ちゃった。

わ、わざとじゃないんです！

魔法は秘密なので言えませんがごめんなさい！

「あ、着くよー」

誰かの声で電車のスピードが徐々に落ちていることに気付いた。

えっと、駅は……麻帆良学園中央駅。

僕が降りなきゃいけない場所だ。

『学園生徒のみなさん。こちらはせいかつ指導委員です——』

うわわわっ!？

電車の扉が開いた瞬間、周りの人たちに押されていつの間にか外に

……生徒はみんなこの駅で降りるんだねえ。

『始業ベルまで十分を切りました。急ぎましょう』

って、僕も急がないと！

生徒じゃなくて先生だけど……というか先生だから余計に遅刻はダメだよ！

とにかく急がないと！

「――で、占いに書いてあるえ」

ん、占い？

……やっぱり日本人女性も占いが好きなんだね。アーニャも占い師やつてるし……

「ワンッ！」

わあっ！？

……びっくりしたあ。

占いの話をしてた二人のうちの一人が急に大声で犬の鳴き真似するから。

……ん？

あの制服、麻帆良中等部のだよね？

この人混みだと迷いそうだし、ついていこう。

……まずは、仲良くならないといけないから……占いの話でいいよね？

「あのー……失恋の相が出てますよ？」

「えゝ……し、しつ……？ な、なんだとこのガキヤー！！」

「わあ！？ い、いえ、占いの話が出ていたので」

こ、怖いよー……！

「どういことよ！？ テキトー言うと承知しないわよ！？」

「せ、正確に言うと……お先真っ暗です。かなりどぎつい……」

「ちよっとおおー！」

だ、だから、オブラートに包んで失恋の相って言ったのに！

がしっ

痛っ！？

アイアンクロー！？

隣の黒髪の女の人止めようとしてくれるけど……

「アタシは、ガキンチョが大嫌いなよ！ だいたいここは中等部。しかも女子高エリア！ なんで小等部で男のガキがいるのよ！？」

え、だから僕はここで、

「いやー、いいんだよ、アスナ君」

「えっ？」

ん、この声は！

「お久しぶりでーす。ネギ君！」

「タカミチ！ ひさしぶりー！」

「し、知り合い！？ てかタメ口！？」

うん、イギリスで友達になったんだ！

「麻帆良学園へようこそ。いいところでしょ？　ネギ先生」

確かに建物は綺麗だけど……この、アスナさん？　みたいに乱暴な人ばかりだと少し……

「え、先生？」

「あ、はい。そうです」

黒髪の女の方が意外そうに僕を見てくる。うん、非常識だとは思ってるけど試練だから仕方ないよね。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

「ええーっ!？」

まあ、ネカネお姉ちゃんが驚いたくらいだし、やっぱり驚かれるよね。

……なぜか、僕がタカミチの代わりに担任になることの方が驚いてみたいだけ。

「アタシ、こんな子イヤです！　さっきだっていきなり失礼なこと……だいたいアタシはガキが嫌いなものよっ」

むうっ。

なんだかひどい言われよう。

占いだって、心の準備ができるように親切で教えてあげたのに！

……って、あ……は、

「つくしゅん！」

ズバア！

「あ……」

……毛糸のくまさんぱんつ。



ふふふ……

「あーっはっはっ！」

新任教師だかなんだか知らんがよくやった！

これでタカミチが偉そうに私に講釈垂れることもないぞ！

「エヴァちゃん、機嫌いいねえ」

「私、笑ってるところ初めて見たかも」

「笑ってるっていうより……高笑い？」

だいたい私はもう五度目の中学校生活なんだ！

いわば中等教育のプロフェッショナル！ もはやタカミチに教わる
ことなど何もない！

成績だって超とか葉加瀬とか規格外が来なければ全クラストップだ
ったんだ！

あー、まったく……なんで私がこんな真面目に勉強など……だいた
いノートを二冊作るのだって楽じゃないんだからな！

さっさと帰ってこないか！

………まあ、気長に待つとするさ。

不死の、魔法使いだからな……

ナギが死んだ以上、私の呪いを解けるのは術式を知っているサイド
けだろうしな。

「む、きたか」

窓から一瞬姿が見えた。

……んー？

あの腹立つ赤毛頭、どこかで見たぞ？

しかし、あんなガキ……それも魔法使いだなんて。
待てよ？

魔法使いの腹立つ赤毛……？

そんなやつ、一人しか身に覚えが……待て、あのガキの身長を伸ば
して、眼鏡を外して、丸顔を少ししゅっとさせれば……あ。

息子だな！？

タカミチのアホ！

それならそうと先に言っておかんか！

がららっ

「失礼しま……」

って、あの坊や障壁展開したままじゃないか！

あれでは黒板消しが……いや、ナギの息子なんて助ける必要ないな。
せいぜい巧妙に仕掛けられた罠にでもかかれればいい。

……ほんと、今年のクラスの生徒はズレたところで有能だな。
二、三人くらい私の従者にでも……

「今日からこの学校で——」

というかがチガチじゃないか。

本当にあのナギの子供か？

私は会ったことないが……よほどアリカとかいうのは教育熱心だったんだな。

「三学期の間ですけど、よろしくおねがいします」

なにー！？

じゃあ、三年になったらまたタカミチが担任なのか！？

それは困る。

それならまだ神多羅木の方がましと言うものだ！

……ああみえて、やつの授業は恐ろしくバカだからな。
見ていて楽しい。

「「「かわいいいいいー！」」「」」

うん。

ここらへんはナギ譲りか。

魔力も随分とありそうだしな……

待てよ？

こいつの血を吸えば私の呪いも解けるんじゃないか？

……とはいえガキだしなあ。

おーおー、委員長がタゲったぞ。そいつはシヨタコンだからせいぜい気を付けるんだな。

……はあ。

なんだって私がこんな能天気どもと同じクラスに……もっと静かなクラスがいいのに。

……考えてたら腹が立ってきたぞ。

神楽坂アスナ……もっとあの坊やに消しゴムを飛ばせ！
もっと、もっとだ！

……………アホか私は。

がたんっ

「あれ、えっと、エヴァンジェリン……さん？」

「先生、私はサボる。ま、立派な父親に負けないように頑張るよ」

「父さんのことを……って、ま、待ってください！ あ、貴女は僕の生徒なんですからちゃんと、」

「五月蠅い。坊や、私に指図するな。それに、これはいつものことだ」

ふん……何が悲しくて好きな男の息子に勉強を教えて貰わなきゃいけない……

「先生、エヴァちゃんはいつもあだから」

「成績はいいけど、しょっちゅうサボるよね。学校も黙認してるし」

……余計なお世話だ。茶々丸をおいていくだけましだと思え！

とにかく、タカミチだな。

全部、タカミチが悪い。

「タカミチ！」

「え、エヴァ？ 学校で呼び捨ては……というより授業、」

「あんな下らない行事に参加できるか。だいたい私にあのガキのことを教えなかったのはなんで？ 理由によらなくてもお仕置きだ」

「……………えー」

「えー、じゃない！ 子供か！」

「そりゃ、六百歳のエヴァに比べたら、」

「よし殺す。三秒で十回殺してやろうじゃないか」

少し強くなったからって調子に乗りすぎだ。お前はまだ私にも、サイにも届かない。

……とはいえ、面倒を見ろと言われたのは私だからな。

「そうだな……タカミチ、久しぶりに稽古をつけてやろう」

「仕事が……」

「そんなもの、別荘の中でいくらでもできるだろう？」

「……わかったよ」

「じゃ、先に行って体を温めておけ。いつもどおり、私が鬼の隠れ鬼だ」

まあ、まだまだとはいっても、魔法使いの世界では十分な実力を持っているがな。

……なんか、もーめんどくさいし卒業までサボろうかな。

とはいっても、学校の敷地までは来ないといけないわけで……ああ、ままならん。

少なくとも期末。

それまではサボるぞ。

やる気が起きない。

もはや試験くらいしか私の癒しはないからな。

あと猫。

サイを封印してから十五年。

やつらも着々とその勢力を拡大している。

いつの間にか私の別荘に潜り込んで生活していたから茶々丸の後継機に世話をさせてる。

……夏は暑苦しいが冬は温いんだよなあ。

早く寒くならんかな。

「おお、エヴァ、ちょうどよいところであったのう」

む……

「お主に少々頼みたいことが、」

「まずはその口調をやめろ。でなければ貴様の後頭部輪切りにするぞ？」

「ひょ……このしゃべり方は地なのじゃが……」

「なら話しかけるな」

私にとって、その口調はサイのものだ。

今はしゃべれない状態だが……思い出させないでほしい。

「まあ、我慢してくれぬか？ わしも端的に話すでの。エヴァよ。

ネギ君を試してくれぬか？ そして、負けてくれ」

「……っは」

それで、悪い魔法使いを倒したネギ・スプリングフィールドとして正義の魔法使いに担がせるつもりか。

このジジイもつまらなくなったな。

昔はまだ正義の魔法使いを遠ざけようとしていただけだった。

「私へのメリットは？」

「……登校地獄はどうにもならぬが、学園結界の効果を半減させよう」

「……いつから？」

「停電の日からになるじやろうな。その日以外では気付いてしまう魔法先生が増えるじやろ？」

まあ……いいだろう。

わざと負ける、というのは癪だが……いまさら勝ち負けになど拘る気もない。

今はサイを起こすこと以外、興味ないからな。

「ジジイ。生徒どもに夜中出歩くなと言っておけよ？」

「ひょ？」

「今年の停電は満月に被るだろう？ 全盛期の私の復活式のためには血が必要だ。夜中に出歩いた女の血を吸わせてもらおうぞ。いいな？」

「……ま、いいじゃろう」

ふん、やけにあっさり認めるな。

これではどっちが悪の魔法使いかわからないではないか。
だが久しぶりに全力で暴れられるとなると……少し、楽しみなことができたか。

悪い魔法使い・・・だ！（前書き）

悪になりきれないエヴァ様・・・というか悪度5%くらいじゃ（

これだけ読んでくれている方は一カ月ぶりにこんばんわ！

・・・なかなか書く気がなくて・・・ゴメンナサイ

後2話くらいでサイリルは復活かな？

悪い魔法使い・・・・・・・・だ！

「三年！ A組！！」

……まあ、始業式くらいは出てやってもいいだろう。流石に一度もまともに授業に出てやらないのは坊やが可哀想だからな。

……別にナギに顔が似ているから優しくしているわけじゃないかな！ ……誰に言い訳をしているんだ私は。

「「「「ねぎせんせー！！！！」」」」

……いつものことだがこの連中、馬鹿ばっかだろ。

まあ、サイが戻ってきたら喜ぶか……あいつも騒がしいのが大好きだからな。

私だって、このクラスの雰囲気自体は嫌いではない。

ったく、坊やも坊やだ。

一応は担任なんだろう？ ビシッとせんか！

なんかもムカつくから殺気でも当ててやろう。

今まで見てきて平和ボケした甘ちゃんだなんてことは分かりきっている。どうせこの殺気にも、

「あっ！！ エヴァンジェリンさん！ 来てくれたんですね！ やー、嬉しいなあ」

「黙れ坊や。その身をもってチョークの苦さを教えてやろうか？」
「ひいっ！？」

あれは苦いぞー……ではなくて。

まあ、殺気を感じることくらいはできるのか。数日後には戦うんだ。そうでなくては張り合いがない。

まあ、ジジイの出来レースだな。

コンコン

む……？

しずなか……なに！？ 身体測定だ！？ っち、聞いてないぞ

……

「今日と知っていれば鉄棒からぶら下がってから登校したというのに……！」

「マスター。吸血鬼であるマスターは成長しないはずですが」

「黙らんか。巻くぞ？」

「慎んで遠慮いたします」

コラ、このポケロボ、喧嘩売ってるだろ？

なんなら貴様にかけられている反重力魔法を解除してやってもいいんだぞ？

そうしたら体重計では測れない体重になるだろうなあ？

「下らないことを考えながら無駄に悪役顔をするのは構いませんが、そろそろ服を脱いでください。マスターだけですよ？」

「む、そうか……」

よいしょつと。

「……紐……大胆……」

「のああああ！？」

……人の下着いきなりケチをつけるとはいい度胸じゃないか。
覚えておいてやるから顔を見せ……ろ？

「ぬぼー」

「がおー」

「うにーん」

……は？

「ザジ、だったか？ その面妖な生き物はなんだ？ 作り物か？」

「……ともだち」

「………そいつら、猫は食べないよな？」

「食べない……」

ならいい……そんなことになったら！ サイが発狂するからな。

「………と思う」

「そんなものを連れてくるなああ！」

「………猫派？」

「違………くはないがそういう話ではない！」

朝からツツコミを入れさせるなボケ！

………っは、そもそもどうして私はツツコミに回っているんだ？

いや、ボケたいとかそういう話ではなくて、普段はこう、クールに決めているのが私なのに……

「ところでさ……寮で……あの噂……」

む？

あれは……柿崎、と言ったか？

私の思惑がうまくいっているのなら、奴の言う噂というのは……

「なんかねー、満月の夜になると出るんだって、」
「なにになに、なんのはなしー!？」

ふむ、ジジイもうまくやったようだな。先週、発表した桜並木の変質者に加え……

「寮の桜並木に、真っ黒なぼろ着れに包まれた血塗れの吸血鬼が……!」

「きゃー!」

「ひい!」

「ほほう」

おお、怖がる奴もいるのか。

……ここ最近の若いやつらはお化けやら妖怪やらの話を聞くとすぐに冷めた目で否定するからな。

「まきちゃん、その謎の吸血生物にやられちゃったんじゃないかなー。血、美味しそうだし」

おい、吸血生物じゃなくて吸血鬼な？

そこんとこ間違えるとお姉さん悪戯しちゃうぞ？

……しかし、勘がいいな。

佐々木まき絵を襲ったのは私なわけだし、血もなかなか美味だった。

「もー、そんなのデタラメに決まってるでしょ？ アホなこと言っ
てないで早く並びなさいよ」

「そんなこと言ってアスナもちよっと怖いんでしょ」

「違うわよ! あんなの日本にいるわけないでしょ!」

あんなの、というのは黒板に描かれている『謎の吸血生物チュパカブラ』のことだろう。トカゲを直立させ、背中には鋭い棘をもつそいつは長い舌で血を吸い、すごいジャンプ力を誇るらしい。

しかも人間と同程度の大きさ。

神楽坂明日菜の言う通り、確かに日本どころか地球上にすら存在しない生物だが……

「……いや、あれは怖いだろう。普通に考えて」

直立したトカゲというのはリザードマンの亜種であることを示すのだから、それはつまり竜人だ。強力な耐魔力を持っていると予想できる。頭の大きさを見るとなかなか知能も発達していそうだ。つまりチームワークもよく、大勢で囲むことはおろか、罠まで使ってくるかもしれない。

うぬう、チュパカブラ侮りがたし。

「いや、でも魔法使い^{ネギ}がいるんだから吸血鬼がいても……」

……む？

今のは神楽坂明日菜か？

坊やの正体を、魔法を知っているのか……？

どうやらツキは私に回ってきているようだな！

「ふふ……ふははは……はーっはっは！」

「え、エヴァちゃん？」

「うるさいバカレッド！ 人のことを妙な呼び方するな！」

「なっ！ だったらバカレッドも、」

「……ふん、まあいい。噂の吸血鬼はお前のような活きのいい女の血が好物らしい。気を付けるんだな」

せいぜい坊やを頼るといい。

そうして神楽坂明日葉がこちら側の世界に踏み込んできたとき、サイは復活する。

待っててくれ。

もう少しだから……茶々丸、早く測定しろ。

「身長130バスト67ウエスト48ヒップ63ですね」

気のせいかな？

やけに聞き覚えのあることを言われた気がするんだが。

「……単位は？」

「センチメートルです。マスターの体は去年から全く変わっていません」

「……くそう」

これだから身体測定は嫌いなんだ。幻術を使えば私だって相当スタイルのいい美女になるんだからな！

まったく……クラスの奴らと来たら胸にばかり栄養を蓄えて……しかもムカつくことに巨乳の癖に頭までいいんだ。那波の奴なんて確実にあと、

「どうかいたしましたか、エヴァンジェリンさん？」

「いいいい、いや！？ なんでもないぞ！？」

そうだった……年上系の言葉は那波に当て嵌めることすら厳禁だったな。私ですら怯えるほどの波動を出してくる……こいつも裏の世界に関わってるんじゃないか？

というか、だ。

このクラスの奴ら、いくらなんでもなれなれしい。私は一匹狼な

んだぞ？ 気安く話しかけるんじゃない。

「先生ーっ、大変やーっ！ まき絵が…まき絵が——」

ふむ、ようやく発見されたようだな。意外と時間がかかったじゃないか…：…というか、私が血を吸ったのは昨日の夜なのだが誰も気付かなかったのか？

「「「何！？ まき絵がどーしたの！？」「」「」」

風邪とかひいていなければいいが…：…って違う！ 悪の魔法使いの私が人の心配なんてするわけないだろう！

万が一、風邪をひいていたとして…：…あとで万病に効く偽・イクエリクシル神盃の霊薬でも差し入れてやるか。痛い出費だ…：…偽物とはいえ効果は確かだから結構するんだぞ？

「と、とりあえず身体測定を終わらせてくださーい！」

「坊や、私は終わらせたから一足先にいくぞ？」

騒ぐクラスメイトに坊やが叫ぶ。

どうでもいいがクラスのばかどもは下着姿だ。まあ、まだガキだから気にしないのかもしれないがな。

「えっ！？」

「どうした？ 私がクラスメイトの心配をするのはおかしいか？」

ま、おかしいが。

しかし体調を崩した可能性がある上、そうなった場合、責任の一端は私にある…：…いや、私は悪の魔法使いだから良心が痛むとか言うことは全く無いからな？

本当だぞ？

……そう！ 奴はあとで坊やへのメッセンジャーになってもらわなければならないから風邪なんかひかれていては困るだけだ！
ま、バカは風邪を引かないと言うし……心配はないだろ。



「げほっ！ ごほっ！」

うーわー……私のせいかな？ 私のせいだなあ。

ベッドに寝かされてはいるものの……熱のせいか額には玉の汗が浮いている……弱ったなあ。

しかし、保健室の扉の隙間から覗くだけではいまいち分かりづらいな。

どうしたものか……

「……はあ、はあ……」

うわー、こいつの弱々しい姿なんて初めてだ……丈夫そうだから血をもらったのだが、そこに風邪をひいたせいで抵抗力が弱まっているんだな。

しかし、流石に一匹狼の私が心配して見舞いにやってくるなんて不自然だし……どうやって保健室に入るかな……

うーむ……

「エヴァ？ なにをしているんだい？」

「うるさい黙れタカミチ風情が私に話しかけるんじゃない。私の考え事の邪魔をするならこれから満月の夜にはそうだ私に協力しろ！」

「は？ ……まあ、拒否権は、なさそうだね」

「よし。中に入って佐々木まき絵の容態を確認してこい。起きてた

ら意識を朦朧とさせろ」

「いやいやいや!? 魔法使えないのにどうやって!?!」

「カスだな……じゃあいい。私がやるから背中に隠れさせろ」

全く使えない奴だ。

ええい! 早くドアを開けんか!

珍たらししているタカミチの背中を蹴飛ばす。

「わっ!」

よし、侵入成功……佐々木まき絵の容態は……

「……あれ……タカミチせんせー………久しぶり」

意識はしっかりしてるな。

よし、えーと……

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 大気よ 水よ この者に
いい感じの安息を……眠りの霧」

「エヴァ……君もだんだんサイリルさんに似てきたね……」

……いや、超・倒れろ、よりかはまだましなはずだ。自分でもど
うかと思うが。

まあ、とにかくこれで平気だろう。

「タカミチ、出てけ」

「はいはい……なんだかんだで君は優しいな」

「死ね!」

「ふごお!?!」

ムカついたから魔法の矢を一発当ててやった。
だから、優しさからじゃないと言ってるだろう！

「ふぁ……？ あれえ？ エヴァちゃんだぁ……？」

「よし、佐々木まき絵……これは夢だからな。夢だぞ？ 夢だと思え。いいな？」

「そりゃあ、そうだよ。エヴァちゃんと話したことなんてないもん……」

よし、さすがバカだ。魔力なんて使わなくてもしつかり誤魔化する。

とにかく偽・^{フエイクエリクシル}神盃の霊薬をと……

「これを飲め。そうすれば楽になるさ」

「……？ 安楽死？」

「あほかっ！」

むしろ本物なら不老長寿になってしまうようなものだぞ！？

……私が作ろうとしたのも、私の近くにいてくれる者を増やすためだったな……いや、今は関係無いか。

「風邪も熱も治るから飲むといい」

「……ばかはあ？」

「諦めろ」

「へへ……にがーい……」

まあ、ゴーヤとかインスタントコーヒーの粉とかが主成分だからな。甘いものなんてリングくらいしか入っていないはずだ。

……ああ、現代科学をもってして作り出せない万能薬は結構身近な品からできているんだ。それでも一本辺りの単価が四桁がな。

だいたいゴーヤが手に入らなくてなあ……

「飲んだな？　じゃあ眠れ」

「ふあい……………くー……………」

「早いな……………サイ並みかもしれん」

さて、他のクラスメイトが来る前に逃げ出すかな……………何度も言うが私は悪の魔法使いだ。いい人じゃない。そのところ勘違いするなよ？

とりあえず私も一本……………ん？

「おいおい……………まさか、今のがラストの一本か？　まあ、仕方ないか」

今月くらいは耐えられるだろう。それに学園結界が緩まれば必要もなくなるはずだ。

とりあえず今日はこれくらいでいいだろう。ちょっと園芸部に行つてゴーヤないか見てこよう。

あつたら……………盗むのはなあ……………園芸部の奴らだって実が成るのを楽しみにしているのだろうし、どうにかして分けてもらうしかないな。

「金に余裕はないし……………人形でも作って交換してもらうか？　いや、しかし最近の女子はあまり人形に興味を持たないらしいし……………」

私が八歳だとかそこの時は人形やぬいぐるみに囲まれて生活するなんてのが夢だったんだけどな。

まあ、私の場合は城で生活していたから友人がいなかったというのも一因かもしれないが。

……む？

いつの間にか桜並木まで来ていたのか。

「まあ、ちょうどいい……ベンチでノートでもまとめるか。サイはあれで物覚え悪いからな」

まあ、普通の日本人が苦勞する英語と国語を勉強すら必要がないと言うのは羨ましいがな。

人を食えば覚えるというのもなかなか楽でいいな……まあ、魔力を集めると言う目的が主で知識を吸収することはほとんどなかったようだがな。

「まずは数学からだな……」

もうしばらく経てば桜通りが危険になる夜だし、のんびりと解説を書き上げるか。

えっと、今回は二次方程式まで終わらせたから……そろそろ平面図形の相似と合同の証明にはいつてもいいか。

「三角形の合同の条件は二つの角とその間の辺の長さが……」

……む？ 三角形の場合は二つの図形の底辺の長さや面積、それに一つの角の大きさが同じなら合同になるな……教科書にはないが書いておいてやろう。

あ、そうだ、少し道が逸れるが三角形繋がりである公式のこともまとめておいてやろう。

「 $A \times B = B \times A$ $C \times D = D \times C$ である。この定理の名前を……定理の名前を……」

度忘れーっ……!?

くそっ、大したことではないが悔しいぞ!

ピラミッド……はエジプトだろ……ピーコック……は孔雀だし……

「ピタ……パンは美味しいが違う! えーと……」

「ピタゴラスの定理ですかー……?」

「それだ!」

む?

誰だ?

「あ、私、ごめんなさい!」

お、おお?

逃げてしまった……ん、しかし見覚えがある。

いや、それ以前にこんな時間か……私としたことが、とっくに暗くなっているじゃないか!

とりあえず、血を吸うついでにさっきの有りがたい女性との顔でも見ておこう。

確か、こっちに走ったと言うことは女子寮か。急ごう。

まずは着替えて……

「茶々丸、いるな!」?

「はい、マスター」

「鞆と制服を持って帰ってくれ。制服はちゃんとハンガーに吊るすんだぞ! シワになると恥ずかしいからな」

「了解しました」

じゃ、行くか。

コウモリマントを翻して桜の木に飛び乗る。

これなら数分もかからずに追い付けるだろう。

……しかし、神楽坂明日菜が魔法の存在を知っているとはな。ナギたちの努力も半分は無駄に終わったと言うわけだ。しかも、魔法から距離を置かせるという願いを無視したのは麻帆良に来たタカミチで、魔法を決定的に知らしめたのがナギの息子とはな……皮肉じやないか。

……………よし。

「見つけた」

ペロリと乾いた唇をなめ、街灯の上へと降り立つ。

「え？ ……ひっ！」

「27番、宮崎のどかか……」

さっきのこと、感謝する。

ただまあ……

「悪いけど少しだけその血を分けてもらおうよ」

なに、百匹の蚊に刺された程度だと思っておけばいい。痛くもないから不安がるな。

そーれつと……

「キャアアアアアッ！」

そ、そんなに怯えられると……いや、私は悪い魔法使いだからな。どンドン怖がるといい。

べ、別にショックを受けたりなんか……

「待てーっ！」

「む、もう気付いたか……」

うち……満月にはまだほど遠いというのに。それに魔法薬もそこまで準備していないぞ……

「魔法の射手 戒めの風矢！」

「氷楯……」

痛っ……おいこら坊や、捕縛用の魔法でどうして私の指が切れるんだ。

ったく……ナギとは似ても似つかないとは思っていたが魔力に関してはそのままデタラメなやつだな……

まあ、それでも魔法薬を触媒にした氷楯で防げる程度なら驚くこともないな。

……って、ああ！？ 私の帽子が！？

「き、君はうちのクラスの……エ、エヴァンジェリンさん！？」

ば、バレちゃった……

「ふ、ふふ……新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶というか、坊や」

いや……

「ネギ・スプリングフィールド……十歳にしてこの力……さすがに奴の息子だけはある」

「な、何者なんですかあなたは！ 同じ魔法使いなのにどうしてこんなことを……！？」

青いな……それに、この坊やも正義の魔法使いかぶれか。ナギの息子のくせに……嘆かわしい。

「よく聞け。この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ……氷結 武装解除！」

あ、手が滑った。

やっぱりかっこつけた投げ方なんてするものじゃないな。

「うあっ！」

宮崎のどかの方に投げてしまった……素っ裸にしてしまったが……もう薬もないんだから風邪はひいてくれるなよ？

そして坊やの方は片腕の袖部分だけ……

「レジストしたか……やはりな」

正直、こんな坊やの素っ裸なんて興味ないからちようどいい。

「この隙に逃げてしまおう……」

まったく、予定が狂ってしまったよ。まあ、魔法薬二つで撃退できたの幸運だったな。そう思えば自分のコントロールミスも結果オーライだ。

あとは悠々と我が家に……

「いた！」

「!?」

ちょ、坊や!?

まさか素っ裸のまま放置してきたのか!? ……まさかナギ以上に気の効かない人間がいるとは思わなかったぞ……!

ああ、くそ!

ピタゴラスの恩もあるし確認するだけしておこう……とりあえず桜通りの上を飛んでいこう。

というか……

「速いな……風が得意なのか」

ただ、杖を使わないと飛べないのは減点だぞ?

「待ちなさーい! エヴァンジェリンさん、どーしてこんなことするんですかー!? 先生としても許しませんよ!」

「奴の話を聞きたいだろ? 私を捕まえたら教えてやるよ」

「というか教師が全裸の女子生徒を道に放り出すな! というか教師じゃなくても放り出すな! 貴様、それでも人間か!？」

「……本当ですね?」

ふんっ……乗ってきたか。

結局最後は自分のため……ナギとは正反対だしサイほど自分勝手にもなれないか。いや、私と同じような存在なんだな。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風精召喚!! 剣を執る戦友!! 捕まえて!」

分身……いや、精霊召喚か。

風の中位精霊による複製……しかし八体同時召喚か! なるほど、

十歳の見習いとは思えん魔力だ……

「ちっ、魔法薬じゃ厳しいか」

二体取り逃した……と、そろそろ桜通り上空だな……
む？

あれは、神楽坂明日菜？ ……なるほど、放置せずに預けたのか。
よかった……それなら風邪も引かずにすむだろう……いや、違う
ぞ？ 私がしているのは薬の心配だからな？

ガッ！！

「くうっ！！」

油断した……！

「追いつめた！ これで終わりです！ 風花 武装解除！」

っち！

レジストに失敗したか……くそ、こんな坊やに脱がされるとはな
……下着は無事でよかった……校舎の屋上ならさすがに誰かに見ら
れることもないだろう。見られないよな？

「こ、これで僕の勝ちですね。約束通り教えてもらいますよ。何で
こんなことしたのか。それに……父さんのことも」

「お前の親父……サウザンドマスターのことか」

というか寒いっ！

四月に下着だけってのはなかなか辛いな……まったく。
だ、だいたい私にだって羞恥心つてもものがだな……！

「と、とにかく！ マントも触媒もないあなたに勝ち目はないですよ！ 素直に……」

「あん？」

私に、勝ち目がない……だと？

「ひいっ！」

「これで勝ったつもりなのか？」

ズシャァっと屋根のコンクリートを巻き上げながら茶々丸が私の隣に降り立つ。

おい、やっぱり重すぎるだろ。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

「なっ、新手！？ ラス・テル・マ・スキル……」

「茶々丸、いけ」

びしっ

おいおい……デコピンで済ませちゃうのかよ。

仮にもお前のマスターが脱がされたんだぞ？

というか坊やも坊やでようやく茶々丸に気付いたか。動体視力と冷静な判断力に難ありだな。これで私に操られたクラスメイトだったりしたら生徒が死んでるぞ？

「紹介しよう。私のパートナー、絡繰茶々丸だ。パートナーのいないお前に勝ち目はないぞ？」

え、こら？ なにが勝ち目はないですよ、きりっ！ だ。お前程

度の小僧、魔法なんて使わなくても勝てるわ。

「な、パートナーなんていなくたって……ラス、」

むにーん

茶々丸……デコピンの次はほっぺ伸ばしか？ ……仮にも敵なんだから蹴り飛ばしてもしてやればいいものを……

「もともと魔法使いの従者とは戦いのための道具だ。詠唱中の無防備な魔法使いを守るためのな……つまり、パートナーのいないお前では我々には勝てない」

「そ、そんな……」

え、ええい！ 泣くんじゃない！ 男だろうが！
まったく……まあいい。結構な魔力を持っているみたいだし、本番の時の足しにしよう。

「茶々丸」

「……申し訳ありませんネギ先生」

「うぐっ！？」

呆然としている坊やに茶々丸が肉薄、左腕で首を締め上げる。

「まったく……こんなガキから魔力をもらわないといけないとは屈辱ここに極まれりだな……」

「ひ、ひい！？」

「悪いな。まあ、死ぬまでは吸わんから安心しろ」

「うわあーん！ 誰か助けてーっ！」

な、泣くんじゃない！

……だいたい一応私だってなかなかの美少女で下着姿なんだぞ？
血を吸うと言っても痛みはないのだから首筋に接吻されるような
ものだ。

それなのにここまで怯えられるとたしよりは傷つく……少しは照
れろ！

カプリ

んくっ……うむ、魔力たっぷりだな。

これなら今日使った分の魔力を補って余りあるぞ……

「こらーっ！ この変質者ども！」

「ん？」

バコン！

蹴り！？

って、のわあああ！？

止まらな、落ち、落ちるううあ！？

………せ、セーフ。

だ、誰だまったく………というか私を蹴るなんて……

「か、神楽坂明日菜！！」

「あ、あれ？ エヴァちゃん………？」

「その名前で呼ぶなーっ！」

……ふむ。しかしこれは僥倖だな。まさか神楽坂明日菜がここま
で坊やと……魔法使いと深く関わっていたなんて。

「ふん、坊やにもパートナーがいるようじゃないか……え？　ここ
で軽く仮契約でもしたらどうだ？」

「そ、そんなっ！　アスナさんは！」

「ま……まさかあんた達が今回の犯人なの！？　それも二人がかり
で子供をいじめるような真似をして！　どんな理由にしても最低よ
！」

なっ……！

わ、私はサイを復活させるために……だいたい今回のこともジジ
イに頼まれたことだし、ひいては坊やのためなのに……

私はサイをたすけたいだけなのに……む、いかん……痛いし情けな
いしで涙が……

「う、うう……ふぐう……よくも、私の顔を足蹴に。だいたい私だ
って好きでやってるんじゃないのに……お、覚えておけよう！　ぐ
すっ」

お前らなんて、早く仮契約でもして結婚してしまえばいいんだ！

「……ばーか！」

……ほっぺた、イタイ……

悪い魔法使い・・・だ！（後書き）

サイリルの従者・・・誰にしようか悩んでいます。

龍宮さん！　な感じだけど絶対に無理だしなあ・・・（

一応何人か候補はありますが。。希望あればお願いします。

始動

「いったい……何がどうしてこうなった!? カモ君! 説明してよ!」

「お、おおお俺っちに聞かれてもなにがなんだかー!?」

ま、まずは冷静になろう。

落ち着くための呪文、落ち着くための呪文……えーと……

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 来たれ雷精 風の精 雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐! 雷の暴風!」

「つて兄貴ー!? いきなりなにでつかいのぶっぱなしてるんですか!?!」

「へ? ……………あばばば!?! 僕はいったい何を!?!」

「と、とにかくここは敵の領域! あまり目立つことをするのは危険っス!」

敵……そうだ。

僕が桜並木でエヴァンジェリンさんと戦ってから色々あったんだ。まずはカモ君が僕のところに駆けつけてくれた。魔法戦に関してならカモ君の方が詳しいから少し勇気付けられたんだ。

それで色々あってアスナさんにおでこにキスされちゃった……じゃなくてアスナさんと仮の仮契約をして茶々丸とエヴァンジェリンさんを個別撃破しようと思ったんだけど……やっぱり茶々丸さんも生徒だから攻撃できなかった。

それで色々怖くなって杖に乗って寮から飛び出したら背の高い木にぶつかって墜落……そして遭難。そこを長瀬さんに助けてもらって一緒に忍者修行をして……エヴァンジェリンさんと堂々戦うこと

を決意した。

それで今日は風邪で休んでるエヴァンジェリンさんのお見舞いのついでに果たし状を渡しに来ただけけど……気絶しちゃったから看病して……エヴァンジェリンさんは下着だけ大人っぽかった。なんであんなところにジッパーがついてるんだろう？

それで、ちょっとだけお父さんの手がかりがなくかと思って地下室に入ってしまったらいきなり転移させられちゃったみたいで……気がついたら南国のリゾート地みたいなのところにいた。

「ここ、なんだろうね？」

「さあ……ただ、ここは麻帆良よりも魔力が満ちているような気がするっス」

「うん……それと、なんだかすごい大きな気配がするよね」

気配の出所は屋敷の中かな……？

桜並木で戦ったときのエヴァンジェリンさんよりも強い気配……少し、村が襲われたときを思い出す……それに、なんだか呼ばれているような気もする。

あれ？

鍵が開いてる……来いってこと？

「カモ君、行ってみよう！」

「あ、兄貴！ 危険スよ！」

「……こっちだ！」

建物の中もやっぱり広くて少し迷うかもしれないと思ったんだけど、幸運にも気配がする方向には道が一本しかなかった。

何がいるのかはよく分からない……でも行ってみたい……こんな気配を放てるほど強いナニカにあってみたい。

もし、僕にこれだけの力があれば……

「ここ……だね」

結局、道は一度も別れないでな行き止まりに大きな扉があるだけだった。

重厚な作りの扉を隔てた向こうに、この力の持ち主がいるんだね……怖いけど、確認したい……！

そして、どうやってここまで強くなったのかを、

「止まれよ、小僧……？」

ゾクツと嫌な気配が背筋に走った。

今のはテレパシー？

声はまさしくエヴァンジェリンさんのものだった。

どうということ？

さっきまでは風邪であんなに苦しそうだったのに、今のエヴァンジェリンさんからはとても強いナニカの気配を感じる。桜並木の時よりも強い気配……

「あ、兄貴！ 戻りましょう！」

「いや、引き返してもエヴァンジェリンさんと鉢合わせになるだけだよ。それなら……戦おう。よく分からないけど体調もよくなったみたいだし」

「やばいっすよ！ 明らかに殺す気でこっちに向かってますって……！」

大丈夫。

桜並木の時だって戦えたんだ。体調を崩しているエヴァンジェリンさんになら勝てる……！

「とにかくここは場所が悪いっす。部屋の中に！」
「うん！」

振り替えて扉のドアノブを掴んだ瞬間、背広の裾をグイと引かれた。

いや、ありえない。

だって、さっきまでは視界に映ってすらいなかったのに！

恐る恐る振り替えると……

「影……から？」

明かりに照らされてできた僕の影からエヴァンジェリンさんがゆつくりと這い出てきた……こんな魔法、初めて見た……

と、とにかく振り払って部屋の中に！

「そんなに入りたいなら……入れてやろう！」

「ぐうっ！？」

背中からの衝撃。

殴……られた？

トラックに撥ねられたかと錯覚してしまいそうになるほどの力に吹き飛ばされた僕の体が扉を突き破った部屋の中に……

なんだか、寒い？

今まではどこも過ぎしやすい温度だったのに、どうしてここだけこんなに、

「っ！？ エヴァンジェリンさん、これは！？」

「見ての通りだと思うが？」

僕の目に映ったのは巨大な氷棺……それも、ただの氷じゃなくて

魔力で編まれていて……そして、女の子が封印されている。

外見は……髪の毛が黒くて猫みたいな耳と尻尾がついている以外はエヴァンジェリンさんによく似てる。

でも、そんなものよりも遥かに目立っているのは氷漬けにされてもなお煌めく深紅の大剣。持ち手との縮尺が明らかにおかしいそれは人どころか巨象を一頭両断してもまだ刃が余るくらい大きい。

それに、氷漬けだから分からないけど、あの剣からは精霊の気配を感じる。それかなり多くの……

「この子も魔法使いなんですか？ どうしてこんなところに封印されているんですか？」

「小僧……いや、ぼうやには関係無い。私の問題だ」

あれ……？

エヴァンジェリンさんの刺すような気配が緩んだ……？

「……出よう。ここでは戦いたくない」

「僕はこの子を助けます！」

何者かは分からないけど、この子を放っていくことなんてできない！

この氷がどんな術式なのかも分からないけど……それでもいつか必ず、

「ふん……ぼうやには助けられないよ。諦めるんだな」

「なっ……！ そんなことないです！
僕が立派な魔法使いになれ
ばきつと……！」

「無理だね。歴代最強の魔女が編んだ氷だ……それを解けるほどの魔法使いは世界でも数えるほどしかない」

「でも……」

「……一部屋用意してやる。ここでは二十四時間経たないと外に出れないからな。とにかくここから出ていけ」

「……」

「出ていけ！」

「あ、兄貴い！」

……仕方ないか。

確かに吸血鬼の真祖であるエヴァンジェリンさんがどうにもできないなら今の僕がどうできるわけがないし……

でも、あの女の子がどうして封印されてるのか。それにエヴァンジェリンさんはどう関わってるのかは知らないといけない。

エヴァンジェリンさんが悪い魔法使いなら女の子は被害者……どうにかして助けないと……

「ふん、まだ気になるのか？」

「それは、もちろんです！ もしエヴァンジェリンさんが悪いことをしているのなら、」

「なら力を示せ。明日午後八時の一斉停電……その時なら出歩く生徒もいない。存分に戦おうじゃないか」

「………分かりました。僕が勝ったら父さんのことと封印されている女の子のことを話してもらいます」

「図々しいぼうやだ……まあ、いいだろう。ただし、パートナーを連れてこないと私には勝てないぞ？」

……う。

いざとなったらアスナさんに相談してもう一回だけ助けてもらおう。それで解決できれば吸血鬼事件も終わって平和になるんだし、アスナさんならきつと分かってくれるよね？



「ふん……威勢だけはよかったな」

……変なところで強気なのは父親譲りか？^{ナギ}

なにとはともあれ、これでサイリルを助けられるかもしれない。

……神楽坂明日菜。やつは十中八九ウェスペルタティア王家所縁……つまり魔法を無効化する能力を持っているはずだ。

うまくぼうやと神楽坂明日菜を仮契約させればその特性を十分に引き出すアーティファクトが出てくるはず。つまり、魔法を無効化するアーティファクトだ。

その力でサイリルの剣を魔力に戻せれば……サイリルを助け出せる。

「サイリル。もう少しだからな？」

明日……いや、この中で余計に一日過ごすことを考えると明後日か。そこでぼうやと戦い神楽坂明日菜を確保。奴はお人好しだから事情を話せば協力も望めるだろう。

……この件が済めば学園結界の効力も弱まるし、サイリルの封印を維持するための魔力消費もなくなる。十歳の少女の体力とはおさらばだ。

「ケケケ、サイリルノ奴モヤツト起キルノカ」

「チャチャゼロ……いやにご機嫌じゃないか」

「マタアノ化猫トヤリアエルカト思ウトナ。ソウイウ御主人ハ心配ソウナ顔ダナ？」

「……なにか、嫌な予感がするんだ」

これまでのシミュレーションに明らかな問題点はなかった。ジジイがなにか画策している可能性もあるがサイリルを助けるのに影響

は出ない。

他の魔法先生の介入か？

あるとすればガンドルフイーニだろうが……ふん、学園結界さえなければあの程度……

「……サイリルを復活させられるか不安になっているだけだろうな」

「アーア、御主人モ丸クナツチマツテ」

「そう悪くもないものだぞ？」

今の私は、久しぶりに充実している気がする。

茶々丸はうまくやっているかな……いや、超と葉加瀬にも話を通したんだ。失敗するわけがない。

超は既に私の目的……つまりサイリルのことを知っている……ならば協力を頼むことで不利益も生じない。慎重になりすぎて困ることもあるまい。



ん……む……？

寒く、動けぬ……？

ここは……エヴァの別荘じゃな。

………ああ、そうじゃ。魔法の融合に失敗して封印されたんだ。エヴァも助けてくれようとはしておるようじゃが……さすがにずっと待っているのも飽きてきたのう。

そろそろ内側こうちからも抜け出す努力をしてよい頃なんじゃなかろうか？

現状は紅蓮蜂と燃え盛る炎の神剣の融合に失敗して、二つを構成する精霊が反発しあっている……というところじゃの。

つまりこやつらを説得すればいいのじゃろうが……私は精霊とは話せぬからのう。というか私が封印されてからざっと三百年経って

おるのじゃが……同じ精霊同士なのじゃし、そろそろ仲直りをして
もよいのじゃないかのう？

しかし暇じゃ。最初の頃はエヴァも来てくれたのじゃが最近御
無沙汰だし、懐かしい魔力の気配に目を覚ましてみてもやはり誰も
おらぬ。

ナギが来たのかと思ったのじゃが……そもそもエヴァは今なにを
しておるのじゃろう？

この別荘で三百年あまりということは外での十年とか十五年とい
うとこのはずじゃから……麻帆良を卒業して人形師にもなっておる
のじゃろうか？

これ、精霊たち、いくらなんでも騒がしいぞ……ギャーギャー騒
ぐでない。喰らうぞ？

まったく……まだかかりそうじゃし、もう少し眠るとしようかの。
………む？ なにか引つ掛かるが……まあ、そのうち思い出す
じゃろう。



「魔法史上でも初めての存在である魔法を使う猫サイリル……カ。
いやはや……この時代の人間は知らぬだろうが、」

「超さん、どうかしましたか？」

「いや、なんでもないネ……まあ、顔見知りの義理として助けてや
るとするネ」

激突（前書き）

気を使いすぎな悪い魔法使い（笑）

激突

「きりーっ。れーっ！」

「あ、どーも。英語の授業を始めまーす」

うーん……昨日は危なかったなあ。僕はなんであんなに食い下がったんだろう……

エヴァンジェリンさんも何か事情があつてのことなんだろうし、あの女の子を見る目も優しかったような……

「うん！ やっぱり先生として手助けしなきゃね！」

「……なにをだ？」

「うひゃあ！？ え、エヴァンジェリンさんー！？」

な、なんですか！？

結局、渡した果たし状のことですか！？

あれは今日の夜八時ですよね！？ 今はダメですよ！

「余計なことは考えるなよ……？ 明日の朝日を見たいならね」

「うひい！」

……本当に、昨日はなんで勝てるだなんて思ったんだろう……原因はわからないけど力が封じられているとはいえ吸血鬼の、しかも真祖なんだし……悪い子に言い聞かせる話の中でしか聞いたことないよ……

あ……もしかして、あれのモデルってエヴァンジェリンさんなのかな？

「ジロジロ見るな」

「あつ、はい！ ごめんなさい！」

「……まあ、風邪に関しては世話になったからな。授業くらいは受けてやろうと思ったただけだ」

え……あ、そーなんですか！？

いやあ、嬉しいなあ！

これを期にエヴァンジェリンさんにも学校の楽しさを知ってもらわないと！

あれかな？

昨日ので少しは打ち解けられたのかな？

なんだかんだで別荘でも夕食をご馳走してくれたし……うん、やつぱりエヴァンジェリンさんも悪い魔法使いなんかじゃないのかも！
これなら吸血鬼事件のことも話し合いで解決できるかもしれない！

「よーし、僕が読んじやおかな！ A p r o f i t o n p a
p e r えーと、この意味を……長谷川さん！」

「……とらぬ狸の皮算用、です」

「正解です！ 直訳すると帳簿上の利益となるのでとらぬ狸の皮算用と似た意味になりますね！」

……あ。

これは僕にも言えることだね。あんまりエヴァンジェリンさんを好意的に見すぎないようにしないと。いい人みたいだったけど女生徒を襲ったのも事実みたいだし……

でも、やつぱりまずは話し合いからだよね。



——午後七時四十分——

さて……学園結界の方も順調に処理できているな。茶々丸の話ではジジイが学園結界の効力を弱めるタイミングと方法を知るためにウィルスを仕掛け、クラッキングをやりやすくするとかなんとか言っていたが……科学用語はよく分からないな。

まあ、ここらへんは茶々丸や葉加瀬に任せるとして、だ。

「超、頼んだことは可能か？」

「学園の防犯カメラの管制システムを遠隔操作するっていうあれネ？ もちろん可能ヨ」

「借りとは思わんぞ」

「勝手に取り立てるから気にしないでいいネ」

……ふん、相変わらず強かなやつだ。しかし超がいなければ今回の件もなかなか面倒だったからな。

ぼうやに負けたことにしつつサイリルを助け、ジジイに結界を弱めさせるにはこの方法しかない。

嫌な予感はいまだに続いているが超のシュミレーションでも問題は無さそうだった。杞憂というやつだろう。

「おや、ネギ坊主ヨ」

「ん？ どこだ？」

「橋の中腹ネ」

……ふむ。^{トラップ}罠……いや、捕縛結界か？

ちようどいい、これを使わせてもらおうでしょう。

「超、この橋から私の家までの防犯カメラを頼んだぞ。それ以外はノータッチで構わん」

「了解したネ」

「茶々丸、そっちはどうだ？」

「こちらもそろそろ……完了しました」

「これで学園長がこのプログラムをいじったときに全部の情報が私と超さん、それに茶々丸の元に流れますよ」

ジジイに対しての切り札ジョーカーも出来た、と。

「さて……あとはぼうやが神楽坂明日菜を連れてくるかどうかだけだな……」

「そのことですがマスター、ネギ先生は既に神楽坂明日菜と仮契約を交わしているようです」

「何っ!? なぜ報告しなかった!? ……いや、いい。これで盤上は整った。あとは哀れなぼうやボーンが現れるのを待つだけだ」

ナギ……悪いが貴様の息子、使わせてもらうぞ。

「しかし闇の福音ダーク・エヴァンジェルともあろうものが慎重すぎるネ。なにか心配事デモ?」

「ふ、バカを言え……と言いたいが、そうだな。今回は失敗は絶対に許されない。それにジジイの言いなりになるのも癪だ。嫌な予感もすることだしな」

「科学的には計画が頓挫するほどのリスクは否定されたネ。安心していいと思うが……まあ、計画のあとのことは分からないがネ」

もったいぶった言い方をする……計画のあとのことなどどうでもいい。サイリルが戻ってくれば退屈だった学園生活も少しは楽しくなるだろう。

それにサイリルは登校地獄の解除方法をナギから聞いているはずだから……いずれ自由の身になることも可能だ。

この計画の先には、無限の可能性がある。

『こちらは方法部です。これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるように――』

プツン

……始まったな。

「封印結界への電力供給の停止――確認。予備電力システムへのハッキング開始――成功しました。経過順調……これでマスターの魔力は戻ります」

「カメラの管制システムも手中におさめたネ。タイミングはこちらに任せてもらって構わないカ？」

「ああ、ただしミスは許さんぞ？」

「任せるネ。それにこれくらいのことにも手間取るんじゃ私の目的も達成できないヨ」

「目的？」

「……学園祭までの楽しみネ」

……まあいい。今は目の前のことに集中しよう。

まずは佐々木まき絵を……なんだ、風呂に入ってるのか。一緒にいるのは明石結奈に和泉亜子、それに大河内アキラだな……まったく、こいつら停電の話聞いてなかったのか？

とりあえず佐々木まき絵をかいしてこいつらも僕^{しもべ}にして……風邪を引かれても困るからメイド服でも着させてやろう。

あ、ぼうやに色仕掛けがどれほど通用するかも知りたいな……悪いが佐々木まき絵は全裸で向かわせるか。

「さて……茶々丸、私たちも向かうぞ」

「分かりました」



「あ、あああ、アスナさん！」

「むー……？　なによーばかねぎ……私は明日の朝もバイトで忙しいんだから……ふああ」

「エヴァンジェリンさんと戦ってきます！　でもまき絵さんが操られているので協力を……あ、いえ、出来ればいいんですけど……」

アスナさんに強制することはできないし……魔法の道具をうまく使えばあるいは……
マジック・アイテム

でも、まさかクラスメイトのまき絵さんを操るなんて……てつきりエヴァンジェリンさんも反省したから学校に来たんだと思ったのに話し合いの余地もなかった……やっぱりエヴァンジェリンさんは悪い魔法使いなのか……？

また僕の油断のせいで生徒の皆を危険な目にあわせてしまうなんて……！

「いや、やっぱりアスナさんも生徒なので迷惑はかけられません！　ここは僕一人で行ってきます！」

「えっ！？　って、ちよっとネギ！？」

「兄貴！？」

じゃあ、早くいかないと！

確か大浴場に来てって言ってたよね。

うん、油断しなければ僕だって……少なくとも生徒の皆を助けるくらいはできるはず！

それに、橋までいけばエヴァンジェリンさんを捕まえられるし。

「じゃあ、行ってきます！」

「あ……ったく、仕方ないわねえ……エロオコジョ、私はどこいけ

「ばいいの？」

「姐さん！ やっぱりなんだかんだで兄貴のことがぶぺ！」
「余計なこと言うとかちぎるわよ？」



「来たか……む？」

この気配は……

「エヴァンジェリンさん！ まき絵さんを話してください！」

くそっ、一人で来ただと？

前回、茶々丸相手に遊ばれたのを忘れたのか！？

……しまったな。

神楽坂明日菜がいないのなら話にならないぞ。

まさかぼうやがここまで愚かだとは……

「ぼうや、パートナーはどうした？」

「あ、あなたはっ！？」

神楽坂明日菜が来ているなら操っているクラスメイトたちで適当に時間を稼いだあとに橋に向かうためだったのだが……しかたない。

「誰ですか！？」

「！？ いや、私だよ！」

何で分からん！

……ああ、幻術で大人になっているからか。そりゃそうだ。この歳のガキには人の顔の共通点なんか分かりはしないか。

まったく……私の美貌は年齢に左右されないだろ。失礼なやつだ。

「……まあいい。満月の前で悪いが、今夜ここで決着をつけさせてもらうよ」

「分かりました……でもそうはさせませんよ。今日は僕が勝って僕が勝って悪いことをするのはやめてもらいます！」

「ほお……それはどうかな。行け！」

クラスメイトたちをぼうやにけしかける。

何やら卑怯だとかなんだとか言っているが知らないね。

「言っただろう？ 私は悪い魔法使いだって……一人で来たことをとつくりと後悔させてやろう」

はあ……神楽坂明日菜さえ来ていればコイツらに戦わせる必要もなかったのだが……まあ、怪我されないようにぼうやが持ってきている魔法の装備だけは剥いでおくか。なにかいいものがあったらサイリルに喰わせても……む？

「風花・武装解除！ ラス・テル・マ・スキル……」

お、魔法薬まで持ってきていたのか……しかし、躊躇いなく脱がせるな。ぼうやの将来が少し心配になるぞ……

「眠りの霧！」

「おお、やるじゃないか」

大河内と和泉は戦線離脱か。いや、今のはいい連携だった。ま、私も少し手を出すかな。

「茶々丸！」

「はい！」

ぼうやも気付いたようだが……遅すぎる。

「魔法の射手 連弾 氷の17矢！」

茶々丸がぼうやの詠唱を妨害し、そこに魔法の矢を撃ち込む。ぼうやには逃げるしか手がないが……

どうする？

知っての通りこれには追尾性能があるぞ？

そのままぼうやは窓の方まで……っておい、まさか！

がしゃーん！

……普通、思い付いても窓に突進するか？ しかも頭から……お姉さんはぼうやの将来が本当に不安になったぞ。

しかし頭は良くても直情型の猪突猛進……悪い意味でナギの息子だなあ……だがどうする？ 氷の矢はまだ生きてるぞ？

「くっ！」

重低音が数回……

ふむ……杖に跨がりながら魔法銃で迎撃か。なかなかの腕前じゃないか。重装備で現れたときはどれだけ使えるものかと鼻白んだがどうしてなかなか……

それに、こうしている間にも橋に向かおうとしているあたりちやっかりしている。

「まあ、思い通りにはなってやらんがな」

神楽坂明日菜が来ないならおびき寄せるまでだ。あいつはあれで責任感が強いようだからな……女子寮の近くで騒ぎを起こせばぼうやが心配になって出てくるだろう。

というかなんだ？　さうか？

……いや、違う。それはダメなんだ。

あくまで神楽坂明日菜が自分から魔法に関わってこないと……サイルとの約束を破ることになってしまうからな。

とにかく佐々木まき絵と明石裕奈を使って寮の方に誘導しよう。ぼうやに限って無いとは思うが反撃されたら怪我しかねないから魔力もそれなりに与えてあるし心配する必要はないだろう。

「まき絵さん!？」

おお……佐々木まき絵もなかなかのポテンシャルだな。新体操のリボンを杖に巻き付けて飛び移るとか……まさかアーティファクトなのか？　……いや、ないな。

杖の上に片足で立ちながら佐々木まき絵が連続で蹴りを繰り出す……いや、ほんとにすごいな……

こちらで明石裕奈に、

「あんたたち！　やめなさい！」

来たか……!

って、ちょ、明石裕奈、避けろおおおお!

「ぶぺえっ!？」

「って、ゆーな!？」

……蹴る前に気付けよ。

と、佐々木まき絵の方も倒されたか。二人に怪我は……重大なものはないな。蹴られた痣なんかはあとで私が治してやろう。

まさか、顔面を足蹴にするとは思わなかったからなあ……

「さあ、エヴァちゃん！　これで二対二よ！」

「エヴァちゃん言うな！　……茶々丸、軽く揉んでやれ」

「……胸を、ですか？」

「なんでだ！？　……いいから真面目にやれ。気絶はさせるなよ？　あと苦戦しているようにしつつ自然に橋の方に逃げるんだ」

「了解しました」

……おかしい。

茶々丸、壊れたのか？

確かにもとからこういうところはあったような気はするが……しかし謎はすぐに解けた。

「マスターはツツコミだと思ったのでボケを担当させていただきました」

「いらん！」

超と葉加瀬……無駄に気が利くロボットを作ったな……

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　光の精霊……」

む、来るか……！

まあ、魔法の射手くらいなら無詠唱で使えるが……ぼうやにあわせてやるか。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　闇の精霊……」

うーん、久し振りすぎだなあ。この呪文、ざっと五百年ぶりくらいじゃないか？

「光の29矢！」

「闇の17矢！」

少なめに撃って少しずつ後退するか……いや、私が都合よく橋に逃げて不審か。むしろ私が追い詰める方がいいな。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 大気に満ちよ 白夜の国の凍土と氷河を こおる大地！」

「うわわ！？」

「まだまだいくぞ……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

えーと……さすがに直撃させるのは不味いから……この辺か？

「氷神の戦槌！」

「わあーんっ！」

うん、いい感じに追い詰めてるぞ。ラストは……

「氷の1001矢！」

「うわあああああ！？」

ふふん、どうだ見たか！

魔法の射手程度、本数が増えても無詠唱で使えるわ！

「マスター、やりすぎです」

「む！？ しまった……」

まあ、橋の向こうまで吹き飛ばしたから問題ないな。
というか茶々丸、神楽坂明日菜はどうした？

「それなら……マスターの背後に」

「なに？　って、うおああ!？」

「きゃっ!？」

しまった……振りかえったら神楽坂明日菜が飛び蹴りしてたから
つい投げ飛ばしてしまった……

というかボケロボ!

ちゃんと最後まで戦わんか!　こら!　口笛で誤魔化そうとする
んじゃない!　AKBとかいいから!

「……ごほん。なるほど、ここは学園の端だからな。登校地獄で私
は外に出れない……なかなかセコい手じゃないか?」

そろそろか?

もう一歩?

いや、まだか……あるって分かっていると逆に怖いな!

もう一歩……ここか!

私と茶々丸を囲むように魔法陣が展開。魔力の縄が私と茶々丸を
縛る。

(茶々丸、解除は可能か?)

(はい)

ぼうやたちに気付かれないように会話する。

こういう罠に対して私は敏感だからな。ナギとサイリルに落とさ
れたにんにく落とし穴は今でも忘れられん。

あれは辛かった……

「捕まえました！ これであなたたちはもう何もできません！ さあ、観念してください！」

「ふむ……確かに強固な封印だ……降参せざるを得ないな」

（超鈴音からの合図です。一体のカメラの権限を奪取、画像をすり替えたと）

（ナイスタイミングだな）

つまり、学園は私が降参したところでこの戦闘は終わりというように勘違いする。

なんたって私が降参したんだからな。

まあ、もちろん、

「なんて言うと思ったか？」

と、続くわけだが。

（茶々丸、やれ）

茶々丸があらかじめ仕込んでいた封印解除プログラムを発動させる。

十五年間も辛酸をなめ続けているんだ。封印魔法に対しての準備がないわけないだろう。

「さて、ぼうや。悪いがお遊びはここまでだ……」

「えっ？ ぐうつ！？」

封印解除が終わった瞬間に瞬動術を使って接近、ぼうやを気絶させる。

「ちょっとエヴァちゃん!? まだ続ける気なの!? ネギはあんた
たちを追い詰めたじゃない!」

「神楽坂明日菜、勘違いするなよ? ここまで全て私の計画通りだ。
黙って着いてこい。そのオコジョもな」

……そろそろ時間も無い。転移魔法を使うか。

「サイリル、もう少し待ってろ。すぐに自由にしてやるから……」

やほー♪ 復活ー……？ (前書き)

さらにもう一騒ぎ

本日にどめなので短めですよー

今回終盤から微グロ

やほー♪ 復活ー……？

「な、ななな、なんなのこれえ!？」

「影を使った転移魔法だ。危険はないからあまり騒ぐな。茶々丸、お前はぼうやをつれてこい」

「はい」

別にぼうやはいなくていいんだが道端に放っておくこともできんしな。それに順調にいけばサイリルもぼうやの生徒になるんだ。顔をあわせておいてもいいだろう。

……受け入れてくれるよな？

「着くぞ」

「えっ!？ ……って何も見えないけど？」

闇の中で合図を出す。

別荘の中まで直接転移したから多少時間がかかったが……言葉で説明してギャーギャー騒がれるよりは直接見せてしまった方が手っ取り早い。

「なに……あの氷。中に女の子いるじゃない!」

「あれは……私の妹だ」

「妹? ダーク・エヴァンジェル 闇の魔法使いに家族がいたなんて、」

「黙れオコジヨ」

誰がなんと言おうとサイリルは私の妹なんだ……いや、まあサイリルがどう思っているかは知らないが……
いや、今はいいか。

「神楽坂明日菜……ぼうやと仮契約はしているな？」

「えっ？ あ、えっと、したと言えばした……というか、今はしてないというか……」

は？

いや、茶々丸と戦ったときは仮契約していたと聞いたぞ？

「おい、オコジョ……説明しろ」

「いや、兄貴と姐さんは一度は仮契約したんだが中途半端で……だから今は、」

「なら今しろ。ぼうやは寝ているから恥ずかしがることもあるまい」
「なっ、なんで私が！」

まあ、寝ているからってキスしろと言ったらこういう反応だよな……こいつもまだなんだろうし婦女子に対してファーストキスを強要するのみな。

「頼む……お前の力が必要なんだ。お前じゃないと……助けられないんだ」

「エヴァちゃん……」

エヴァちゃん言うな。

「……分かった。でも、まずはちゃんと説明して！」

「……まあ、いいだろう。だがぼうやには言うなよ？」

もともとサイリルは魔法世界での英雄的組織の赤き翼に属し、本人もまた英雄として扱われることも少なくなかった。

ただし必ず敵対者を食するという残虐性から、今となっては赤き翼との繋がりを否定するものも多い。『ハングリー・キティ』なん

て可愛いあだ名をつけられているがその実態は悪魔のような戦いぶりへの畏怖だ。

……まあ、全て私がサイリルに逢うより前のことだがな。

そして私とサイリルは姉妹として十五年前に麻帆良にやってきた。ちなみにタカミチとは同級だ。

それで、まあある男を特訓していた時にサイリルの魔法が暴走してだな……そのままではサイリルが暴走に巻き込まれて死にそうだったから魔法ごと封印したと言うわけだ。

「ま、待ってくれ！ それじゃあの赤い大剣は魔法だったのか！？ どうして本人が封印されているのに消えないんだよ！？」

「口に気を付けろ。オコジョ……」

あの大剣はこの別荘の気から魔力を吸い上げている。元からそういう魔法なのかは知らんが、それが今でもあの魔法が続いている原因だ。

……あの大剣を消すにはこの別荘内部の全ての魔力を消し去るしかなかった。

神楽坂明日菜がいなければな……！

「なんでそこで私が出てくるわけ？」

「魔法使いと契約した従者はアーティファクトという従者の特性に合致した特別な魔法具を手に入れる……影の薄いやつなら姿を消すアーティファクトだったりな」

サイリルが稜雷爪というのも食べるという在り方に対応したのだろう。

だから、魔法無効化能力を持つ神楽坂明日菜の場合は十中八九、その類いのアーティファクトがでるはずなんだが……

「神楽坂明日菜、私にデコピンを試してみろ」

「え？ ……まあいいけど。っえい！」

バチインツ！

~~~~~っ痛！

このシリアスな流れで本気でやるバカがいるかあ！

痛い……これ、痣になるかもしれん。痛い……

「本当に痛かったんだぞ……？」

「ご、ごめんごめん、謝るから泣かないでよ……それで、なんでデコピン？」

「泣いてなどいない！ まあ、お前には分からんだろうが私の周囲には魔法障壁が張ってあってな……ちようどいい。そのおこじよを思いきり投げてみる」

「い、痛いと言わないでしょうね？ ……たあ！」

速っ！？

当たらないって分かっても目を瞑りそうだ……

「ぶぺっ……」

「あ、エロオコジョが空中で弾かれた！」

「まあ、こんな感じに、お前にはそういう能力があるんだ」

魔法界の一王族だということは言わなくてもいいだろう。

「あ、分かったわ。そのアーティファクトってのが魔法を消す力を持つはずだからそれで氷と剣を消すのね？」

「氷は私が解除できるから剣だけに集中しろ。サイリルに攻撃の意思はないと思うが……つい、とか、うっかり、とかは十分考えられ

るからな」

「ちょ、そんなことやらせるわけえ！？ ……まあ、いいわ。そうしないとおの女の子を助けられないんでしょ？ ほら、エロオコジヨ、パクティオーとかいうのやっただげるから準備しなさいよ」

「了解っス！」

……なんとも思い切りのいい女だ。

性格がもう少し大人しかったら私の従者に迎えてやってもよかったな。その方がぼうやとキスするよりましだったろう。

……ただ、クチの悪いチャチャゼロに最近愉快なことになっている茶々丸、さらに復活するサイリルだろ。それに加えてさらにバカレンジャーの一角が加わるというのはゾツとしない。

「パクティオー！」

「……あれ？ なにこのカード？」

「パクティオーカードだ。それをもってアデアットと言え」

「あ、アデアット」

すうっと神楽坂明日菜の手元が白く光、扇状に開いたものが現れる。

蛇腹に折り畳まれた分厚い純白の打面と緋色に染め上げられた鮮やかな持ち手。

「なにこれ……？」

「ハリセンだろ」

「ハリセンっスね」

「見ればわかる！……ってなんではりせんなのよお！？ なんかす

ごそうなの出そうだって言ってたじゃない！」

「お前の魔法無効化能力以上にツツコミの才能があったんだろうな

……」

「なによそれ!？」

まあ、もちろん冗談だ。

私にしか分からないようだがあれを使うには神楽坂明日菜の魔力が足りない。

ならば……

「外から魔力を注げばいい話だ……!」

「え、ちょ……きゃっ!？」

私の魔力を喰らって再び変形……今度は黒い片刃の大刀となった。  
ふむ……これなら……

「神楽坂明日菜、それを正面に構えろ」

「えと、こう?」

「ああ、動くなよ? 絶対に動くなよ!？」

前振りじゃないからな!

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精 闇の精 闇  
を従え吹雪け常世の氷雪! 闇の吹雪!」

「え、ちょ、きゃあ!? ……あ、れ?」

荒々しく魔力を撒き散らして神楽坂明日菜に殺到した私の魔法は、  
しかし空中で消え去った。

「大当たりだ……その剣にはやはり魔法を掻き消す効果がある」

最大の懸案事項もこれで解決だな。  
ならばあとはサイリルを助けるだけだ。

神楽坂明日菜も分かっているのか、その目は既にサイリルの持つ大剣に向けられている。

……いい目だ。

「準備はいいか？」

「うん！ いつでもオッケー！　なんかこの剣見た目よりも軽いみたい！」

早速使いこなしているみたいだな。

「氷を解いた瞬間斬りかかれ！　時間的猶予はほとんどない。一二三でいくぞ！　一！」

「二」

「三！」

タイミングは完璧だ！

降り下ろされた大刀がサイリルの大剣に吸い込まれ、

「――」

「きゃっ!？」

「なにっ!？」

待て……今のはなんだ!？

確実に避けられるタイミングじゃなかった。いや、それどころかいきなり降り下ろされた大刀を素手で掴んで投げ返す？

スーパーマンもビックリな超反応だぞ!？

それにサイリルの口は呪文らしき言葉を紡いでいたが肝心の声が出ていなかった！

「って魔力が高まって……暴走か!？　まずい！　大剣が破裂する

ぞ！」

神楽坂明日菜に糸を絡め思い切り引き寄せる。

……この距離だと巻き込まれるかも……いや、巻き込まれるな。外での十五年間はここでの三百六十年。あの大剣がその年月の間溜め込んだ魔力を放出したら……この別荘どころか麻帆良一体も破壊するかもな。

「サイリルの救出には失敗したんだ……共に死ぬのならそれもいいか」

もっとも、吸血鬼の私が死ぬるのかは甚だ不明だがな……

「――」

「サイリル……最後なんだから声くらい聞かせてくれてもいいだろうに……」

本当、最後まで……

「ねえ、エヴァちゃん……なにあれ？」

「あの大剣に内包された魔力が破裂するんだ……すまなかったな。巻き込んで」

「いや、そうじゃなくて剣の形が変わったの！」

「……は？」

神楽坂明日菜の言葉に驚き……いや、むしろ呆れながら顔をあげると……

「やほー♪ 暴走止めちゃった！ さすがあったしい！」



鉤爪のついた深紅の棒を片手でバトンのようにクルクルと回し、見たことのない顔で笑うサイリルがいた。

いや、顔かたちはサイリルだが存在が異なっている。それは白髪白眼という視覚的なものだけではなく気配自体が異なっていた。

そして私と目が会うとにこりと笑い……

「それで……あたしに刃を向けたってことは……貴女たち、敵ね？」

急激に金色に染まったサイリルの虹彩が私の眼前に迫り、

「二人目ー♪」

サイリルは棒に付いた鉤爪を私に突き刺し肋骨を強引に剥がし取った。

「ぐう……!!」

「あはっ! どかーん♪」

……そして、爆発。

これは……どうしたことだ……? ?

どうして、サイリルが私を……

じゃ、そういうことでー(前書き)

これで分かる人は分かるんじゃないかなあ

じゃ、そういうことでー

「ふふ♪ たーのしっ!」

ぐうつ……くそ、どういうことだ。

こいつは本当にサイリルか……?

いや、それだけじゃない……どうやって暴走寸前だった魔法を纏めあげた……!?

もし……仮説を立てるならあの声なき詠唱だろうが、そもそもあれはなんだ?

声を出さないで魔法を編めるなんて見たことも聞いたこともないぞ!

「っち」

……肋骨を剥ぎ取られた上に内臓に直接爆発を喰らったからな……

……少し、回復に時間がかかりそうだ。

いやはや、これだけの痛み……いつぶりだろうなあ……!

この二百年間はほとんど重傷はなかった。はっ……懐かしいじゃないか!

「あらら? まだ生きてるの? ふっしぎー♪」

「バカにしおって……」

本当に楽しそうに笑う。

とらえどころがないな。

「じゃあ、もう一発いってみるー?」

「くっ!」

再び鉤爪が振り下ろされる……まだ、か体が動かん……！

「たぁー！」

ブウンッ！

「おっとっと……！ あぶないなあ！ 人に刃物は向けちゃダメって習わなかったの！？」

神楽坂明日菜か……ダメだ。お前じゃそいつには敵わない！  
早く逃げろ！

「そ、そんな物騒なものの振り回してるアンタに言われたくないわよ！ ……エヴァちゃん平気？」

「だから、エヴァちゃん言うな……！」

「私がなんとか時間稼ぐから……早く立ってね」

足が震えてるじゃないか……

まったく……無理をするなどいっても無駄なんだろう？

なら、私が無理をしないなんてことはできないな……

「ぐふっ！」

「ちょ、エヴァちゃん血吐いてる！？ 無理に立っちゃダメじゃない

！」

「心配するな……少し下がっている」

あいつには、聞きたいことがある。

「おい、サイリル……十五年もかけて助けてやったというのに随分

なあいさつじゃないか……こんなに寝起き悪かったか？」

「え？ 三百六十年も閉じ込めたの間違いじゃないの？」

「……なに？」

……まさか、私の判断を恨んでいるのか……？

それとも長い年月の中で壊れてしまったのか……？

確かに三百六十年。確かに精神異常を起こすには十分すぎる  
だが、あの時はああする以外に方法は……

「なーんてね、嘘嘘！ そもそも、私はサイリルなんて名前じゃないの」

「……なに？」

確かに、サイリルにしては話し方も仕草も異なっているか……

「まあ、最初からわかっていたさ……」

「今さっき悲しそうな顔してたのにー。それで命乞いするの？ 戦うの？」

爛々と光る虹彩に私を写し込みながら嘲るように、しかし童女の無邪気さを湛えながら笑う。

随分と調子に乗ってくれるじゃないか。

「命乞い……？ ふん、私を殺せるのなら殺してほしいものだ！  
リク・ラク・ラ・ラック、」

「遅いっ♪ ー」

なっ！？

光の劫火だと……中級魔法もこの短時間で！  
これを打ち消すには闇の吹雪以上の……いや間に合わん！

「神楽坂！」

「もう投げたわよ！」

「お、おお、そうか」

……私が指示する前に行動するとはなかなか使えるじゃないか。  
光の劫火が私を灼く前に神楽坂明日菜のアーティファクトが私の顔の横を通りすぎる。

無骨な大刀はそのまま魔法を切り裂き……

「きゃっ！」

「サイリル！？」

まさか、刺さったのか！？

中身がサイリルじゃないとしても身体はサイリルのものだ。なるべく傷つけないんだが……

「いったー……」

「っ！」

やはり……当たってしまったのか。

魔力の残滓が消えて砂煙が晴れたときサイリルの左腕は無くなっていた。血は止めたらしく噴血はないが……痛々しい。

すまん……結局こうなるなら、あの時サイリルを封印することを選ばず、一緒に障壁を張っていれば……

「まったくもう！ ㄣㄣㄣ」

「え……うそ」

神楽坂明日菜の呆然としたような声が耳に届く。そして続く吐き

気をこらえるような呻き声。

……私だって許されるなら目を背けたかった。  
それほど異様な光景が私たちの目の前で繰り広げられている。

ぐじゅり

どうして、切断面から新しい腕が生えてくるんだ……？

さすがの私もあままで悪趣味な再生はしないぞ………うえ。

さらにサイリルは痛そうな魔法をいくつか空中に待機させる。一つ一つに闇の吹雪レベルの魔力が込められているように感じるが……これは、まずいな……

「もう！ 手加減してあげないからね！」

サイリルが痙攣を起こしたように鉤爪のついた棒——火搔き棒でカリカリと地面を引っ掻くと爆竹程度の小さな爆発が連続起きた。

特性はサイリルが作り上げた合体魔法と同じみたいだな……前は振れば火炎、斬れば爆発と言っていたな。爆発の起点はあの鉤爪のようだな。

「たあ！」

「わわっ！？ 容赦ないな」

「てっ、手加減しないって言ったのアンタじゃない！」

すぐさま神楽坂明日菜が大刀を拾い上げ再び斬りかかる……本当に容赦ないな。

普通は相手を斬ったショックで動けなくなるものだが……よほど胆力があるのか、殺らなきゃ殺られるということに本能が悟っているのか……なにせよ役に立つ。

「神楽坂！ 私が糸でフォローしてやる！ 力を抜け！」

「よく分かんないけど分かった！ あ、でも痛くしないでね！」

返事を聞く前から神楽坂明日菜の身体に繰糸を絡み付ける。これで操り人形のように動かすわけだ。

糸でなにかを動かすのは久しぶりだな……

「すっきありい♪」

「え、ちょ、わっ!？」

サイリルが降り下ろした火掻き棒に向けて大刀を無造作に振らせる。

「あれ？ 消えちゃった……あ、そっか。貴女……」

二人が交差した瞬間、火掻き棒が音もなく消え去った。

……ふむ。消えたということはやはりアーティファクトではなくサイリルの魔法を基にした魔法兵具か。しかし、ただの魔法を魔法兵具にするとは……どういう技術なのか皆目検討もつかないな。

「っと、危ない」

不意打ちのつもりか大きく弧を描いて飛んできた見たこともない魔法を神楽坂で切り裂く。

これくらいなら十分対応できるが……攻めに転ずるのは難しいか。

「ちょっとエヴァちゃん!？ ちゃんと戦う気ある!？ さっきからすごいギリギリなんだけど!？」

失礼な。



やはりバカだから無造作に大刀を振らせて相手の目測を狂わせるという私の考えが分らないんだろうな！

……しかし戦いやすいな。

私よりも大きなしんちに魔法を掻き消すアーティファクト……それに私の動体視力と繰糸術が合わされば魔法使いに敵はいなさそうだな。

肝心の私が魔法を使えないというデメリットはあるが……

「ああもう！  
――――」

「気を付けろ！」

「分かってるってば！」

二人してサイリルの行動を注視する………む？

何も起きない……展開していた魔法を解いたのか……？

これ以上戦闘を続ける気はないということか？ ……その割には眉も吊り上がっているし、なにより地団駄踏んでいるが……

「もう、二人ともなんなの！？ 起きてみればいきなり斬りかかられて、やり返したら簡単に死ぬから手加減しよう……かと思えば魔法を消すなんていうズルっこもするし！ そういうズルしたら楽しく遊べないでしょ！」

遊びだと？

こいつはいったい何を……いや、

「そんなことはどうでもいい……サイリルを返せ」

「サイリル……？ あ！ そ、そんなことで私に斬りかかったの！

？ もー、信じられない！ 時間がたてばあの子は勝手に出てくるのに！？」

………は？

え、ちょっと待て。

落ち着け私、クールになれ。

「お前は、私たちが攻撃したから反撃したのか？」

「うん」

「……お前は誰彼襲うわけではないとか？」

「うん」

「そして、サイリルの身体を奪うことが目的というわけではない……？」

「うん♪」

え、じゃあ私たちが戦ったのは全部骨折り損？

すぐに斬りかからなければなにも起きなかった？

……なるほど。

「つまり不幸なすれ違いと言うことか」

「うんうん♪」

「って、納得できるかーっ！」

「キヤー♪」

ったくもう！

だいたいこいつの正体すら明らかになっていないのに何を信じろ  
と言うんだ！

「だいたいお前は何者なんだ！」

「え、えーと……サイリルこの子の先祖にして裏面、かな？」

サイリルに取り憑いているのか？

いや、しかしサイリルほどの存在に取り憑くとなると余程高位の

霊ということになるが……

「……名前は？」

「んと、秘密……睨まないでよー。まあ、ザ・ウィッチ始まりを告げる巫女って呼んでくれればいいよ」

……偉そうな呼び名だな。一人ですべての魔女を代表する気か。

「なら……さっきの、詠唱はなんだ？」

「んー……詠唱っていうか、精霊さんのお話？」

小首をかしげながらサイリル……いや、ザ・ウィッチ。  
見た目なサイリルだからあまり言いたくないが、その仕草が似合  
っているのがまた忌々しい。

しかも精霊との会話だと……？

「じゃあ、なんだ……？ お前、精霊の言葉が、わかるのか？」

「うん！ すっごいでしょ♪」

精霊と思うように話せるということは既存の魔法のルールを覆す  
……精霊に対して効率的に命令を出せるなら、それこそ古代言語で  
の詠唱より強力な魔法を最高速度で発動することができるからな。  
可能ならば私も知りたいが……そもそも精霊の言葉を音として捉  
えられない人間の耳では不可能だろう。

「で、なんでサイリルじゃなくて裏面のお前が出てきてるんだ？  
というかそもそもどうしてサイリルの中にいる？」

「まず私が表にいるのは。まあ、正直いつて……えっと、サイリ  
ルって名乗ってるんだっけ？ この子が精神レベルで休眠してると  
ころを斬り付けられたから咄嗟に守ろうとして……」

精神が身体から離れていたから主導権を奪えた……？

いや、それ事態も驚きだが……サイリル、いつのまに精神レベルでの休眠なんて真似ができるようになったんだ。それは仙人とかの領域に片足入っている気がするぞ。

「私たちは暴走寸前だった神剣を棄却させるつもりだったのだがな」「あらー……そこはほら、不幸なすれ違いってことでさ♪ それで、私がこの子の中にいるのは……うーん、信じてくれる？」

一旦言葉を切ったザ・ウィッチが私の目を覗き込む。なんだか心の底まで見透かされそうで居心地悪いな。

……なんだ？

いきなり真面目な顔をして何を言うつもりだ。

「一言で言えば……世界を守るため」「は？」

世界を守るため……といったよな？

私の聞き間違いじゃないよな？

……夢が大きいのは大いに結構だが程々にしておかないと痛い奴だと思われるぞ？

「そうじゃないってー……私はサイリルこの子のリミッター代わりなの！私がいなかったら大災害なんだからっ」

サイリルのリミッター？

しかもそれが外れると大災害？

っは。面白くない冗談だ。ならなんだ、サイリルが世界を破壊するの？

私より力のないサイリルが？

猫にまみれて昼寝するサイリルが？

いや、普通にありえないだろ。

「あっ！ 信じてない！ 本当なんだからね……本当に、大変なんだから」

「仮にそうだとおしてどうしてお前がストッパーなんてことをしてるんだ？ 関係無いだろう？」

「関係あるよ。サイリルは私の最後の子孫だし、私は人間が大好きだから守ってあげたいの。だから危険を犯して運命にまで手を出して魔法世界に封じたのに……いやー、ここまでくると人間の業の深さってものが分かるね！」

時代も場所も全然違うところに来ちゃってるし、などとよく分からないことを言うザ・ウィッチ。

……今の話だとサイリルが人間に対してなにかしら害をなすのはコイツの中では確定らしい。

ここまで強い奴が言うんだ。根拠はあるのかもしれない。いや、あるのだろう。

「なら、サイリルを殺したいのか？」

これの答えは聞かずとも分かる。

NOだ。

でなければ勘違いだったとはいえ身体をのっつて助けるなんて真似をするはずがない。

……コイツの行動はあべこべだ。

サイリルが災害なのだとしたら殺せるときに殺せばいいのにそれをしない。

それは、どうしてだ？

子孫だと言うくらいだし愛情やらなんやらかもしれんが……

「あ、そういえば貴女は吸血鬼だよね？」

「は？ ああ。それが？」

雨が降っているね、というような気軽さでまるで吸血鬼であることがなんでもないように聞いてきた。

……おい、お前。

こう見えても私が周りの人間とは違うことをコンプレックスに思っているとか思わないのか？　そういう気遣いが出来ないやつは出世しないぞ？

まあ、気にはしていないがな！

「うーん……でも出来損ないだねえ」

「……なんだと？」

吸血鬼であることは気にしていないが出来損ないなどと言われる筋合いはないぞ？

確かにニンニクとネギの臭いだけは未だに克服できないがあれば生来のものだ。

銀の弾丸も日光も流水も全然平気なんだからな！

「んー、人間から吸血鬼に作り替えられたのかな？　……貴女を作った人は貴女のことを知らなかったみたいだねー。本来ならそんな仮初めの不死じゃなくて、えっと、なんていうのかな、貴女という概念から死を取り除くことが出来たのに。まあ、完全な不死じゃないから貴女にとってはマシなのかな？」

「さて、私は死ぬのか？」

「うん。とはいってもどの状態を死って言うのかにもよるけど……理性がなくて本能のままに血を吸うだけのモノは生きてないよね？」

貴女はそういう状態にもなれるよ♪」

「……楽しそうに言うんじゃない」

一瞬、想像しかけたじゃないか。

……だが、理性を失うことができるならいざというときの逃げ道にはなるのか？

いや、でも理性のない私が他人様に迷惑をかけるかもしれないしなあ……やはり、私に逃げ道などないか。

「ところで、さっきからサイリルのことを呼びにくそうにしているが……本当の名前は別にあるのか？」

「ん、んー……あるって言えばあるけど……無いっていった方が正確なような……うーん」

何気なく聞いた質問はザ・ウィッチにとっては思いの外難しい質問だったらしい。腕を組んで首をかしげている。

というか有るような無いようなとはどういうことだ？

名前に関して言えばそんなものどちらかしか有り得ないだろう。

「いや、うーん……人間が勝手につけた呼び名があるからさ。でも名前とはちよつと違うし……」

「なんでもいい。貴様は普段なんといっているかが気になったただだ」

「まあ、それなら……やっぱりこれかな」

もったいつけるような間を開けて悪戯を仕掛けるときのような笑みを浮かべてからザ・ウィッチはサイリルの本来の呼び名を告げた。

「……終末の獣」  
ザ・ビースト

ほんとにほんとに……（前書き）

ほんとにほんとにサイリールにゃー！



ほんとにほんとに……

「<sup>ザ・ビースト</sup>終末の獣……ふん、なるほどな。貴様が始まりで終わりがサイリルか。ならば貴様の正体はサイリルの名前のアナグラムの……」

「ん？ 穴蔵がどうかしたかの？」

「ってサイリルー！？」

なんじゃ、エヴァのやつ。

人がやーっと封印から解放されて早々になんの面白味もないシリウス顔なんて見せなくてもよかる……？

別にいいんじゃが、そんなノリツツコミみたいな反応されるとちと困るの。いや、泣いて喜べとは言わぬが。

「エヴァ、恥ずかしがることはない。私の胸に飛び込んできてもよいのじゃよ？」

「誰がするか！ さんざん迷惑をかけおって！」

む、そういうこと言うかの？

「ならば言わせてもらうがよりによってこの別荘に封印したままとか、少しは頭使って私のことも考えてたもれ！ 本来なら……今何年じゃ？」

「2003年です」

む？

誰じゃこの緑髪のアナシーな角つけてる女は……？

「マスターの従者で茶々丸と申します」

「ふむ……いや、そんなことよりも実時間十五年も経っておるでは

ないか！ 三百六十も歳とったとか意味わからぬ！」

「そ、そこはほら……私との歳の差が縮まったと考えれば……」

「ええい！ 言い訳するでない！ ピチピチギヤルだった私がいつのまにか四百六十三歳とかなんの冗談じゃ！」

「わ、私との差はまだ百五十あるんだからいいだろ！」

「いいわけあるか！ ああ……髪の毛もこんな真っ白になってしまつて……かわいそうな私！ こんなあわれな猫、宇宙でも私ぐらいじゃ！」

髪の毛は黒く戻せるがの！

というかもともと金髪なのにエヴァと誤解されてしまうからと黒髪にまでしてやってるんじゃないぞ！

それをこんな仇で返すとは！

「あのー……」

「なんじゃ！？ 邪魔すると喰らうぞ！？」

「いや、あー……めんどくさそー」

なっ……な、なんじゃこの新手の女は！

バカっぽい顔のやつにバカにされたく……ぬ？

「お主……アスナ姫かの？」

「姫！？ やーね、私はそんない身分じゃ……むしろ毎朝新聞配達してる苦学生よ。名前は神楽坂明日菜だけどね」

「ふむ、タカミチは元気かの？」

「タカミチ……ってあんたも高畑先生の知り合いなの！？ えっ、でも三百六十年封印されてたって……あれ、それと知り合いのエヴァちゃんと高畑先生……？ 何歳？」

む？

おお、エヴァのやつ別荘のこと説明しておらぬのか。  
おいエヴァ……あれ、拗ねておる。  
仕方ないの。

「ここはダレダオマエ球という、」  
「ダイオラマ球です」

なんじゃ、えーと茶々丸？ 少しくらい間違えることもあるんじゃないから多目に見てたもれ。

「えーと、だから、このダイ・オア・リヴ球の中では、」

「いや、茶々丸さんが言ったのはそんな崖っぷちな名前じゃなかったわよ……？」

「う、うるさい！ とにかくここでは実時間が二十四倍になるんじゃない！ 外の一時間が一日になるようにの！」

「へー。あ、てことは封印されたのって十五年前なのね……夏休みの最後の日に借りたいかも」

「歳は余分を取るがの」  
「まだ若いし平気じゃない？」

アスナ姫が若い……？

いや、うん、そうじゃの。私よりかは若いの……本来なら同じ年くらいなのじゃがエヴァのせいで……！

「それで……えと、サイリルちゃん？ は、さっきの人とは別人？」  
「さっきの人とな？」

「あ、ううん。なんでもないの！」

「というかエヴァちんとかサイリルちゃんとか言っておるが私たちはアスナ姫の先輩なんじゃよ？ いや、私の場合、扱いとしては麻帆中を中退となるのじやろうが……というか、この外はまだ麻帆良

なのかの？」

エヴァは登校地獄が解けたら旅にでも出るかと思ってたんだがのう。

なんじゃ、結局学校が気に入ったのかの？

「いや、だから姫じゃないって……というかエヴァちゃんと私は同級生なんだけど」

「……は？」

いや、えと……なに、ということはまだ登校地獄の呪いは解けておらぬのか……？

つまり……

「おい、エヴァ！ ナギはどうなったにや！ あれじゃにや！？ どうせ忘れてるだ、」

「死んだよ……死んだ」

「な……ど、どうしてその時に封印をといってくれなかったんじや！ 私の腕が吹き飛んでも……それでも探した方がマシじゃったじゃろ！」

「いいわけあるか！」

……………クソ。

あのバカ者……私がいらないから気を付けろと言ったではないか！  
やはり……裏切られたか？

誰じゃ……誰がナギを殺した！

「答えよエヴァ！ ナギはいつ、どこで、誰に殺された！？」

「知るか！ 知っていたら私が呪いを振りきってでも殺しに行っているに決まってるだろうが！ 私が知っているのはトルコのイスタ

ンブルで行方不明になったというだけだ」

トルコ……中東だったかの？

紛争地域に数えられていたような……あのバカ、恨んでいるものも多いと知っていながらそのようなところに……

「イスタンブールじゃな………？」

「おい、待てサイリル！ 何をする気だ！」

「決まっておろう。敵討ちじゃ」

「誰がやったかも分から、」

「ならばトルコごと滅ぼすまでじゃ！ なに、半日あれば燃やし尽くせるじゃろ……」

それで気が済まなければ周辺国家も巻き込むまでじゃ……！  
他国に逃げ込んでいる可能性もあるからの！

「ちょ、本気か！？ そんなことをすれば本国から追われることになるんだぞ！」

「エヴァも丸くなったのう……なに、ただ破壊を振り撒くだけならナギにもラカンにも負けぬ。いざとなったら魔法世界すら……」

この時代の人間で知っておるものは少ないが魔法世界は火星じゃ。それもテラフォーミングもまともにされていない中途半端さじゃ。ならば火星を覆っている魔法世界に孔でも開けてやればいい。私の力では難しいが……アスナ姫を喰らえば……

「アホかーっ！」

「痛いじゃ！？ ……なんじゃエヴァ。私を止める気かの？ お主だって敵討ちはしたいじゃろ！？」

「もう一回、アホかーっ！ 無駄に被害を広げてどうする……おお

かた魔法世界すら破壊しようと考えていただろう？」

「本国が無くなれば好きに魔法が使えるからの！」

私、頭いいじゃろ！

「威張るな……」

むう……いい考えだと思ったんじゃがな。

「えと、それで結局トルコ？　を壊すつてのは冗談？」

というかトルコってどこ、なんて言うアスナ姫に茶々丸が地図を見せておる。

地図といつても紙ではなく……ふむ、ホログラム立体映像というのか？　どうやらそれらしい。

「もちろん、」

「この猫は冗談じゃないぞ」

「へ？　……いや、うん、ナギつてのが誰かは知らないけど大袈裟すぎよ！　というかそもそも復讐なんて意味ないじゃない！」

誰かは知らないけど……のう。

こっちの都合で忘れさせたとはいえ空しいのう。アスナ姫の中にはナギもガトウもアルもラカンもクルトも詠春とおらぬのか……

ゼクト？

キャラが被っておるから嫌いじゃ。だいたい造物主との戦いで死んだと聞いておる。

「意味がないわけあるか！　みすみすと殺させてしまった私がナギにできる償いは彼の者に生き延びたことを後悔するほどの苦痛と屈

辱を与えた上で冥府に叩き落とすことだけなのじゃから!」

「だから、それで誰が喜ぶのよ! そのナギって人は喜ぶの!?!」

「ナギは死んだんじゃから喜べるわけなかる!」

「そうじゃなくて! 生きてたとして喜ぶかって聞いてんのよ!」

「ナギが生きてたら復讐なんて必要ないじゃろうが!」

「あ、えっと、うん……と、とにかく! そんな暇あったら働いて私に美味しいもの奢りなさいよ! 私が喜ぶ分だけ建設的よ!」

「む……」

確かに私も美味しいものが喰いたいもの。

そういえば胃袋も空っぽじゃ……うあ、意識したら空腹具合がやつぱいんじゃが。

「よし、ナギの弔い合戦は延期じゃ!」

「延期……?」

む、アスナ姫よ。そんな怖い顔で睨むでない……私は小心者なんじゃよ?

怒られるのは嫌いなんじゃからな?

「少しは騒いでやらぬと死んだナギも不憫じゃ……」

「父さんは死んでません!」

「ぎにゃっ!?!」

な、なななな、なんじゃいきなり!?

おま、っていうか誰にゃ!?

顔を見せろ!

「ネギ! 気がついたの!?!」

「兄貴!」

む、なんか一人と一匹増えた。  
ネギってのが赤毛小僧でオコジョは使い魔かの。

「父さんは、死んでません……六年前の雪の日、僕にこの杖を、」

「ほお……ん、父さん？」

「は、はい。僕はネギ・スプリングフィールド……ナギ・スプリングフィールドの息子で、アスナさんとエヴァンジェリンさんの担任です」

「ほほー、なるほど、確かにどこことなく雰囲気は似ておるのう……じゃがバカっぱさが足りぬ。お利口さんはベッドで寝小便でも垂らしておれ」

「な、なななな!？」

「おい、サイリル……いくらなんでも言い過ぎじゃないか？」

「うむ、正直言葉を間違えた……」

ベッドでお休みの時間じゃと言おうと思ったんじゃ……

「なんなんですかこの人は! いくらなんでも失礼すぎます! ぼ、僕だってもう十歳なんですからおねしょなんて!」

「ネギ、私のベッドでおねしょしたら追い出すわよ……?」

「ひい! ……と、とにかく! 少なくとも名前くらい名乗るべきなんじゃないですか!？」

う、むう……生意気じゃがナギの息子じゃし、私にも非はあるから……

「魔猫サイリル……味方からはハラペコ子猫、敵からは災厄の怪物  
ハングリー・キティ  
と言われて親しまれておった。じゃが小僧に名乗るべき立場は……  
カラムニティ・モンスター  
ナギの友人じゃ」



「とりあえずお前の呼び名は全然親しめないがな」

エヴァは無駄に茶々をいれるでない！

サウザンド・ゴチ

まあ、ほかにもナギのにかけて千の皿の女の子とか筋肉だるま（ラカンのことじゃ）の上の猫とか呼ばれておったがの。

む、どうした小僧？

「な、あ……あなたが、あのサイリル……？」

「そうじゃが……知っておるのか？ 小僧の歳で魔法大戦を知っておるとは大したものじゃの」

「それならあなたの通称は……違うじゃないですか！」

へ？

「エヴァ、そうなのか？」

「ああ……言わないでとおこうと思っていたが……」

むう？

なんじゃ、その苦虫を噛み潰したような顔は？

「サイリル、お前の扱いは昔とは随分変わってしまっている」

「ほお……」

……そうなのじゃな。

「して、小僧。私がなんと呼ばれておるのか教えてくれぬか？」

スカーレット・スマイル

「ス、血化粧の雌猫……常に唇を敵の血で塗らしている悪魔のような魔獣だと文献には……」

「ああ……私と戦ったもののほとんどは喰ったからか？」

「ほ、本当なんですか！？ どうしてそんなことを！」

……あの時代、そうやって魔力を得ないと命がいくつあっても足りなかったからの。

もちろん、だからといって喰うことを否定するとは言わぬが。餌にされるということは食物連鎖の頂点に君臨する人間からしてみれば恐ろしいことこの上ないのじゃろうが……私にとっては人を喰らう禁忌ではないからの……同族は人じゃなくて猫じゃし。

「そ、そんな人が父さんの味方なわけなんです！ 僕は認めません

！」

「孺子こしぞうっ！」

「エヴァ、よい……事実は事実じゃ。じゃが、やっぱり小僧のように思っておるものもいるのかの？」

「……むしろ、英雄として称えている者の方が少ない。それどころか戦争終結の後から姿を消したお前のことを世間では屍肉を喰らうために戦場を荒らした、と……」

「……そうか」

……まあ、もともと人間のために戦っていたわけではないからの。たまたま友人となった赤き翼の面々に付き合っただけで……私には立派な目的などなかったんじゃ。

じゃが……時代は、変わったのう。

戦争終結直後は私も英雄として可愛がられていたのじゃが……私自身、民の笑顔の一部は私の働きのお陰と、少しだけ誇りに思っておったんじゃがな。

皆は、私をどう思っておるのじゃろう？

もし、過去の栄光についた消えない汚点と考えておったら……悲しいのう。

「血の染みは洗濯でもなかなか落ちぬ頑固な汚れじゃからの」

うん、私うまいこと言うのう……

「サイリル！」

「ふぎゃっ!？ え、エヴァ、なんじゃ……?」

きゅ、急に抱きつくでない。

別に慰められるほど傷ついているわけでは……

「いい、なにも言うな……私は本当のお前を知っている。タカミチもお前を心配していたし、ジジイも、担任だった神多羅木も真実を知っている……だから、あんまり思い詰めるな」

「いや、じゃから………うむ」

私のことは、大事なものが知っていてくれればそれでよいのかもしれない。

願わくば、近くにいない友人たちも私を想ってくれているとよいのじゃが……

「……で、ネギ。謝らないの？」

「アスナさん、僕は間違って、」

「いや、どう考えてもあんたが悪者でしょ。だいたい本に書いてあるからって何でも信じちゃダメじゃない。そういうものより自分で見たものの方が信じられるでしょ?」

「う……」

別に、よいのじゃがな。

今まで周囲の大人たちが言い含めていたのなら小僧にとってはそれが真実じゃ。

事実というものはいとも容易く歪められる………そういえばそれで

裏切り者にされたこともあったのう。

「じゃから、私が<sup>スカーレット・スマイル</sup>血化粧の雌猫なのかどうかは、これから判断してくればよい」

「……はい、分かりました……それとごめんなさい」

「いい。小僧の責任は一分に満たぬからの……」

「サイリル……お前、大人になったな……」

いや、そこで感心されても困るのじゃが。

それに、虚構を流布した輩には一厘の救いも与えぬままに絶望の淵での惨死を与えてやるからのう……くふ

「あれ？　これからってどういうことでしょう？」

「さあの」

よろしくたのむぞ……先生？

## 十五年目の念願

「え、えーと……今日は嬉しいお知らせと……えと、なんだろう……皆さんにとっては嬉しい、そして僕にとっては気まずいお知らせがあります」

……ほんとに気まずいけど僕にも先生としてのプライドがある！生徒を正しい道に導くのが僕の役目！

喧嘩が起きたら仲裁して、僕の思い込みが入らないように客観的な立場から両者の弁明を聞いて公平に処断する。

そして時には生徒と一緒に泣いて、笑って……卒業式には一人一人に言葉を預ける。

それが伝説として語り継がれる銀八先生のような偉人になる近道だって……この、新田先生に貸してもらった本——『猿でもわかる教師への道』に書いてあった！

これを極めれば僕も晴れて一人前の教育者になれる……そう、僕はまだスタートラインにも立てていないんだ！

「まずは転校生の紹介です。さ、サイリルさん、どうぞ」

あと数秒もすれば教卓の横に位置する扉からエヴァンジェリンさんそっくりの、でも黒髪で猫みたいな耳と尻尾がついてる女の子が歩いてくるはず。

皆ビックリするだろうな。

エヴァンジェリンさんも心なしかウキウキしてるように見えるし。

「あっ!？」

扉に黒板消しが!？

僕が入ってきたときはなかったのにいつの間に？

しかもわざわざチョコークの粉を大量に付着させているようにしか見えない！

サイリルさんがいい人……もといい猫なのかは分からないけど教育者とは身を挺して生徒を護る存在！

だから僕は！

「サイリルさん危ない！」

完璧な計算のに基づいて設置された黒板消しは狙撃手の一発よりも正確に頭蓋骨を襲うって学校ものの大作『教室サヴァイヴァー』にイラスト付きで書いてあった。

そして、それを対処するにはイレギュラーな頭の動きだとも！

だから僕がサイリルさん突き飛ばせば、

「かかった！」

ぞくり……

悪魔の声が聞こえた……しかし、それよりもサイリルさんを助けることを優先しようと勇気ある一步を踏み出そうとしたとき……

僕は現実の非常さを思い知った。

足に感じる弾力。

これは……！

（ワイヤートラップ！？）

魔力で強化した脚力でも千切れないそれは多分『教室サヴァイヴ  
アー』でも図書委員が愛用していた六ミリタングステン鋼糸！

脚力の強化によって勢いがついた今、このまま転んだらサイリル  
さんに激突しちゃう！

サイリルさんの体感時間で三百六十年の封印から解除されたばかりの  
身体能力じゃ反応できないかもしれない……！

でも……

(止まらない……！)

無情にも僕の身体は既に空中に投げ出されていた。

お願いします！

避けてください！

あり得ないお願いをしながら、せめて現実から目を逸らしたいと  
まぶたをギュっとうじる。

時間が何倍にも膨れ上がったように感じなが……

ふわっ

「あれ……？」

僕は、サイリルさんに、抱き止められていた。

「なんじゃ？ いじめられておるのか？」

目を丸くしながらも僕を受け止め左腕で支えるサイリルさん。

そして右腕には何事もなかったように黒板消しが握られていた。

……すごい。

この黒板消しを止めると言うことは狙撃にも素手で耐えられるっ

てことだから……

「なにか言ってはくれぬか？ ……まあよい」

サイリルさんは本当に、見た目相応の女の子のようなふわふわした笑顔を僕に向けて、

「ナギの息子なら私にとっては甥のようなものじゃ……護ってやろう」

パチリと器用に片目を閉じて囁いてからサイリルさんは僕を離れた。

……酷いことを言っちゃったこと、気にしてないのかな？  
いや！

こうやってなあなあに流すのは教育者にあるまじき愚行！

「サイリルさん！」

「む？」

「すいませんっしたああああ！」

「ねっ、ネギ先生！？ いったい何を！？」

委員長さんが驚いているけどそれも気にしない。

床に頭を擦り付ける勢いでジャパニーズ土下座を敢行する。

許してもらえらるなら僕の安っぽいプライドなんていらない！

「……ふふ、面白い小僧じゃの。何についての謝罪かはわからぬが……よい、すべて気にするでない」

「さ、サイリルさん……」

「ほれ、立つんじゃ。教師が生徒の前で土下座などするでない。威厳を損なうことはやめるのじゃ」



そう言ってサイリルさんは僕を立たせて、僕のスーツについた埃を払う。

……やっぱり、本当はいい魔法使いなのかな？

「小僧……いや、先生……早く紹介してくれぬか？」

「あ、えと、ごめんなさい！……皆さん、新入生のサイリル・マクダウエルさんです。名字で気付いた人もいますですがエヴァンジェリンさんの双子の妹さんだそうです」

……これで、いいんだよね。

確かに二人はそっくりだし嘘だと分かる人もいないはず。

「さて……まず始めに確認したいのじゃが……主らはネギをいじめておるのかのう……？」

え？

僕っていじめられてるように見えるの？



む？

ちょっと凄みすぎたかの？

誰も彼もが息を飲んでおる。

いや、正確に言うとなエヴァを含む八人以外の一般生徒じゃが。

「……別に口も開けぬほど緊張することはないのじゃがな。まあ、可愛がっておるならよい……じゃが、悪意をもってネギに接した者は例外なく後悔させてやるからの」

それが、ナギを守れなかったことに対する私の贖罪じゃ。

死んではおらんと言うことじゃが……それならどうしてエヴァは封じられたままなのじゃ。

なれば、なにかがあったことは間違いなかる？

「あの、よろしいですか？」

金髪の大人びた生徒が手を挙げた。

「お主は？」

「雪広あやかですわ。先程の様子を見ているとネギ先生とは個人的な関わりがあるようですが……お二人のご関係は？」

「あやかか。よろしく頼む……ネギの父親が私にとっての兄弟みたいなもの。まあ、ネギは甥っ子とでも言えばよいのかの」

「そうですか」

本当はナギも私の子供みたいなものじゃがな。

あやかはほっとしたような息をはいてから私に向かって微笑んできました。

……ふむ。受け入れてくれる、ということかの？

「え、えーと、それじゃ、他にサイリルさんに質問がある人はいますか？」

数分前の緊迫したムードを崩そうと小僧がここぞとばかりに生徒に質問を求める。

見るからに必死で頑張っておるのじゃ、私も協力してやらんな。

「あまり多くを答えられるとは思わぬが……」

第一印象が怖すぎたからかの？

拳がる手はまばらじゃ。

……多分、魔法世界での今の私はこういう風に扱われておるのじやろうな。

「え、えーと……意外と少ないですね。それでは桜子さん」

「エバちゃんの妹って言ってたけど、どうして今まで一緒じゃなかったのかなーって」

「それは話すと長くなるのじゃが……簡単に言うと……」

「簡単にゆーと？」

「学校とかダルくてのお」

私の気の抜けた答えに何人かがガクツとなった。

真ん中の後ろの方のメガネ女子からは今にもツツコミを入れられそうじゃ。片手を押さえプルプルしておるが、あれはまさしくツツコミを入れそうになる手を押さえ込んでいる証拠じゃ。

別にツツコミ入れてもいいんじゃないよ？

「えーと、他には……」

ほどよく巫山戯たのが功を奏したのかだんだんと拳がる手も増えていった。

内容は好きなものは何か、とか趣味がどうの、とか年相応のものばかりじゃったな。中にはナギに関してのものもあって黒板に描いた似顔絵は好評だったのう。

「えっと、では最後に……超さん」

「おほん。超鈴音ネ。サイリルさん……今の生活は好きカ？」

「おお、久しぶりじゃのう……無論、好きじゃ。感謝しておる」

「それは重畳ネ。今度ご馳走するヨ」

やはり、私をこの時代に送った研究者の中にいた超と同一人物か。やつらが何をしたかったのか分からぬが赤き翼の面々やエヴァに逢えたのはやつらのおかげじゃからな。感謝しておる。

あの時は優しい少女じゃったが……今は影を感じるのう。

なぜ他の猫ではなく私だったのかと言うことも含めていろいろ聞くべきことはありそうじゃな。

「えーと、それではもう一つの嬉しいお知らせを。来週から僕たち3-Aは京都・奈良へ修学旅行に行くそーで、もー準備は済みましたかー!?」

「「「「「はーい!」「」「」「」」」」

……このクラスも、楽しませてくれそうじゃな。

しかし、いくらなんでも騒ぎすぎじゃないかの?

「そういえば、京都は一度行ったことがあるのう……」

ナギたちと一緒に詠春の実家に遊びに行ったんじゃったか。リョウメンスクナは元気かのう……色々な魔獣を喰らった今ならあやつも喰えるかもしれぬな。

「あら、そうなのですか? でしたら京都以外の場所がよろしかったかもしれませんわね」

あやかが少し申し訳なさそうに話しかけてきた。

ふむ……?

「気にするでない。それに生徒が行き先を決められるものでもなかろ?」

「いえ、この学校は人数が多いので修学旅行の目的地はハワイなどの数カ所からの選択式になっていますわ。うちのクラスはネギ先生を含め海外からの生徒も多いので日本文化を知るいい機会だと思ったのですが……」

私が行ったことあるのならつまらないかもしれぬ、ということなの？

「それならますます気にするでない。私は転入生じゃ。クラスの総意に口を挟むつもりはない。それに京都には旧知の者がおるしの」  
「それはよかったですわ」

それにしてもいいやつじゃのう。

さて、私も席に座りたいのじゃが……

「先生、私はどこに座ればよいのかの？」

「えっ!?! あ! そうでした。えっとザジさんの後ろの席でお願いします。それと学園長に呼ばれてしまったので行ってきますね」

兄弟姉妹はなるべく席を離すというのが決まりなので、と言いなから小僧が席の場所を指してくれる。

……ふむ?

……このザジとかいう生徒、さっき私にびびっておらんかったものの一人じゃな。その前におる黒髪で褐色の肌のも……楽しそうな席じゃ。

「ザジとやら、よろしく頼む」

「……こちらこそ」

この目は……魔族じゃな?

どおりで私を見ても動じぬはずじゃ。

……しかし大人しいやつじゃのう。もう二言三言サービスしてくれても……

「サイリルさん、ザジさんは口数少ない人だから怒らないであげてね」

「む、お主は？」

「私は早乙女ハルナ。パルでいいよ」

「そうか。私のことも好きに呼んでたもれ」

「うっひゃー！ 時代っぽい話し方だと思ってたけどたもれなんて初めて聞いたよ！」

ほほー……こやつ、少しアルと同じ臭いがするのう。方向性は違うようじゃが……試してみるかの。

「パル……」

「お、いきなり呼び捨て。いいねー」

「……抱きしめてたもれ？」

「ぶふう！？ やー、ちょっとサイリルさんやるわね！ おねーさんドキドキしたよ！ はっ！？ これが百合で幼女萌え！？」

閃きキター！ とばかりにパルがノートに鉛筆を走らせていく……ふむ、こやつは漫画を書くのじゃな。

さてと……次は……

「お主、なかなかやるのう？」

「ん？ ああ、転入生の。いやはや、彼の有名な血化粧スカーレット・スマイルの雌猫に評価されるとは光栄だな」

「む……うむ、そうか」

考えてみれば、この年齢の関係者じゃと私をそう思っているものは珍しくないんじゃないかな。

じゃが、今まではそうでも……

「その……」

「ん？」

「その名前で呼ぶのはよしてくれぬか？ 私は、人間のために戦ったわけではないが、私欲で戦ったわけでも、」

「そうか。了解したよサイリルさん」

む？

意外とあっさり……？

「ただ、人を殺すことを正当化することはできないよ」

「……知っておる。仕方なかったなどと言う気はない。お主、名前  
は？」

「龍宮真名。傭兵さ。金さえもらえれば何でもやるよ」

傭兵……のう。

こんな時代にも、戦いはまだ残っておるのか。

しかし、こやつなら私の目的の役に立ちそうじゃな。

「のう、真名よ」

「む？」

「このクラスの中で関係者は誰じゃ？」

「従者でも探すつもりかい？ ……そうだな……私の他には桜咲刹那と超鈴音だろう。ただ“やれる”という意味ならその古菲に長瀬楓だな。あと近衛木乃香と明石裕奈は魔法使いの娘だから使えるかもしれないな」

「……なるほどのう。お主は私の従者になる気はないかの？」

こういう場合、とりあえず聞いておく方がよいじゃろ。  
ダメでもともと。いければラッキーじゃ。

「生涯契約、ということになるが？」

「残念ながら宵越しの銭は持たぬ主義でろう」

互いにニヤリとしながら握手だけを交わした。

この者は心意気で契約できるタイプではなさそうじゃな。

必要あれば金で一時的に雇う、というのが正しい付き合い方かもしれないの。

「ちなみに一時間くらじゃ？」

「内容にもよるが十万円からだね。弾薬代なんかは別途追加料金。金さえあれば気軽に声をかけてくれて構わないよ」

「いい商売じゃのう」

いつそのこと、私も傭兵になろうかの。

それこそ悪名だけは轟いているようじゃし、この小娘よりも高い料金で……

「……なんだ、私に興味があるのかい？」

「無いと言ったら空前絶後の大嘘つきになってしまうの」

「はは、魔法大戦で活躍した貴女がね……なんなら一緒に京都を回ろうか？」

ほお、それは確かに魅力的な、

「ちょーっと待ったあ！ 龍宮さん抜け駆けはズルいよ！ ネギ君の叔母的存在で謎の多いエヴァちゃんの妹、さらにさらに超りんと



は旧知の仲みたいなのサイリルさんなら私だって取材したいんだからね！」

「あ、朝倉……私は別に、」

「えーっ！？ サイリルちゃんなら私も欲しい！ 史伽、行くよ！」

「むむ、私も転入生とは手合わせしたいアルね！」

「さあ始まりましたサイリル争奪戦！ 勝者は誰か！？ はーい、賭け金は朝倉和美まで！」

……この朝倉和美とかいう女子、抜け目ないのう。自分だけで流れを作り上げた上で賭けにまで発展させるとは。

騒がしい双子は……一般人じゃの。

そのあとの中華系の女子は……なかなか強そうじゃ。

しかし……このクラス、集まりすぎではないかの？

素質がありそう、という一般人も含めるならほぼ全員が当てはまるのじゃが……これはジジイを問い詰めんといかぬかもしれん。

まさかとは思うが、この中で小僧の従者を探すつもりかの？

私も従者を探さないとな。

「サイ……ちよつと来い」

「む、エヴァ……どうした、気になることでもあったかのう？」

「これは、是非聞いて欲しいのだが……」

「うむ」

なんじゃ？

やけに真面目な顔で……もしかして、私、なにか不味いことでもしでかしたかの？

「いや、そうじゃなくてだ……サイ、お前、ナギから登校地獄の解呪術式を教えられていたよな？ 今年も私も修学旅行に行けるよな！？」

「あ、あー……えっと、その事なんじゃが……その……」

昨日の夜、エヴァの中の鈍いがどうなっているのかを調べたんじや。

その結果はなんというか伝えにくくてのう。  
なんと伝えればいいのかのう。

「ま、まさか……」

「お、おいエヴァ！ そんなに絶望するでない！」

「……マスターは今年こそ行けると先週から京都をリサーチ。日程と照らし合わせて予定も立て、着替えの準備も既に終わって、」

「ちゃ、茶々丸！ いらんこと言うな！ ……サイが、言い出しにくくなるだろう？」

「……すみませんマスター」

茶々丸がペコリと頭を下げる。

……む？

なんだか修学旅行に行けない話になっておるのじゃが……

「結論から言うんじゃ……修学旅行には行ける」

「本当か！？」

「じゃが、それはナギがメチャクチャ適当にやってこんがらがっている呪いを最適化するからじゃ……じゃから、呪い自体は解けぬ」

「なんだと！ し、しかし解呪術式は……」

「なんというか、ナギのはほとんどオリジナル魔法と化しているのう……どうやら、時間の経過ごとに形式が変わっていくようになっておるようじゃ……」

「あの、バカナギ……！」

「すまぬ……」

もし、予定通りの十二年前なら解けたかもしれなかったのに……  
本当に、エヴァにどう謝ればよいのか分からぬ……

「い、いや、サイリルが気にすることじゃない！」

「わ、私は気にしてなど、」

「サイリル様の耳の角度、尻尾の角度が猫がしょんぼりしていると  
きの角度と一致しました」

「茶々丸、いらんことを、」

「や、やっぱりにしているんだな！？ 大丈夫だ！ 修学旅行に  
行けるだけまだマシに、」

じゃ、じゃから気にしてないと言うに。それに……

「自由行動時間も小僧から離れられぬ……」

担任が近くにいないと課外授業ということにならないようなのじ  
や……それは、せっかくのエヴァの予定も水泡に帰すということ。  
綿密にリサーチした上で時間表を相手に唸っていただろうに……

「それも……構わん」

「本当に、すまぬ……」

多分、エヴァに耳と尻尾が付いたら、私と同じような状態になっ  
たじやろうな……

ふぎゃ……ふにゃあ……  
**(前書き)**

次は修学旅行ですー

ふぎゃ……ふにゃあ……

「ふっふっふふーん。たらったらったらーん」

エヴァが鼻歌混じりに修学旅行用の荷物を詰めていく。ネギが近くにいないといけない関係で自分の好きなどころにいけないことは気にしないことにしたのかもしれない。

……結局、私がエヴァにしてやったことは複雑に絡まっていた呪いを整理して理不尽だったところを無くしただけじゃ。エヴァは移動時間と旅館内以外ではネギが見ることのできる位置にいないければならない。

……まあ、エヴァは喜んでいるのじゃし、今はそれで満足するかの。

「さて……エヴァ、少し出掛けてくるから夕飯はいらぬぞ」

瞬間、エヴァが固まった。

「……どこに？」

「そんな心配そうな顔をするでない。ちょっと近右衛門のところにいったあとぶらつくだけじゃ。危険なことはない」

「……わかった。夕飯に間に合いそうになかったら連絡するんだぞ」

そんな母親のようなことを……でもしつこく聞かれなくて安心したのう。近右衛門と適当に話したあとは街に出るつもりじゃったからの。街にいけないエヴァに知られたら拗ねられる。

なに、ネギが近右衛門の孫娘と街に出掛けると小耳にはさんだのじや。街には危険が一杯じゃから私が目を光らせておいてやらんとな。

「じゃ、行ってくるから……寂しくても泣くでないぞ？」

「誰が泣くか！」

「えヴあじゃろ？」

「早くでかけろ——！！！！！」



まったく。

エヴァももう少し私が起きたことに対する感動というか……なんと  
いうか喜びみたいなのを表現してくれてもいいと思うのじゃ。

——照れてるんだよ——

——本当は喜んでるよ——

——昨日の夜もニヤニヤしてた——

「ほう……あのエヴァがのう……ん？」

ふむ……空耳かの？

最近空耳が増えたような気がするのじゃが……

「まさかボケ始めたのかの……？」

いきなり三百六十も歳をとってしまったのじゃから可能性はゼロと  
も言えぬ……

むむむむむ……！

嫌じゃ！

私はまだ若いままでもいいのじゃ！

「近右衛門！！！！」

「ひょ！？」

「……………ボケぬ秘訣を教えたもれ？」

「さ、サイリル殿……いきなりどうしたんじゃ？」

「……っは!？」

そうか、あの後頭部なのじゃな!?

冷静になってみれば後頭部が長いということは記憶媒体たる脳がそれだけ大きいと言うことじゃ!

記憶媒体が大きければ記憶容量も増える……繰り返し利用することによって起きる経年劣化、つまりボケも常人より緩やかになるじゃろう……

「サイリル殿……?」

「い、いいい嫌じゃからな! そんな後頭部に改造するのはやめたもれ!」

「……はて?」

と、とぼけおって……私を改造人間にする気なのは分かっておるんじゃない!

嫌じゃ……そんな頭になったら恥ずかしくて外を出歩けぬ……

「ところで、サイリル殿はなんのようで……?」

「ん、む……んむ。そうじゃった……修学旅行のことでの……」

「……な、なにか質問でもあるかの?」

ええい白々しい!

吹けぬくせに口笛など吹きおって!

いや、吹けておらぬのじゃから吹くというのもおかしいかのう。まったく……私相手に誤魔化し通せると言うてはおらぬよな?

「おい……ネギに何をさせる気じゃ?」

「なに、こちらとあちらの橋渡しをの……」

「それなら魔法も呪術も使える私の方が適任ではないかの？　だいたいネギは詠春を知らぬ。私の方が簡単に済むと思うのじゃが……ネギでないといけぬ理由でも？」

「ネギ君には実績が足りぬからのう……」

箔付け……じゃな。

「ネギは実績以前に弱い……実績だけ積ませたら狙われると思うのじゃが？」

ナギに対しての恨みがネギに向かぬとも限らぬ。そのネギが形ばかりの実績などを手にしたら過剰な戦力が差し向けられるかもしれぬ。実際は対したことがなくても文字になれば重みは変わる……ネギはダイク・エヴァンジェリン闇の魔法使いを倒し、さらに関東魔法協会と関西呪術協会のわだかまりを解いた……こう書けばそこの魔法使いよりも実力があるように見えるからの。

「魔獣すら倒せぬネギには大きすぎる功じゃ」

「……ま、魔獣を一人で倒せる魔法使いなど、」

「赤き翼の面々は魔法無しでケルベラス渓谷を走り抜けたぞ？」

「ま、まだ少年のネギ君には……」

「早い、と？　それができるナギが今も行方不明になっているのにネギにはその力も必要ではないと？」

「む、む……」

「まあよいだろう。ネギにとっては襲われることも強くなる修行になるだろう」

アスナ姫もおるしの。

程度の低い魔法使い相手に殺されるとは考えにくい。それでも危ないときは私がおるしの。



「その代わりに……」

「む？」

「お主の孫娘、貰い受けるがよいのじゃな？」

「なっ!?! いや、儂はいいのじゃが婿殿が……」

「詠春が私に逆らえらとでも？」

ネギを欲するなら代価は頂く。

……なに、とって喰ったりはせぬ。しかしなかなかの魔力の持ち主のようじゃからの。

ネギ以上の逸材などどこにおるか分からぬし……何より自衛の手段がなければ一生を麻帆良で過ごすことになるじやろ。詠春の娘じゃし面倒見てやろうかの。

「まあ、京都で話をつけたらじゃな……ではの」

「さ、サイリル殿！」

「私は忙しいんじや。用は済んだからもう行くとする」

翼を生やして、と……れつつごーじやな。

学園長室の窓を一蹴りして飛び立つ……うむ、飛ぶのは久しぶりじやが問題ないようじやの。

まあ、魔獣を喰らって吸収した時点で私の体の一部になるのじやから当然じやがな。

えーと、とりあえず……街ってどっちなんじやろ？

昨日の昼間にネギと近衛木乃香が歩きながら話しているのを耳にしたらだけじゃからのう……流石に麻帆良の外のことは寡聞にして疎いのじや……

「どうしたもんかのう？」

——駅にいきばいいよ!——

「とは言っても行き先が分からぬのじゃよ?」

——いいから、いいから!——

まあ、そこまで言うのなら……言うのなら?

……ち、地上百メートルという高度で誰が私に話しかけるのじゃ? げ、幻聴が進んでおる……

い、いや、今のは神からのお告げじゃ! そうに違いない! と、とにかく駅に向かってみよう!

……これでネギたちが見つかれば嬉しいのじゃが……

「む? ……あれは」

残念ながらネギたちではなかったが……あの三人組の一人は見覚えがある。初日に私に質問をした……椎名桜子じゃったかのう?

闇雲に探すのは効率が悪いし、あの三人も巻き込もうかの。

とりあえず、バレぬように着地してと……後ろから追いかけるかの。こほんこほん……

「おーい! 待ってたもれー!」

「「「ん?」」」

よし、とりあえず第一段階は完了じゃ。

「あ、サイリルちゃん」

「お主は桜子じゃな? えと、それと……」

あとの二人はなんじゃったか。途中から名前を覚えるのを諦めたか

らのう……

「えとね、黒髪が円でこっちが美砂だよ！」

「ふむ、マドカ……ミサ……よし、覚えた。それで三人はどこにいるんじゃ？」

「ん、修学旅行の準備のために街に……あ、原宿ね」

と、マドカ。

なるほどのう……駅に来たのも間違いではなかったようじゃの。

「麻帆良の外で街というとそのハラジュクになるのかの？」

「まー、そうなんじゃない？　なに、興味あんの？」

「というよりネギと近衛木乃香がの……」

「なにになに……ふむふむ……えゝゝ！？」

今度はミサに二人がこそそと街へと出掛けたことを説明する。

……そこまで驚くことなのじゃろうか？

「いや、二人きりで買い物ってデートじゃん！」

「デート！？　ネギ君、生徒に手を出しちゃったの！？　わゝ、やるねゝ」

「いや、桜子……この場合、このかが手を出しちゃったんじゃ……」  
「確かに。アスナは早く寝ちゃうし、そのあとでイケナイことを……」

ごくり

姦しく騒いでおった三人が同じタイミングで生唾をのみこむ。イケナイことって……たかだか十五歳の小娘がなにを色気付いておるんじゃ。

「だいたいネギはまだ十歳じゃ。たつものもたたんし、出るものも出ぬ」

そもそも固くならんのじゃ男はともかく女が気持ちよくなれぬじゃろ？

「あ、あー……サイリルちゃんって結構オトナ……」

「そりゃ、まだ初心な未通女おぼこと比べられてものう……」

「えゝ!？　じゃあサイリルちゃんて……」

お主らの何十倍かは生きておるんじゃ。男など知り尽くしておる……アルとかラカンのエロ本での。

まあ……エヴァみたいに後生大事にとっておいているものもいるがの。

私達は仔を宿すか宿さぬかは自分で選べるのじゃから慎重になることもないじゃろうに。

「ということで二人を追いかけたいのじゃが……協力してたもれ？」

「んー、私達も準備しなきゃいけないから長い時間は無理だけど……

……まあ、桜子がいるから平気かな」

「？」

ミサとマドカが意味ありげに桜子を見て笑った。

……どういことじゃ？

桜子も実は近衛家並みの大家の生まれですごい情報網を持っておるとか？



「ネギ君とこのかはっけーん☆」

「おお……」

さっきのはこういうことじゃったのか？

駅で原宿に到着してから桜子の当て勘でさ迷うことわずか五分弱。

桜子はブティックとやらで買い物をしている二人を見事に発見したのじゃ。

なにやらしい雰囲気じゃのう。

ナギの息子のネギに近右衛門と孫娘……これで早いうちに子をなせばチートとも言える魔力量を持った子が生まれるやも知れぬの……さらに頃合いを見てエヴァに吸血鬼化させて二百年も生きれば過去最高の魔力タンクになるのう。

そして私がそれを喰らえば……もちろん全部冗談じゃよ？

それより……椎名桜子か……

「ふむ……こやつもそれなりに……」

「うん？ リルちゃんにか言った？」

「りるちゃ……！？」

な、なんじゃそのふわっとした呼び方は……！

なんだか首の辺りがぞわっとふわっとくすぐったいのじゃが！？

「ん……だってサイリルってなんだか女の子っぽくないし」

し、失礼な……！

いや、確かに可愛らしさとは無縁の名前じゃが……

「……まあよいが……あだ名をつけるのならちゃんをつけるでない。どちらかだけがいい」

「じゃあ……リル？」

「うむ」

それくらいならただのあだ名じゃからの。それに……まあ、なんというか……可愛いしの。

ん？

待て、待つのじゃ桜子。  
なぜ、その魔獣を襲うときの私のような目をしておるのじゃ？  
そして、それを私に向けるのぴゃっ！？

「やっぱりリルちゃんがいいー！」

「うにゃあ！？　だ、抱き寄せるでない！　離せ！　はくなくせく  
！！」

「リルちゃんって呼んでいいなら離してあげる」

な、なんて強かな！

……べ、別にこれくらい自力で……！

「でもリルちゃんのネコミミ、本物なんだね」

「ふにゃあ……」

み、耳の裏を撫でるのは反則じゃ……！

人の形はとっておるが猫としての本能が刺激されて……心地よいの  
お……ダメじゃ、力が抜けて拘束から抜け出せぬ……

「あ、尻尾がくねくねしてる。うちで飼ってた猫ちゃんも気持ち  
いいとこんな感じに尻尾揺らしてたよ」

「し、尻尾掴むでない！」

よ、余計に力が出なくなる……

「も、もう好きにしてたもれ……だから離して……」

「ほにゃらばりルちゃんにけってーい！」

「あのさ、二人ともじゃれるのはいいいけどネギ君たち移動するみたいよ？」

っは！？

す、すっかり忘れておった……うぬぬ、椎名桜子め。私の天敵じゃな！

わ、悪い奴ではないようじゃがな。

「そ、それでネギはどこにおるのじゃ？」

「ほら、あそこの階段。このかと話してるよ」

ふむ……大分疲れておるようじゃの。目がぼんやりしておる。

今の私の目は鷹並みの視力じゃ。

「あ、ネギ君寝ちゃった」

「やっぱり女子中学生と買い物いくには体力が足りなかったようね……でもこのか、膝枕とかいいなー！」

「美砂は彼氏にやりなよ」

「いや、少年にやるのがロマンなのよ！」

煩いのう……このかがなにか言っておるのじゃが……耳の構造もいじるかの。

なになに……

「疲れよ飛んでけー♪」

ネギの頭上で人差し指をくるくる回したあと、その人差し指を天に向けて……人間のおまじないかの？

しかし、今近衛木乃香の人差し指に魔力が宿っていたような……あ

れが近衛木乃香の癒そうという意思に反応して放出されたのなら…  
…回復魔法の素養が有りそうじゃな。

「そういえばネギ君にキスすればカードが出てくるんやった!」

って、おいおいおいー!?

あのオコジョがおらぬとキスしても意味ないんじゃよ!

「ん〜♪」

「「「あ〜〜!!!」」」

後ろの三人が叫び声をあげて前のめりに……わ、ちょ、押すでない!  
転ぶ! 転ぶー!?

「ふぎやつ……」

「やっぱやーめた……あら?」

……痛い。

すごく……痛いのじゃ。

「ぐすん」

「あつ、リルちゃん大丈夫!」

「うう、怨むのじゃ……」

「ごみーんに? えへ」

桜子! お主、まったく反省しておらぬじゃろ!?

しかもネギたちにもバレたし、なぜか知らぬがあやかにアスナ姫まで来おったし……

「ネギ君、どうやらバレてたみたい」



「ええ〜！？ 驚かそうと思ってたのに」

もしや二人は本当にデキておるのか？ って、あやか落ち着け！  
私のネギ先生とか言っちゃっておるぞ！？

むう……よもやこの歳で孫が出来るとはのう。いや、身体年齢じゃ  
と四百五十なのじゃから孫がいても……というより夜叉孫くらいで  
も不思議ではないのじゃが。

……しかし、私はもう子を成せるようになったのかのう？

「うーん、こうなったらしゃーないなあ」

「そうですね。一日早いけど……えと……」

む？

ネギがアスナ姫にラッピングされた箱を……？

「はい、アスナさん。四月二十一日の誕生日おめでとうございます」

む？

「あ、そういえば……」

あやかが手をぽむと打つ。

……待つのだじゃ。私、なにも用意しておらぬぞ！？

「わ、私たちもプレゼントあるよ！ はい、ダンベル！」

「ペアルック！ このかと着て！」

「あと、その他いろいろ！」

ああ！ お主らずるいぞ！ 裏切り者！

「あ、えと、私からは……ちょ、ちょっと待っておれ！」

「あっ、サイリルさん！？ ……転校してきたばっかなんだから気にしなくていいのに」

「いや！ 旧友の誕生日なら祝うのが当然じゃ！」

「級友で……まあ、いいけど無理しなくていいからね？」

「すぐすむ。誰か紙とペンを持ってないかの？」

「あ、メモ帳とボールペンでよければ僕が」

でかしたネギ！

紙を一枚破りとして……まーる書いてちょん、まーる書いてちょん、ダビデを書いてゝギザギザギザ……最後に私の名前を……

「ほれ、これを」

「シリルS i l i l ……？」

「サイリルじゃ……私の助けが必要になったら破るとよい。一瞬でたどりつくからの」

アスナ姫の耳元に小さく囁く。

紙に書いたのは私を示す記号と召喚の魔法陣。紙を破れば私が召喚されるといふ代物じゃ。

「あー、リルちゃんなにあげたの？」

「む？ えーと、あれじゃよあれ……一日メイド券じゃ。一日限定でメイドを勤めてやるのじゃ」

「ほほお……私もほしいにゃ〜♪」

「た、誕生日がきたらの……」

「じゃ、六月九日だからね！」

「う、うむ。了解じゃ……」

桜子は私の回りにいなかったタイプじゃの……調子が狂うのじゃが

……まあ、嫌いではないのう

**にゃにゃーん（前書き）**

なぜかシリアスに……  
いや、うん、しかたない。

## にゃにゃーん

今日は班員と修学旅行の打ち合わせじゃ！

結局、メンバーは私・エヴァ・茶々丸・桜咲刹那・ザジとなったのじゃが……妙に魔力やら気やらが充満しておるのう。

このメンツなら下級の竜種程度なら無傷で群れごと討伐できそうじゃな。

いや、もちろん京都観光に行くのが主目的なのじゃが……

「えと、まずは自己紹介じゃな。私はサイリル・マクダウエル。まあ、このメンツなら問題なさそうじゃから言うが偽名じゃ。スカーレット血化粧ト・スマイルの雌猫と言うのが分かりやすいのじゃろうが……できれば赤き翼のサイリルじゃと思ってほしい」

私の通り名が出た瞬間、場が凍り付いたのう。クラスで聞き耳をたてていた者たちの一部も反応しておるわ。

一人は真名じゃろうが……もう一人は分からぬ。

「それでこっちが知っての通りエヴァンジェリン・マクダウエル。

彼の有名な大魔法使いで吸血鬼じゃが口下手なので私が代わりに、」

「誰が口下手だ！ 誰が！」

「——と、このようにマスターは普段からサイリル様とじゃれております。私はお二人のサポートを生き甲斐としているガイノイドの絡繰茶々丸です」

ナイスじゃ茶々丸。

今の寸劇のおかげで私への警戒も少しは薄れたじゃろ。

魔法関係者以前にクラスメイトなのじゃから友人として付き合いたいからの……

「私は桜咲刹那……お二人が素性を明かしたので渡しも言いますが京都神鳴流で、とある役目のために麻帆良に来ています」

「すまんのう……正体を聞き出そうとしたわけではないのじゃ。ただ、私のことは知っておいて欲しかったからの……」

「いえ、あなた以上に正体を明かすのに勇気が必要な人もいないでしょうから」

変な奴じゃ……私が大戦での虐殺者とされているのを知りながらも笑っておる。

日々鍛練をしておるから人より胆力があるとかそういうことなのかもしれないが……それでも普通は身構えるじやろ。

「刹那は詠春の弟子だ。本当のお前を知っていてもおかしくはないだろう」

「そう……なのか？」

やはり不安で上目遣いに刹那を見ると微笑と共に頷かれた。

「弟子ではありませんが……話しは聞いています。私の友人だから困ったら頼りなさい、と」

詠春が私を友人だと……？

「ふん、相変わらず他人を頼りにするとは情けない男だ」

「……それ、だけかの？ 詠春は他にはなにも？」

「え？」

「私を、恐れていたりしなかったのかの？」

私を虐殺者だと罵ってはおらなかったのかの……？

「ああ、そういえばサイリルさんの変化には気を付けなさいと……  
珍しく歯切れは悪かったですが……」

「詠春は未だにむつつりなのか……京都でからかうのが楽しみだな、  
サイリル。サイリル？」

「ふあっ！？ ……ああ、そうじゃな。存分に誘惑してやるかの」

少しサービスしてやろう。私も詠春も奥方に怒られるじゃろうがな。  
……そうか、私がなんと言われているにも私を友人と言ってくれてい  
るのじゃな。

「それで……」

「ザジ・レイニーデイ………魔族」

「うむ、よろしく、頼むのじゃ」

さて、じゃ、旅行の計画を……む？

「京都の名所は――」

「それでしたら――」

「しかしぼうやのことを連れ出さねば――」

「真剣に頼んでみれば先生も――」

も、盛り上がっておるのう。

若干エヴァが食いつきすぎている刹那も引き気味じゃが……旅行の  
プランは二人に任せよう。

少し、エヴァに秘密にして聞いておきたいこともあるしの。

「ザジ」

「……？」

「聞きたいことがあるのだが……史実での私は——」  
「……それは——」



「リク・ラク・ラ・ラック——」

話し合いが終わって放課後。  
体が鈍っていないかを確認するためにエヴァの別荘で軽く魔法戦じや。

京都では私もエヴァも襲われる可能性があるからの。

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト ——」

——火矢・連弾・９９——

「氷の９９矢！」

「火の９９矢！」

「ふむ……センスは鈍くなっていないみたいだな…………どんどんいくぞ？ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック ——」

——光の劫火・光矢・連弾・１００１——

「闇の吹雪！」

「光の劫火！ あーんど、光の１００１矢じゃ！」

「くっ……闇の１００１矢！」

ふうむ……なるほどのお。

やはりこの風の囁くような声は私を助けてくれるらしいのう。  
しかも若干の先読みもしてくれるみたいじゃし……ラッキーじゃな



あ。は

——風矢・10・火矢・集束・50——

「キャット・ザ・ナイト——」

戒めの風矢……？

風で火をサポートするということなのかの？

まあよい……とりあえず……

「戒めの風矢あーんど、火の50矢！」

「なに、そんなもの……」

まあ、普通に避けるじやろうな。

……まあ、指示通りに魔法を使っても意味がないという、

「ぬおお！？」

「む？」

集束させた火の矢の周りを風矢がグルグルと回り始めたのう……  
おー？

今度は火球自体が竜巻に……

「ちょ、あつ！ 熱いぞサイリル！」

「いや、しかし訓練中じゃし手を抜くなど言っておったではないか」  
「いや、言った！ 言ったが！」

——風障壁——

ふむ……風属性はあまり得意ではないのじゃがな。

——手伝う——

……まあ、やるだけやってみようかの。

「キャット・ザ・ナイト・ヘル・バイト 逆巻け春の嵐 彼の者に  
風の加護を 風花旋風 風障壁！」

先に生まれた火の竜巻をさらに包み込むようにして大きな竜巻が発  
生したのじゃが……えらくでっかい火の竜巻が完成したのう。  
中にいるエヴァ、死んでもおかしくないと思うんじゃが……

——燃える天空——

「いやいや、さすがに死ぬじゃろ？」

——倒さない？——

……この声の正体は何者かは分からぬが随分と好戦的じゃのう。  
ただ、その一方で口下手というかなんというか……悪い奴ではない  
のじゃろうが。

私に危険が迫っていると、

——右に十歩、後ろに三步、我慢——

「氷神の戦鎚！ こおる大地！ 氷爆！」

十歩右に行けば左に氷塊が墜落し、さらに三步下がれば巨大な霜棘  
が地面から突き出てくる……

そして氷爆は……が、我慢じゃと！？

ちょ、痛いのも冷たいのも苦手なのじゃが!?

——ダメ——

えー！ー！？

仕方ないのう……仕方ないのう！

女は度胸じゃ！

「くうっ！」

「断罪の剣！」

氷爆を我慢している間に炎の竜巻からエヴァが脱出……断罪の剣を、

「はあっ！ ……おお？」

「む？」

……空振った？

なるほど、我慢せずに避けていたら斬られていたと言うわけじゃな？  
確かにエヴァは地獄耳じゃから音で敵の居場所を察知できるみたい  
じゃからな。

——火矢・1——

「私の、勝ちじゃ！」

放った火の矢をエヴァの眼前で方向転換、地面にぶち当てた。

……ふむう……しかし声があると少々もの足りぬな。

——いのちをだいじに——

「いや、私はガンガンいこうぜ派なのじゃが……」  
「む？ サイリル、誰と話してる？ ちなみに私はいろいろやろうぜだな」

——いのちをだいじに——

「二回言われては仕方ないのう……戦闘で死ぬことなどもう考えられぬのじゃがな」

「……サイリル、お前は不死者ではないんだから少しは慎重にだな」  
「……ラカンを重ね状態にまでおいやった私が死ぬわけなかる？」  
「うわ……因果関係はないのに不思議と納得できるな………」

ラカンの名前にエヴァが露骨に嫌な顔をする………そういえば闇の魔法の巻物を取り上げられておったのう。  
賭けで負けたんじゃないか？

「あれがあればサイリルにも闇の魔法を伝授できたんだがな……」  
「いや、私は魔物でも魔獣でもないんじゃないが……？」

確か、闇の者専用の戦闘スキルじゃよな？  
私、闇属性に適性皆無じゃし性格もあっけらかんとした前向き思考じゃから無理だと思うのじゃが？  
それなら咸卦法でも練習した方がましじゃな。

「なら咸卦法でもやってみるか？」  
「私は魔力も気も使えるからのう……む、待て、私は妖力も持っておるのじゃが三つ混ぜたらもっと強いと思わんかの！？」

「いや、サイリル、試すなよ？」

えーと、なんじゃったかの………確か心を虚無にして、

「右手に魔力、左手に気……」

ぼうつ

む、咸卦法はできたようじゃ。

えっとさらに妖力を……体のどこに集めりゃいいんじゃ!?

片足……いや、本来四足歩行の私にとっては二足歩行ですら大変なんじゃ、一本足で立つなど不可能……ならば……

「尻尾に妖力……!」

私、天才なんじゃないかの?

普通の人間には尻尾を使うなんて発想できないはずじゃ!

よし、この尻尾を組んだ両手にゆっくり……

つばあん!

「ふぎゃ!?!」

「うおお!?!」

な、体が弾かれ……!?!?

ズドン!

「いっ………たいにゃあ!?!」

エヴァの別荘に頭から激突したにゃ!

うー………頭がぐわんぐわんするのう。口調も地が出てしまったから  
落착かんと……

「エヴァ……大丈夫かの？」

「サイリル……まさか十五年前の失敗を忘れたんじゃないだろうな……？」

「私の猫生に失敗なんてないのじゃが？」

「いきなり最上級魔法を二つ融合させようとして失敗したのはこのクソ猫だ！？」

く、クソ猫じゃないもん……サイリルだもん。

って今のは私にも言い分があるのじゃ！

「あの時は失敗などしておらぬ！ その証拠にきちんと役目は果たしておった！ ただ、精霊を上手く宥められなかっただけじゃ！ つまり真心が足りなかっただけじゃ！」

「真心で魔法が使えるかぁー！」

「そ、それに今のだって成功した手応えはあったんじゃ！ ただ、予想以上にエネルギーが強すぎて使い物になりそうになかったがの！」

「威張るな！」

なんじゃよう……エヴァは少し厳しすぎじゃ……

百聞は一見にしかず、百見は一考にしかず、百考は一試にしかずじゃ！

つまり結局ものは試し！

一回試すことは一万回聞くのと同じだけの価値があるんじゃ！

「開き直るんじゃない！」

「開き直っておらぬ！」

だいたいあれがなければ問題点もわからなかったじゃろ！

精霊を御することさえ出来れば直感的な魔法の融合も可能なんじゃ！  
ふん、魔法式で融合魔法を考案している奴らの度肝を抜いてやろう  
ではないか……

「魔法はそんな万能な力じゃない！ 法と付く以上ルールがあるのは分かるだろうが！」

「分からぬ！ そのルールは誰が決めた！ これまでの魔法融合の基礎学だって精霊同士の相性から逆算しただけ、結局は人間が危険じゃない位置で足を止めただけじゃ」

危険を冒さずして得た技術などで満足しておるから不可能ばかりなんじゃ！

今のルールを超えた魔法融合が可能になればもっと沢山のことが可能になる！

もちろん人々がさらなる力を持つことに懸念を持つ必要はある……じゃが発展の遅い回復魔法だって急激に増えるはずじゃ！

それに、不可能が不可能なままでは困る……

「危険を冒せば不可能はなくなるか？ そんなわけないだろう！」

「ある！ 半永久機関の流転型環状魔力炉の発明もそうではないか！ 先天性魔力浸透症の根本治療だって不可能と言われていたじゃろ！」

奴等は血反吐を吐く勢いで、全人生をかけてようやくあれを成し遂げたのじゃぞ！

あの努力がなければ今も不可能とされていたままだったことは想像に易いじゃろう！

「それが何かは知らんがサイリルが危険を冒す必要はない！」

だいたいあの偉業を知らんじゃと!?

エネルギー問題を一拳に解決したし、生まれた直後から魔素中毒を進行させて死に至る小児も減ったではないか!

どちらも二千七十年の火星破滅の危機を回避するために全ての種が、  
ぐいっ!

「訳の分からんことを言うな!」

「分からず屋はエヴァじゃろ! 私が可能だということを示せば研究される! 研究されれば魔法も増える! もちろん回復魔法だって増える! そうすれば助かる人だって、」

「人を助けるだど!? 人間に期待しすぎだ! 終戦の一助となったお前を人間にはなんと呼んで蔑んでいる!? ……仮にお前の言った通りになったとしても、お前が使う凶悪な魔法を研究して回復魔法を発見したと、そうなるに決まってる……それならサイリルだって静かに生きた方がいいだろ?」

「だからじゃ!」

私は……終戦へと導いて英雄と称された。  
スカレット・スマイル  
でも今では血化粧の雌猫と呼ばれ恐れられているんじゃない……

「エヴァが教えてくれたことなど私を責める言葉のなかでも優しい方じゃった……」

「サイリル……調べたのか?」

調べた……魔力が足りぬと幼児を喰らい、戦の原因になるからと様々な種族を根絶やしにした。

それどころか意味もなく子供の前で笑いながら親を刺し殺し、その肉を子供たちの口に押し込み窒息させたとか、死なぬように魔法をかけた上で腹に孔を開け食べたものか腹から出てくるのを娯楽とし



ていただとか……

気にしないように……笑いながら過ごしておるがやはり絶望する。

「サイリル……」

「一番大変な戦後に姿を現さなかったのじゃから悪く言われるのは構わぬ……じゃが、私は意味もなく人を苦しめておらぬし……なにより、どうして人はそれを信じたんじゃ……？」

「それは……」

決まっておる。

私が亜人ですらない人外だからじゃ。普段から猫の姿で活動し、その癖に人語を話す人間でも亜人でも……もちろん魔獣ですらない化け物だからじゃ。

人は、未知を恐れる……

「じゃあ……サイリルが不可能を減らすのは……」

「……私が高んなのかを明らかにしてほしいんじゃ」

化猫と名乗っておるが……私の父も母も、長老猫ですら喰らったものを自分の力にする特徴など持っておらなかった。

ましてや翼を生やし、鱗を纏い、凶悪な爪牙を振るうなど……

「サイリルは……サイリルだ……何も気にしないでいいんだ」

「じゃが！」

「お前は人間が好きなんだな……」

「エヴァもじゃろ？」

何百年と追われ続けてなお人に紛れて暮らすのじゃから……

「恐れられながらも人間を発展させようとするサイリルほどじゃな

い……それに、結局は人間に認めてもらいたいんじゃないか」

「……………」

「従来とは異なる様式の魔法融合も回復魔法のために確率させたいんじゃないか？」

「…………どうじゃろうな」

本当は……私を蔑んだ人間たちを一掃するために力を欲しておるのかもしれない。

本当に、本当にショックじゃったからな。

「……正直、サイリルの事情はどうでもいい」

「なっ!？」

いくら喧嘩みたいになっていたとはいえ、それは少し冷たくないかの……？

「だが、私はもうお前を失いたくない。またお前が無茶をして命に関わる失敗をしたら……」

「ふなあ!？ え、エヴァ？」

きゅ、急に抱きついてくるでない！  
危うく尻餅をつくところじゃった。

「……エヴァ？」

「私にお前を封印させるなどということを……二度とさせないでくれ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4486s/>

---

魔法化猫 ネコま！

2011年10月10日15時14分発行